

史 跡

上之国勝山館跡 XIII

——平成3年度発掘調査環境整備事業概報——



1992・3

上ノ国町教育委員会

史 跡

上之国勝山館跡 XIII

——平成3年度発掘調査環境整備事業概報——

1992・3

上ノ国町教育委員会

序

昭和54年に着手しました国指定史跡上之国勝山館跡の環境整備事業は、今年で13年を経過することになりました。

ここ数年の遺構確認調査で館正面部分の様子が次第に明らかになって来ています。その一部は張り芝を行い二重の空塗跡として整備をしたところあります。

本年度は正面北西部の一番広い平坦面の調査を行いましたところ、今までの調査では見られなかった大型の建物跡が見つかり、建築史の側からご指導をお願いしております文化学院鈴木亘先生から、記録に見る「客殿」に比定し得る物かとのお教えをいただきました。勝山館の成り立ちを知る重要な手掛りと思われます。

文化庁記念物課をはじめとする関係各機関の諸先生、勝山館跡調査研究専門員としてご指導をお願い申し上げております朝尾直弘、網野善彦、石井進、榎森進、仲野浩の各先生にはご多忙中のところ、多大なご指導を賜り厚く御礼申し上げる次第であります。

新しく発見されたことも含め、更に検討を重ねなければならないことが数多く残されています。

文化庁はじめ関係諸機関、諸先生方には一層の御指導、御助力を賜りますようお願い申し上げます。

平成4年3月

上ノ国町教育委員会

教育長 和泉定夫

本文目次

序

本文目次／挿図目次／表目次／写真図版目次

例言

I 調査の概要	1
II 遺構確認調査	1
1 調査目的	1
2 検出遺構と出土遺物	4
(1) 位置・概要	4
(2) 番号	4
(3) 挖立柱建物跡	4
(4) 石敷・礎石建物跡	29
(5) 壓穴遺構・土壤	31
(6) 桁列跡地	43
(7) その他の出土遺物の概要	43
III 小括	50
IV 保存処理	51
1 木製品	51
2 鉄製品	51
3 銅製品	51
V 上之国勝山館跡出土鉄器・鉄塊の 金属学的解析(1)	52
VI 動物遺体・貝製品・骨製品	54
VII 勝山館出土植物遺残の識別	57
VIII まとめ	59

挿図目次

第1図 遺跡地形図・調査区位置図	2
第2図 調査範囲図	3
第3図 調査区遺構・建物跡配置想定図	5
第4図 調査区土層堆積図1	7
第5図 調査区土層堆積図2	11
第6図 第1号建物跡想定図	13
第7図 第2号建物跡想定図	15
第8図 第3号建物跡想定図	17
第9図 第4号建物跡想定図	19
第10図 第5号建物跡想定図	21
第11図 第6号建物跡想定図	22
第12図 第7号建物跡想定図	23
第13図 第8号建物跡想定図	25
第14図 第9号建物跡想定図	27
第15図 第10号建物跡想定図	28

第16図 石敷・礎石建物跡平面図	29
第17図 第39号竪穴遺構平面図	30
第18図 土壇1平面図他	34
第19図 土壇22平面図他	35
第20図 土壇28平面図他	37
第21図 土壇9、土壤27平面図他	38
第22図 土壇3、6、14、15平面図他	39
第23図 出土遺物(陶磁器)	46
第24図 出土遺物(鉄製品)	47
第25図 出土遺物(鉄・木・石製品)	48
第26図 ヒグマ末節骨加工品	56

表目次

表1 16L15竪穴39出土遺物観察表	31
表2 16L24、25土壤1出土遺物観察表	34
表3 17M6土壤22出土遺物観察表	40
表4 16L2土壤28+16L9土壤9出土遺物 観察表	41
表5 16L3土壤27他出土遺物観察表	42
表6 陶磁器観察表	45
表7 鉄製品他観察表	45
表8 陶磁器集計表	49
表9 鉄製品集計表	49
表10 銅製品他集計表	49
表11 鉄器・鉄塊の化学組成	52
表12 魚類出土量	55
表13 哺乳類出土量	56
表14 イヌ主要部位計測値	56
表15 勝山館跡出土種子	58
表16 勝山館跡出土炭化米計測	58
表17 勝山館跡出土種子	58

附図 調査区遺構配置図

写真図版目次

PL.1 遺跡遠景
PL.2 遺構検出状況
PL.3 石敷・礎石建物跡
PL.4 土壇調査状況
PL.5 遺構検出状況
PL.6 調査状況
PL.7 遺物出土状況
PL.8 出土遺物
PL.9 調査区中景

- PL.10 遺構検出状況
- PL.11 遺構検出状況
- PL.12 遺構検出状況
- PL.13 遺構検出状況
- PL.14 墓穴建物跡
- PL.15 土壌検出状況
- PL.16 棚列・溝跡検出状況
- PL.17 遺構検出状況
- PL.18 磁文土器出土状況他
- PL.19 鉄製品分析資料
- PL.20 鉄製品分析資料
- PL.21 鉄製品分析資料
- PL.22 魚類・貝製品・骨製品
- PL.23 イヌ・ネコ・ウマ
- PL.24 大型果実
- PL.25 小型種子
- PL.26 栽培植物
- PL.27 栽培植物
- PL.28 その他の種子と塊状炭化物

例　　言

- 1 本書は史跡上ノ国勝山館跡の平成3年度発掘調査及び環境整備事業について概要をまとめたものである。
- 2 本年度の発掘調査は次の体制でのぞんだ。
調査主体者 上ノ国町教育委員会
教育長 和泉定夫
指導 上ノ国町文化財保護審議会特別委員
　　北海道大学教授 足利富士夫、文化学院
講師 鈴木亘
　　勝山館跡調査研究専門員 山形大学教授
仲野浩、東北学院大学教授 稲森進、東京
大学教授 石井進、神奈川大学短期大学部
教授 网野善彦、京都大学教授 朝尾直弘
主管 上ノ国町教育委員会文化課 講師 関
登志夫 主事 笠浪甲衛 事務補 笠浪美
由起
発掘担当者 学芸員 松崎水龍
調査員 学芸員 齊藤邦典
調査補助員 山崎洋子
作業員 浅原すみ 笠谷奈智子 川合冴子
杉村八重子 竹内正章 竹内江美子 出村
喜作 南部谷嶺 沼沢国枝 八田揚子 細
川キヨ子 松本清 南谷澄子 森恵美子
鷺田フミ子
- 3 本書の編集は松崎、齊藤が協議の上松崎が行った。
　　本書の作成はI・遺物観察表・集計表を山
崎、IVを齊藤、他を松崎の分担で行った。
　　なお、鉄器・鉄塊の金属学的解析を岩手県

立博物館赤沼英男、動物遺体等の分析を国立歴史民俗博物館西本豊弘、植物遺残の分析を東京大学総合資料館松谷暁子の各氏にお願い申し上げ、玉稿を頂戴することができたので、V、VI、VIIとした。

- 4 掃図の作成は担当者の指示に従い作業員が行なった。掃図中の北方位は真北を示す。
- 5 土層の土色については「新版標準土色帖」(農林水産技術会議事務局)を用い遺物の色調名については、「標準色彩図表A」(日本色研事業株式会社)により目測で比定した。
- 6 調査にあたっては次の関係機関と各位に多大な御指導と御援助を賜った。(順不同)
文化庁記念物課 田中哲雄 加藤允彦 服部
英雄 北海道教育庁文化課 木村尚俊 種
市幸生 大沼忠春 桧山教育局 牧野義則
伊賀治康 宮城教育大学 遠藤敬 富山大
学 宇野隆夫 前川要 京都造形大学 内
田俊秀 東洋文庫 渡辺兼庸 国立歴史民
俗博物館 福田巖彦 吉岡康暢 小島道裕
千田嘉宏 北上市立博物館 本堂寿一 平
泉町郷土館 荒木伸介 岩手県埋蔵文化セ
ンター 三浦謙一 松本建速 滝岡町 工
藤清泰 中里町教育委員会 齊藤淳 平泉
町教育委員会 本澤慎輔 及川司 八重樋
忠郎 松前町教育委員会 久保泰 八雲町
教育委員会 三浦孝一 乙部町教育委員会
森広樹 今金町教育委員会 寺崎康史

I 調査の概要

1 調査

勝山館の主体部は三段の平坦面から形成されている。自然の谷と前後の空堀、櫓列等によって囲まれた平坦面に建物が建てられている。

第一平坦面は正面の空堀を掘り上げた土をその外側に盛土整形して作られており、さらにいくつかの小さな段に区切られる。広さは約5000m²。二段目の平坦面は約7,000m²と最も広くやはり段に区切られる。第三平坦面は約3,500m²で台地が狹まる傾斜面の高い方を削って盛土整形をしている。いづれも中央部分に通路が設けられる。

本年度の調査は昨年に続き第二平坦面北東部分1200m²を実施した。

調査は5月24日～12月27日まで行った。調査方法は従来通り20m×20mの大グリッドを分割した4m×4mの小グリッド方式とした。又建物の概要を知るため柱穴配置略図1/40を作成し柱穴間の重複、覆土の状態を観察しながら柱穴を掘り下げた。尚焼土等は半裁しセクション図作成後掘り下げ、土壤のサンプリングを行った。遺物取上げは、I、II層は4m×4mのグリッドを4分割して2m×2m毎の一括取り上げ方式とした。遺構面であるIII層は実測図を作成後レベルを附して取り上げた。遺物取上げは縮尺1/20の平板実測、遺構面実測は1/10、1/20その他による平板及び遺り方測量とした。

5月24日発掘調査事業開始

作業内容、就業規則その他説明、調査区史跡地内踏査、関連出土品等の説明。

5月27日表土除去作業を開始。

6月15日ほぼ全区のI層下面までの除去作業を終える。

6月17日柱穴・焼土・土壤その他の遺構が検出され始め配置略図作成開始する。

6月24日17M2区より広範囲な玉砂利敷を検出。

6月26日17N15、20区集石部分検出。

7月24日17M3区より柱穴掘り開始。

8月20日16M24区炉転用鉄鍋実測。

9月9日堅穴39号平面実測。

9月30日16L2区17M6区他で大形土壙検出。

10、11月平地部端部に櫛列跡、平場に掘立柱建物跡、礎石立の建物跡、土壤、溝等を検出、遺構精査。

12月11日写真撮影、実測、レベリング作業終了。

12月27日用具の点検・埋戻しを終え終了した。

2 基本層序

I層 表土層、10YR3/3暗褐～10YR4/4褐色シルト。草根多量。やや密。

II層 館施設後の自然堆積層。10YR3/3暗褐～10YR4/4褐色シルト。やや密。炭化物、Os-a混入。無分される。Os-a純層も含まれる。

III層 燃機能時の整地盛土層。10YR4/4褐色～10YR5/8褐色。密、ソフトローム粒・炭化物等多量に含有する。細分される。

IV層 繩文期以後より館が形成される直前までの自然堆積層。黒、～7.5YR3/3暗褐、シルト。從来までのIVb層はIVa-1としIVa層の中に含めた。

V層 10YR6/6明黄褐火山灰。やや密。

VI層 繩文期包含層。10YR4/6褐色、シルト、やや密。

VII層 10YR5/4にぶい黄褐色～10YR5/6黄褐色、ソフトローム。

VIII層 ハードローム。

3 保存処理

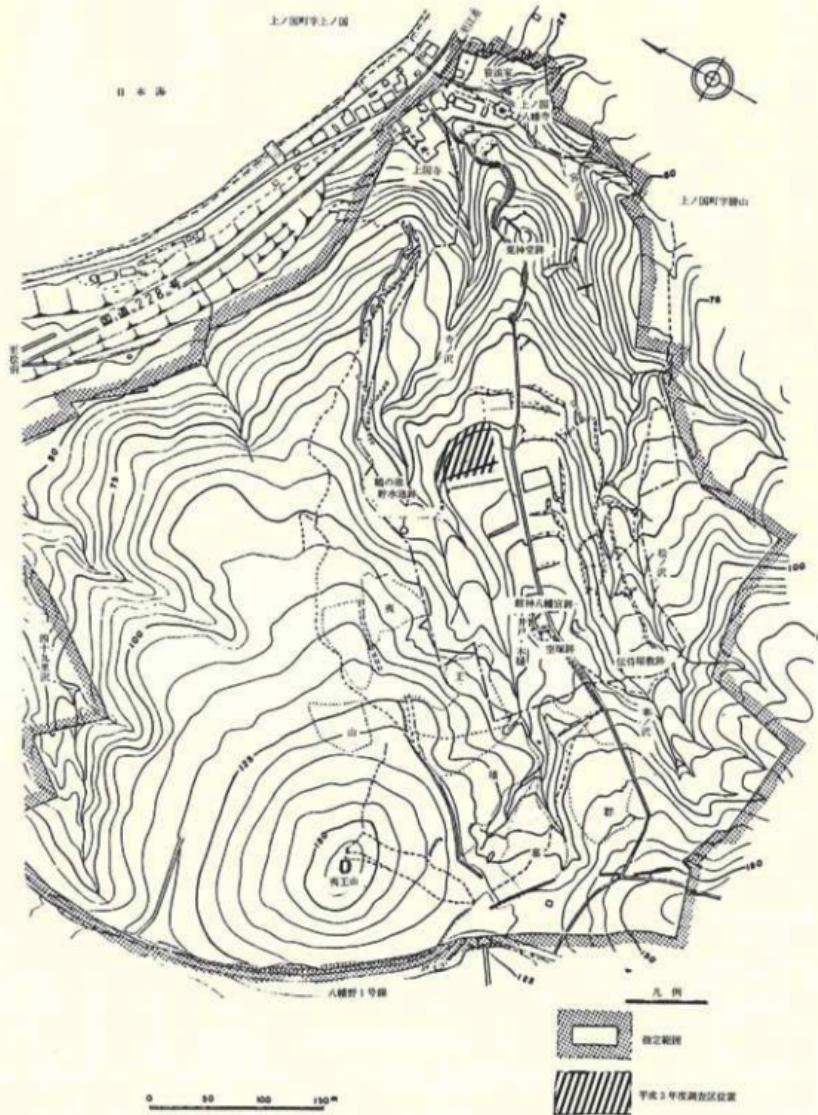
昭和58年度より国の補助を得て勝山館跡出土の鉄製品、木製品、漆器の処理を行っている。今年度は鉄製品770点、木製品870点、銅製品250点の処理を行った。

II 遺構確認調査

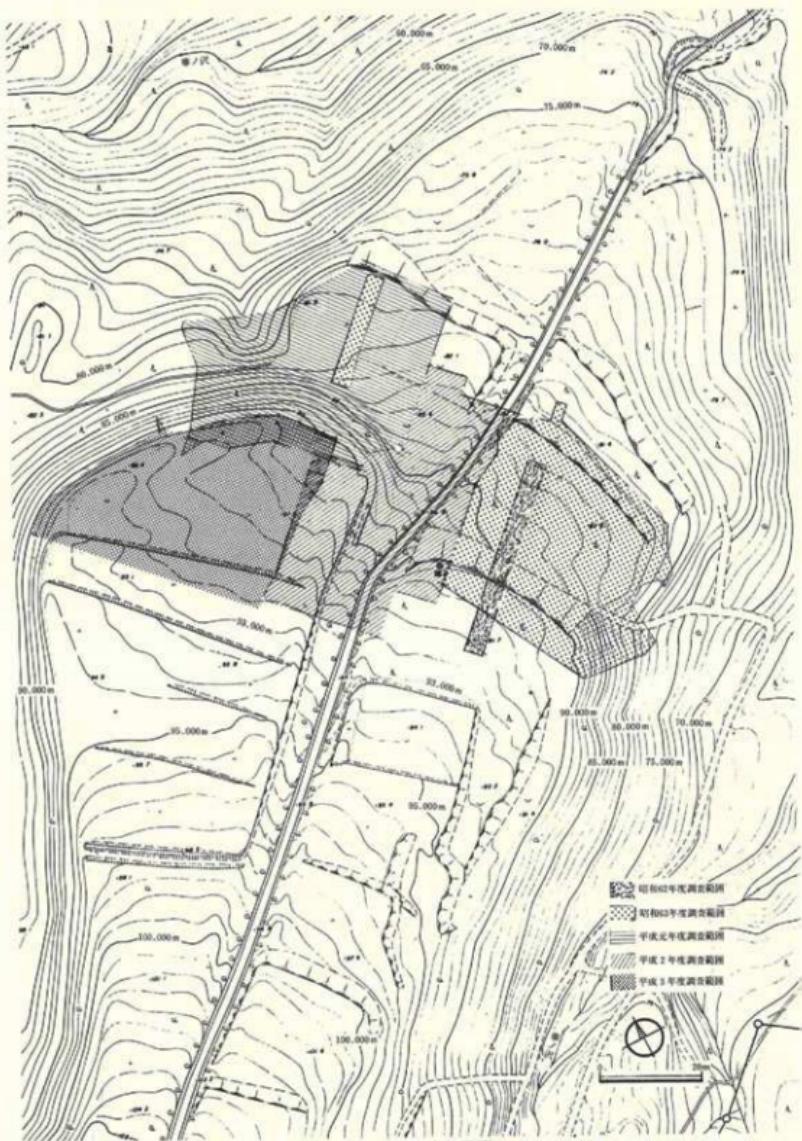
1 調査目的

平成二年度までの遺構確認調査により、館主体部を形成する三段の平坦面の北東端部には櫛列の

廻らされていることが明らかとなった。又元年度の調査で第二平坦面北斜面下の平地から、志野・唐津焼の一群が出土し、その一部は平成二年度調



第1図 遺跡地形図・調査区位置図



第2図 調査範囲図

査区出土の物と接合したり、同一個体と推される物がみられた。一方、館主体部中央を通る遊歩道（自然研究路一御代参道路）は館の形成期にも幾分位置を移しながらほぼ同じように中央部を縦に貫いていたことが推されるところとなったが、更に第一平坦面最奥部の空堀を渡って直ぐの通路北西に道に平行する6.5尺等間3×6間の大型の建物跡が想定されたことから、この建物跡の北西、柵列跡の内側の平地の遺構を把握することが必要となった。

2 検出遺構と出土遺物

(1) 位置・概要

平成3年度の調査区は、第二平坦面の北東から北西に弯曲する端部の南西・南東側平地で前年度調査区の北東に隣接する1,200m²である。

調査の結果掘立柱の建物跡10棟が想定され、礎石立建物跡、竪穴建物跡（前年度一部調査済）、土壙などが見つかった。これらの大部分は他の遺構と相互に重複関係が見られ、敷期に亘るものと推される。なお調査区南西境は、現地形上の段部を区切りの目途とした。

(2) 層序

遺構の形成等を把えるべく調査区を縦横する土層断面を設定観察し、第4、5図とした。また土壙その他の各遺構については確認した時点で適宜断面観察を行うことを原則とした。

本調査区の基本的な土層推積については既述のとおりである。

なお今年度の調査で、従来出土層位が今少しいまいであった擦文土器がⅡa層下位からⅡb層上半で出土することを確認することができた。Ⅱb層の火山灰層とするものについては、地質学的な検証を得てはいないが、苦小牧層に比定されるものではないかと推しているところである（第4図C～C'、19M北東壁）。

又、調査区南西境の目安とした現地形上の段の地下には、前年度調査区で見たような、建物敷地を画する溝、段等を見出することは出来なかった。

(3) 掘立柱建物跡

検出された柱穴から掘立柱建物跡10棟程が想定できた。が前述のように調査区南西境で明瞭な区画を見出しえていない為、なお建物その他が連続することも想定されるところである。更に建物跡として想定したその柱穴は掘り上げた柱穴全て

の一部にしか過ぎないことは言うまでもないことであり、調査及び整理・検討作業が不足していることを示している。

a 第1号建物跡（第6図）：調査区中央、16L16～17L1区に位置し北東～南西の長軸を持つ3×6間の建物跡と想定した。柱間寸法は6.6尺等間となる。P599、592、567、556等、3×3間の九間二室に二分される。図示してはいないがP418～401、403、233、246、263の2間四方が付された鉤形になるかと推される。南西端柱列、P297、267には方形の柱根が残存していた。P418・417、556・555と第三号掘立柱建物跡と重複する。第三号の方が新しいものと推している。

b 第2号建物跡（第7図）：調査区中央下半、17M4～17L1区に位置し、南東～北西に長軸を持つ、3×5間の建物跡を想定した。柱間に2.6.0、6.0、7.2尺×7尺等間で南西側に1間（8.8尺）×5間、更に1間（4.5尺）×3間の廂を想定した。P448・298で二分されるようである。梁行の柱間が不揃いであり、更に検討する必要がある。P414、408、398、231、236、106、107、112、の3×3間を拡大し、3×8間の長方形の建物ともできそうである。この場合P414、408、398は後述の第4号掘立柱建物跡には付属しないことになる。柱痕跡は方形を基調としている。

c 第3号建物跡（第8図）：調査区中央、17M4～11L22区を中心に位置している。南東～北西に長軸を持ち、北東部に2×3間の張出しがあり、全体として鉤形の形状となる建物と想定した。柱間寸法は6.5尺等間である。P597・300、555・266で分割される3×3間九間の二室が想定される。更にP328から335、166と南西に、それから南東へ147と柱筋をたどれるが、完結しないようである。P565の柱穴覆土上部から唐津杏形碗片、染付萬葉底の皿片が出土した（PL.7、第23図11）。

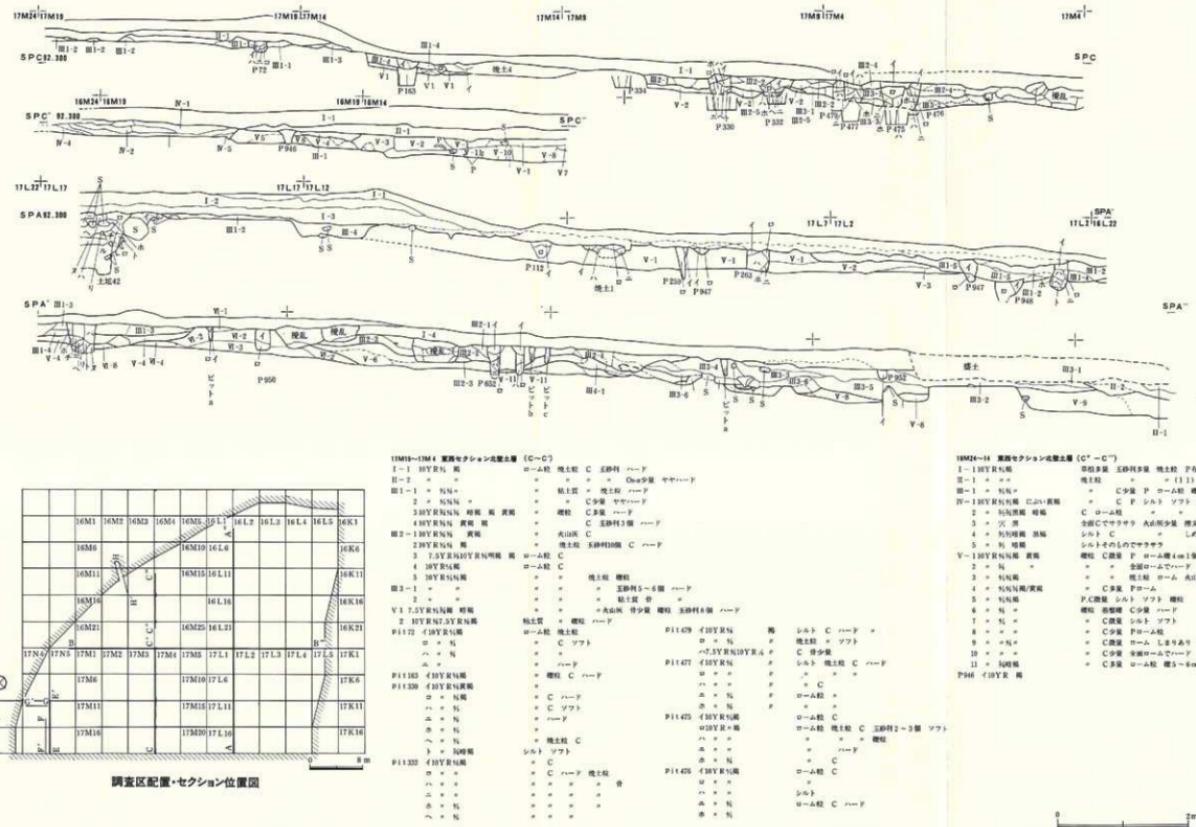
d 第4号建物跡（第9図）：調査区中央、17M10～17L8区を中心に位置している。南東～北西に長軸を持つ2×9間の長方形の建物跡を想定した。梁行柱間8.2尺、桁行は6.1尺の等間となる。

2×3間一室と2×2間三室が想定される。又P262の底には石臼が据えられていた。

北東部に1×3間の張り出し部を想定したが、その一部が第2号建物跡に属する可能性は前述した。又、P408・398・392・390・221・225・231・



第3図 調査区遺構・建物跡配置想定図

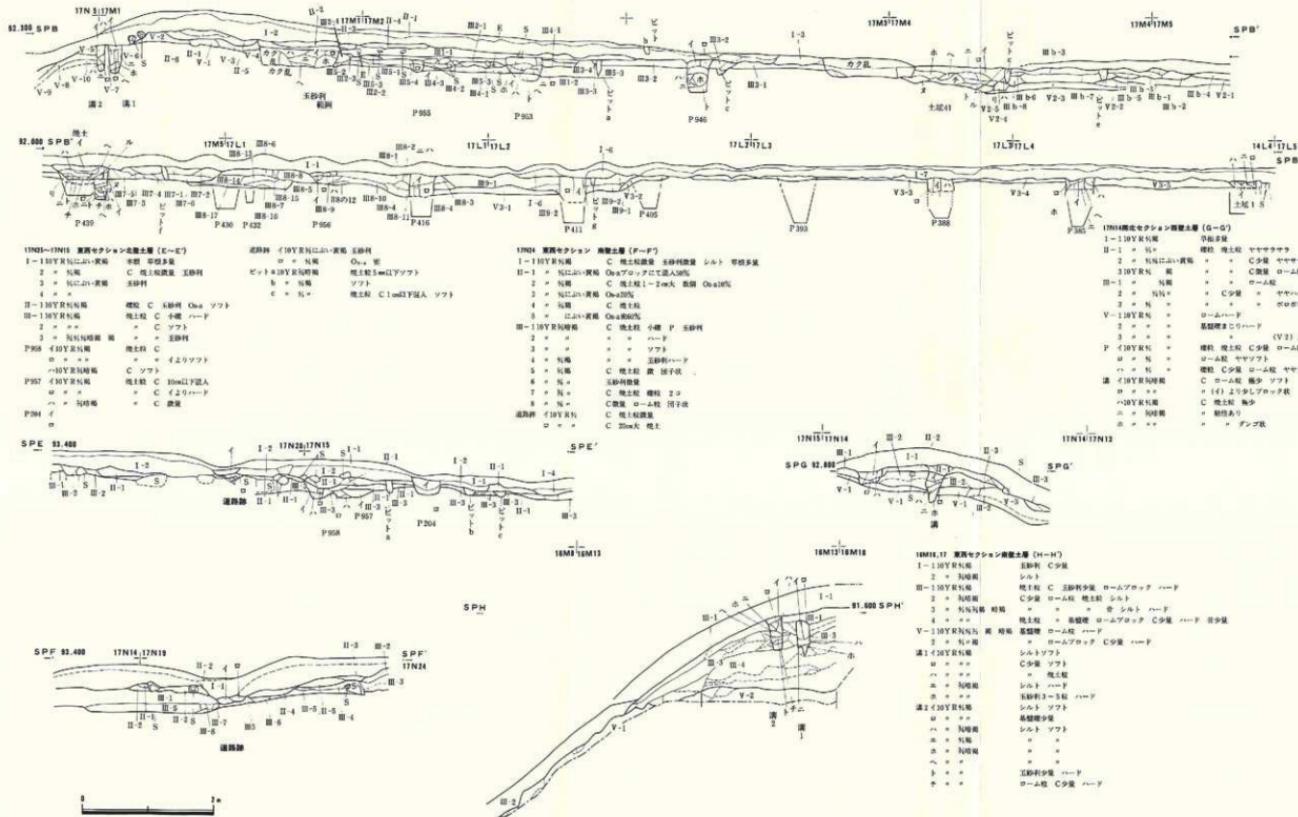


第4図 調査区土層堆積図 1

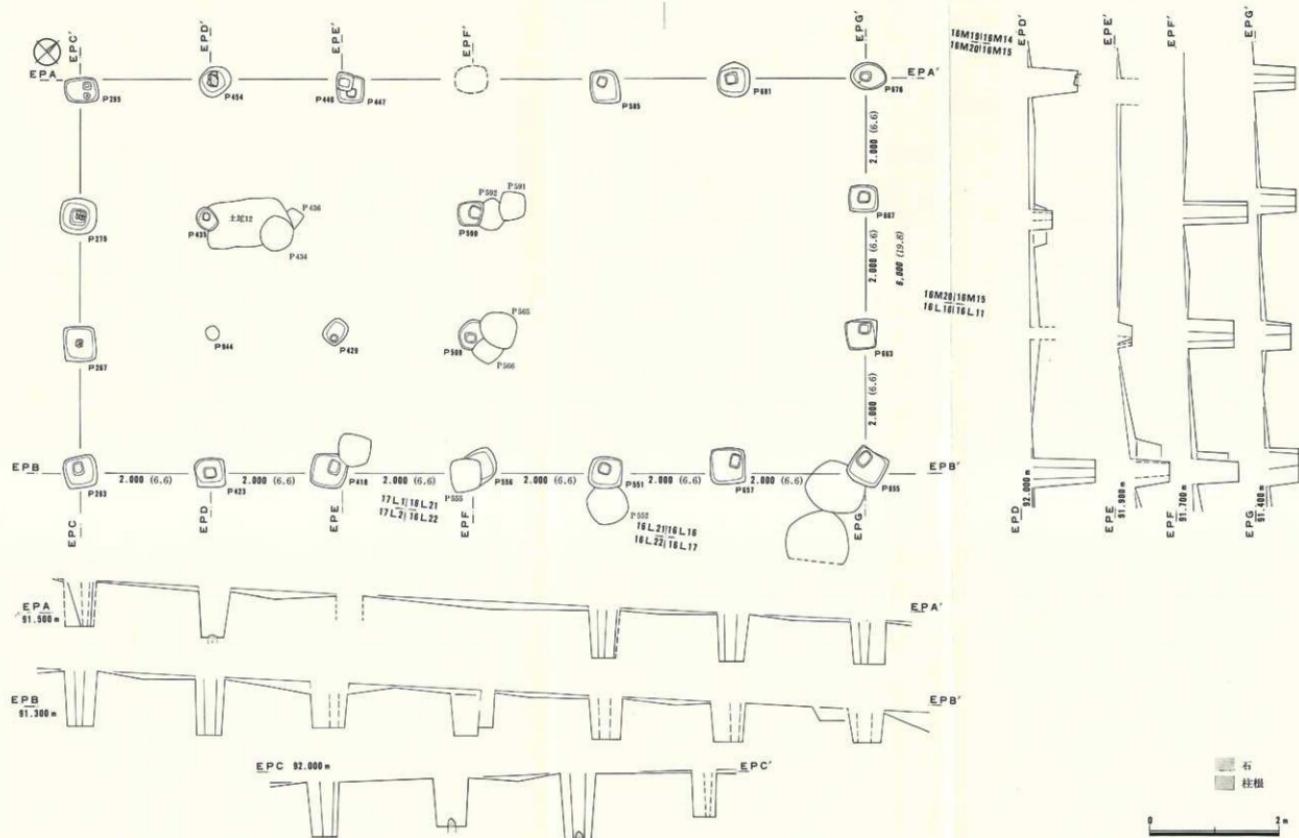
17L22~16L2 東西セクション北壁土層 (A~A')

1-1 10YR54N	礫粒 土粒 C 砂利 ハード	P263 イ 10YR54N シルト 土粒 C ハード	礫粒 ローム粒 C 少量
2 * 別に記入箇所	* * *	* *	*
3 * 分類	* * C	*	*
II-1 10YR54N	礫粒	*	*
II-1-1 10YR54N	礫粒 土粒 C ハード	P264 イ 10YR54N シルト 土粒 C ハード	礫粒 ローム粒 C ハード
II-1-2 10YR54N	** * *	*	*
3	(II-1-1)より少く、砂利粒	*	*
4	(II-1-1)より多く、砂利粒 3~5cm	*	*
5 各別分類箇所	礫粒 C ハード 土粒 砂利 土粒	P265 イ 10YR54N シルト 土粒 C ハード	土粒 C ソフト
III-2-1 10YR54N	礫粒 土粒	*	*
2 *	* 土粒 土粒 C	*	*
3 * 分類	* ローム粒 C 3~5cm(II-2-1)より多く	*	*
4 * 分類	*	*	*
III-3-1 10YR54N	礫粒 C 少量	*	*
2 * 分類	* ローム粒 C 砂利 土粒	*	*
3 * 分類	* * * (III-2-2)より多く	*	*
4 * 分類	*	*	*
5 * 分類	*	*	*
6 * 分類	*	*	*
III-4-1 10YR54N	礫粒 ローム粒 C 1~7mm(III-2-1)より少し多く	P266 イ 10YR54N シルト 土粒 C ハード	礫粒 土粒 C ハード
V-1 10YR54N	粘土質でねばりあり	*	*
2 * %	粘土質 砂利少量	*	*
3 7.5YR54N	礫粒 粘土質でねばりあり	*	*
4 10YR54N	C 少量 *	*	*
5 * %	礫粒 * 大山沢少量	*	*
6 * %	基盤地 粘土質 C	*	*
7 * %	* ローム粒 C 土部多量	*	*
8 * 分類箇所	粘土 C 高壓縮 T<7cm以下 備	*	*
9 *	C 粘土質でハーフ	*	*
V-1	基盤地 3~4m	P267 イ 10YR54N(CD-1周)	礫粒 ローム粒 粘土 ハード
2 10YR54N	基盤地 磚粒 ローム粒	*	*
3 * %	* * ハード	*	*
土壤② イ 10YR54N	ローム粒 C 大山沢 土粒 砂粒	P268 イ 10YR54N シルト 土粒 C ハード	礫粒 ローム粒 C
シ * %	* C 少量 *	*	*
ヘ * 別に記入箇所	* 土粒 砂粒 小便 2~3回	*	*
ニ * 分類	シルト 土粒 土粒 ロームやハード	*	*
ホ * 分類	礫粒 土粒 ローム粒 ハード	*	*
ヘ * 分類	ローム粒 C 土部少量	*	*
ト * % *	* 土粒 C (+)よりソフト	*	*
チ * % *	*	*	*
フ * % *	C 大山沢少量 土粒	*	*
ル * 分類	C (+)よりハーフ *	*	*
粘土 I イ 7.5YR54N	粘土質 C ハード	P269 イ 10YR54N シルト 土粒 C ハード	礫粒 ローム粒
ロ * %	* *	*	*
ハ * %	* *	*	*
シ * %	* *	*	*
P270 イ 10YR54N シルト 土粒	礫粒 ローム粒	P271 イ 10YR54N シルト 土粒 C ハード	礫粒 ローム粒
シルト 土粒	*	*	*
シルト 土粒	*	*	*

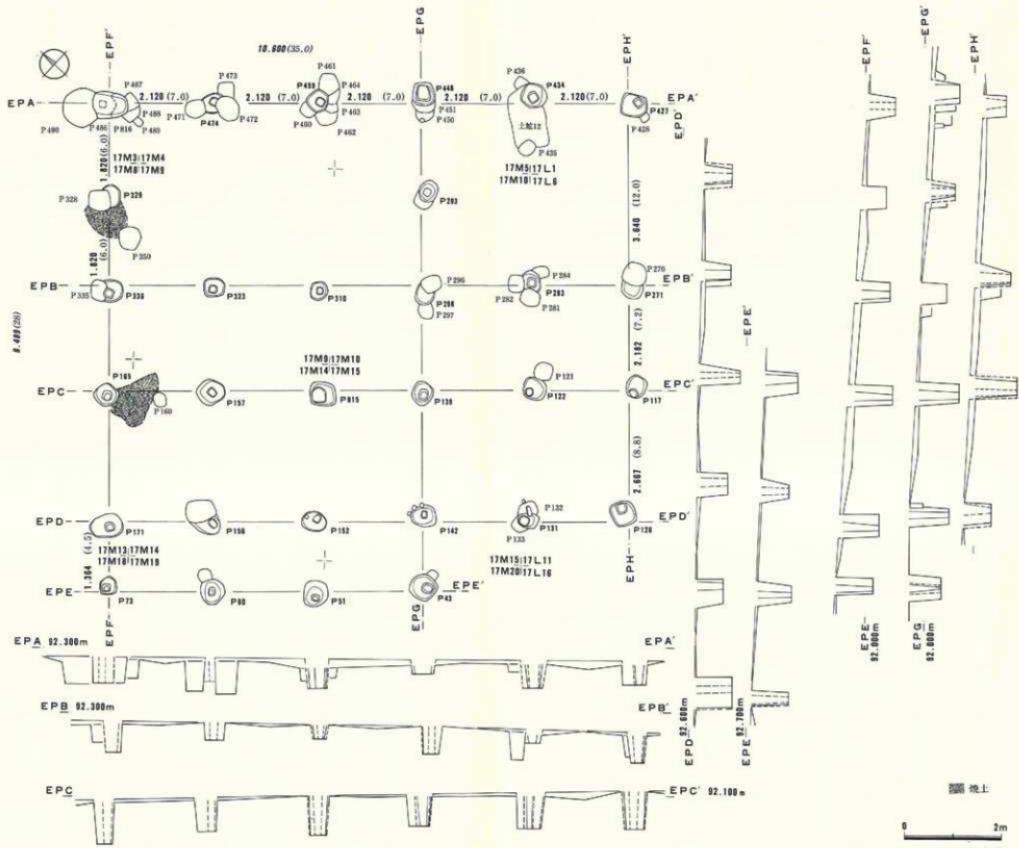
17N 5～17L 4 南北セクション東壁土層 (B～B')



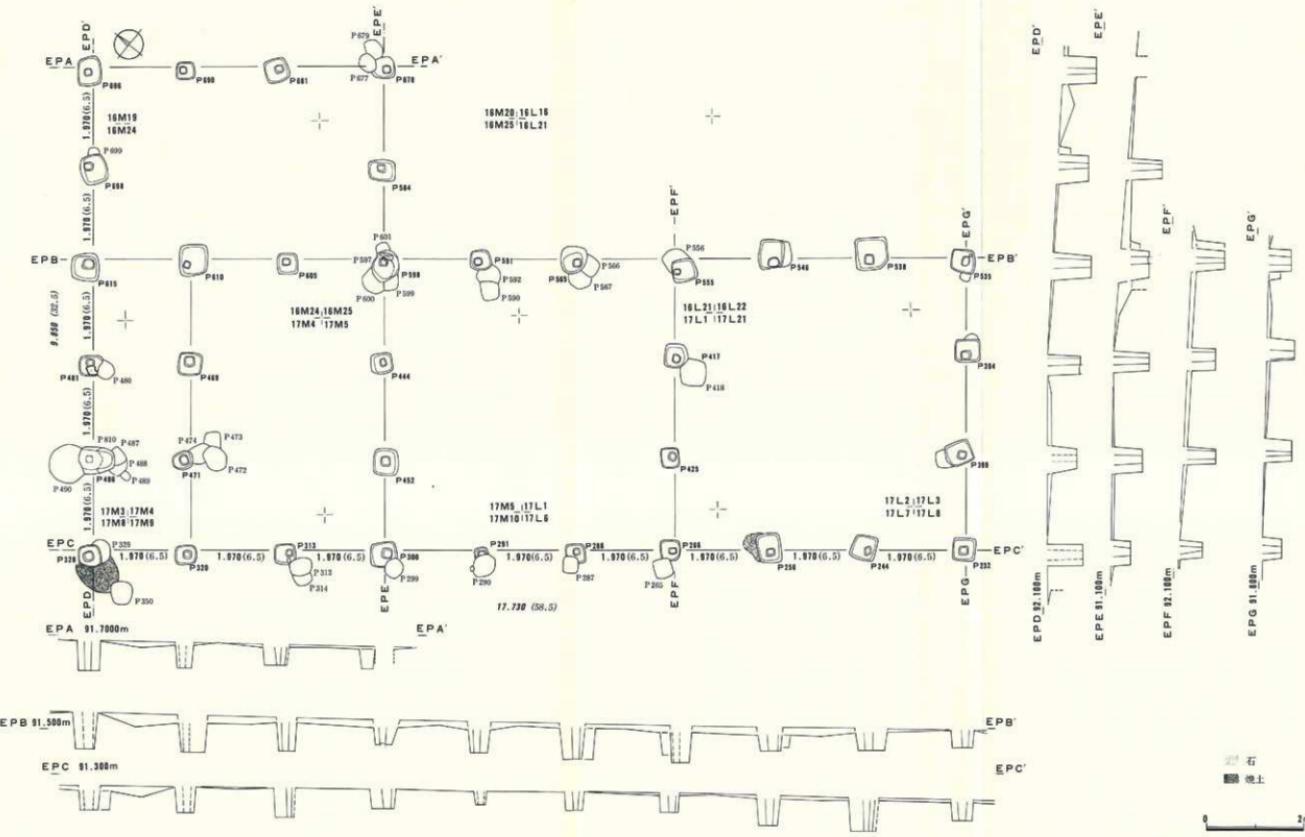
第5図 調査区土層堆積図 2



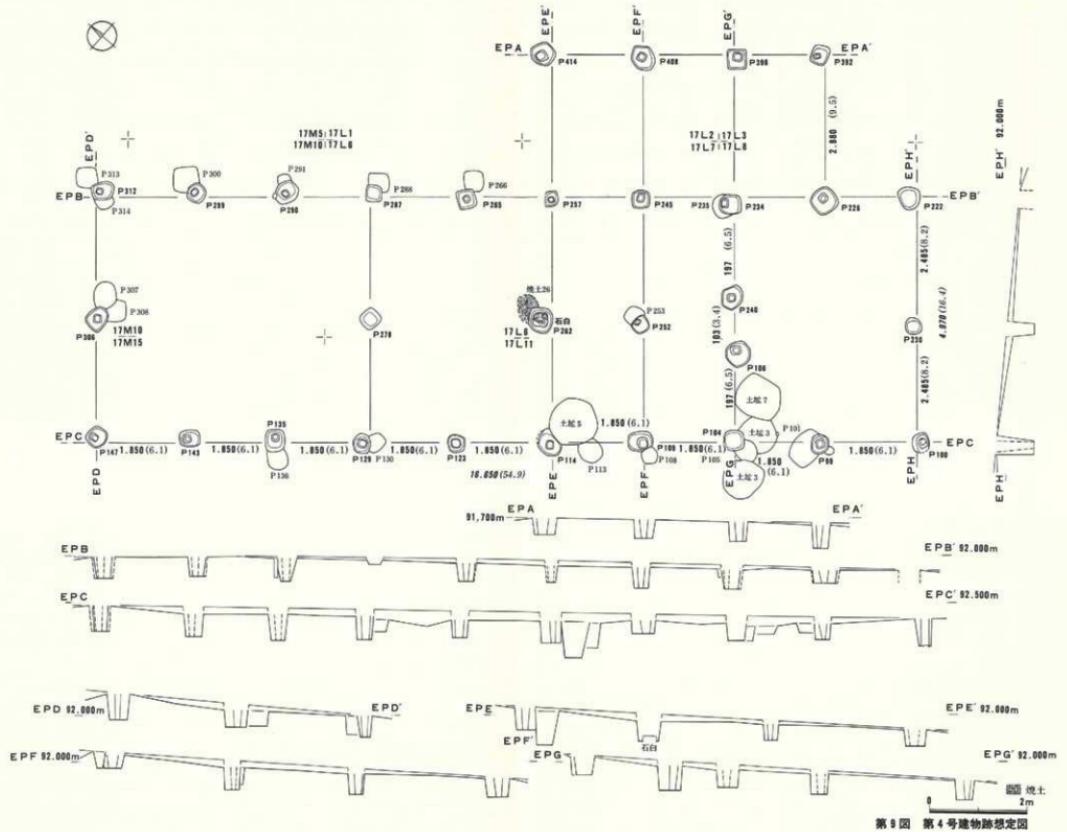
第6図 第1号建物跡想定図



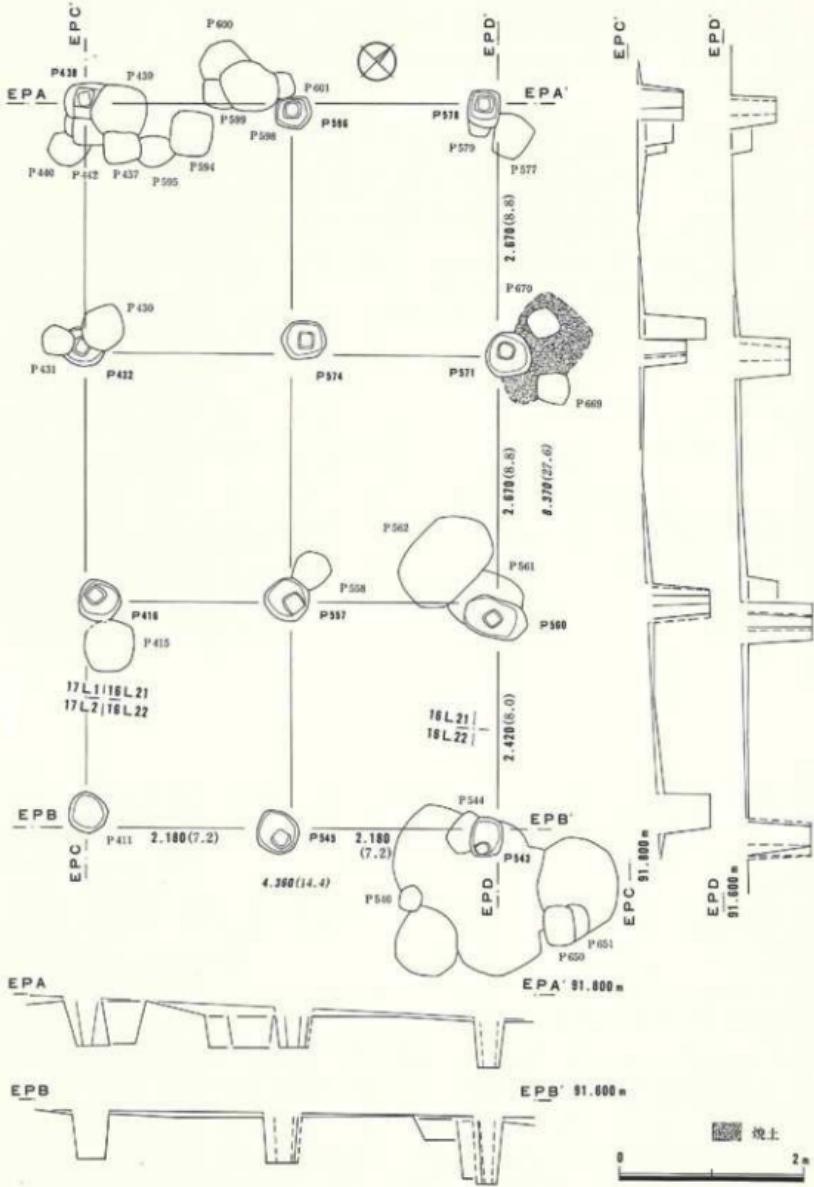
第7図 第2号建物跡想定図



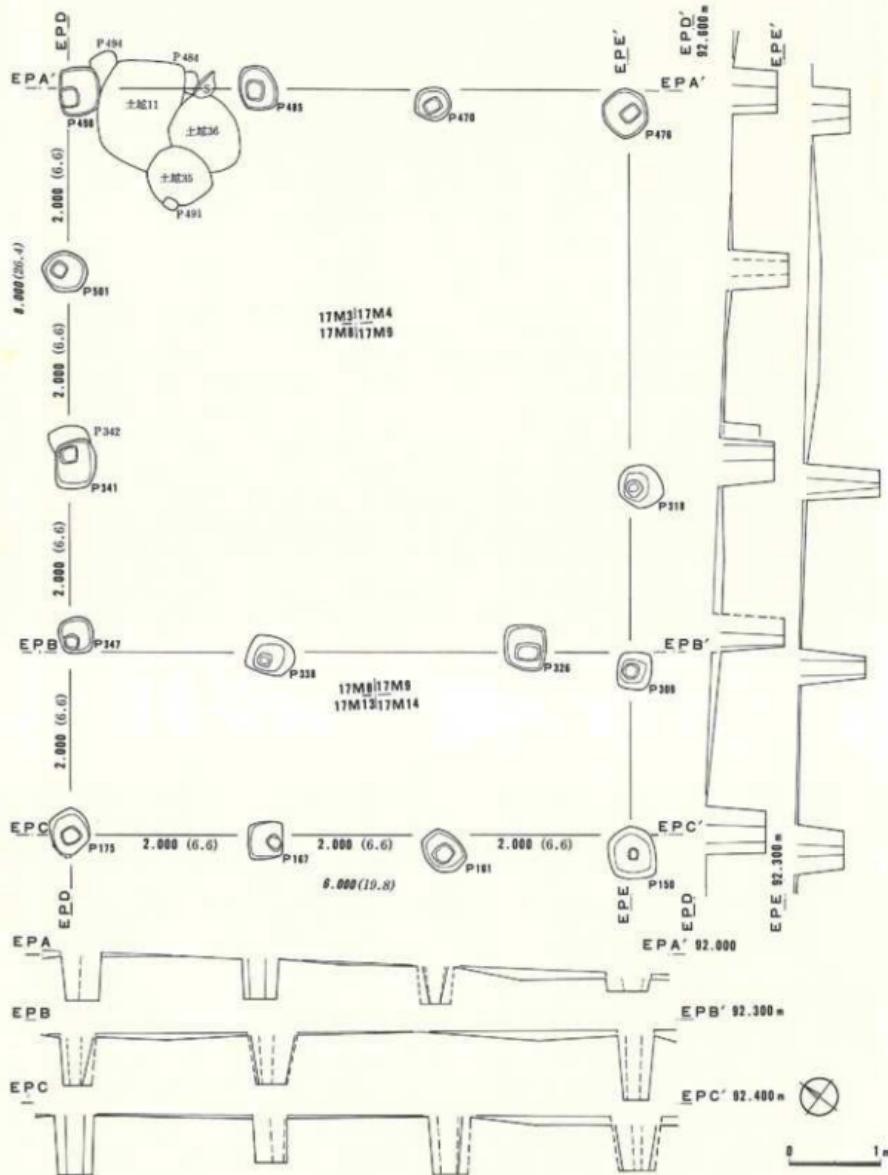
第8回 第3号建物跡想定図



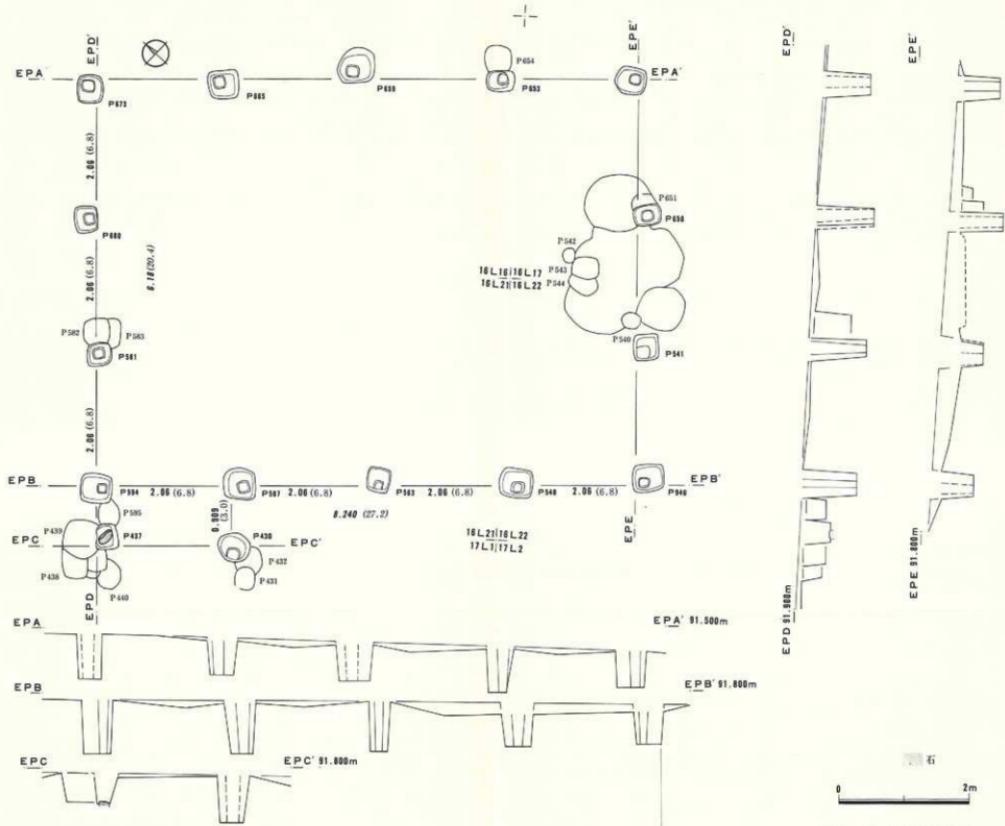
第9図 第4号建物跡想定図



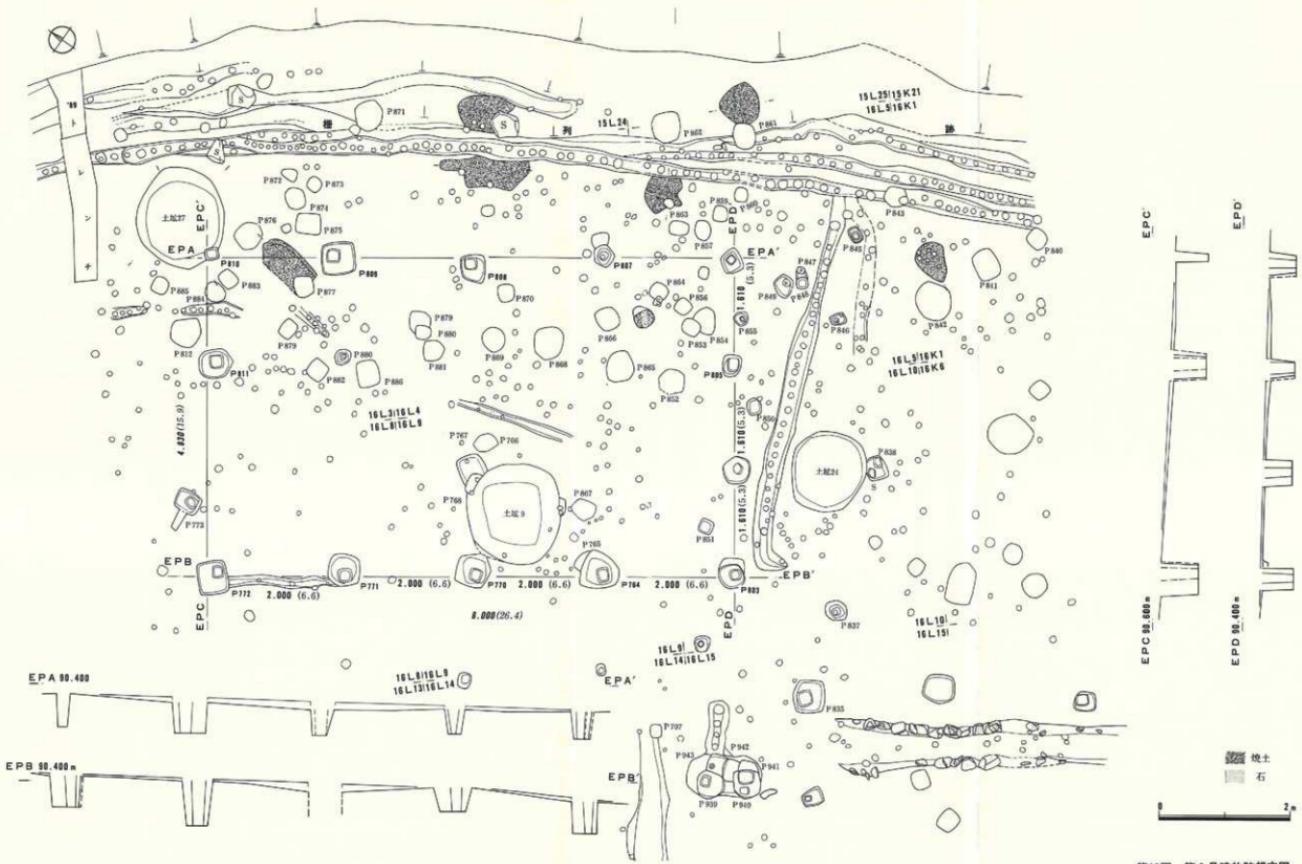
第10図 第5号建物跡想定図



第11図 第8号建物跡想定図



第12図 第7号建物跡想定図



第13図 第8号建物跡想定図

242と連なる1×3間の小さな1棟であるかとも推される。

e 第5号建物跡(第10図)：調査区中央、16M25、16L21区を中心に位置する。長軸を南東—北西に持つ2×3間の建物を想定した。梁行柱間は7.2尺等間。桁行は8、8.8尺である。P596はP601かも知れない。その場合第3号建物跡よりも本建物跡の方が古くなる。

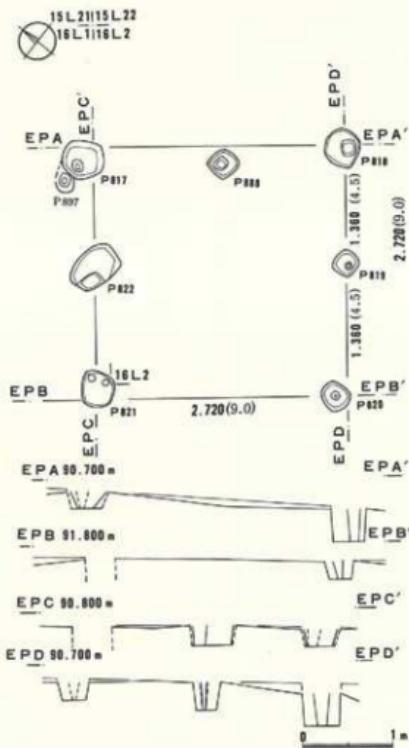
P438・596(601)・578・677・672・751・747・744・737(738)・728・724・726・645・(?)・537・539・402・404・238・249・259・(271)・281・207・294・451と連続する大きな南東—北西に5間、北東—南西に8間を数える廻いが想定される。この場合第2号建物跡に伴うとしたP271はP270にな

るであろう。又この廻い？は第二、三号建物跡より古くなる可能性がある。しかしながら、この廻い？によって生ずる空間の内側でまとまる建物跡は後述の第7号建物跡と推されるが、北西端の柱列同志が近接しすぎる事、或いは7号建物跡柱穴内出土陶器は本建物跡の終末期を示すと解している唐津焼であり(後述)、先の建物跡との前後関係と矛盾を生じうることなど、なお検討すべきことがある。

f 第6号建物跡(第11図)：調査区北西半、17M8、9区を中心に位置する。北東—南西に長軸を有する3×4間の建物跡と想定した。柱間は6.6尺等間である。南東側P476・318間の柱は検出できなかった。P347・309で仕切られる、3×3間の一室があるのかも知れない。柱間寸法があわざ示していないがP326も間仕切りの柱穴の一つかとも推される。

g 第7号建物跡(第12図)：調査区中央北東部、16M25、16L21、22区を中心に位置する。南東—南西に長軸を有する3×4間の建物跡と想定した。柱間寸法は、6.8尺等間である。P587・659の柱痕跡内覆土中からは唐津皿が出土している(PL.7-3-4、第23図12・14)。この建物跡の内部を仕切るような柱穴は見つかっていない。南西端に平行してP450～385の柱列がみられた。P440～405までを本建物跡の廻と想定したが、ほぼ同じ柱間寸法で連続するため、一続きのものとした。建物の外側に平行する柵列状の物かとも推される。なお、本建物跡を廻う、別の廻い状の柱列の存在については第5号建物跡に関連して述べたところである。

h 第8号建物跡(第13図)：調査区北東端、第二平坦面の端部を廻る柵列に近接し、16L4・9区を中心に位置する。南東—北西に長軸を持つ3×4間の建物跡と想定した。梁行柱間5.3尺、桁行柱間6.6尺等間となる。北西側の梁行1間の柱穴は見つかっていない。やや柱筋、柱間が異なるため示しなかったが、P73がそれにあたるのかも知れない。P810が土壤27と重複していることが、平成元年度の調査記録等により判明した。土壤より新しい。南東に近接して、ほぼ東西方向に柵列が走り、端部の柵列に接続する。なお他端と2.1m程の間をおいて、短い0.8m程の柵列跡がある。又この短い柵列には直交するように前年度の調査で見つか



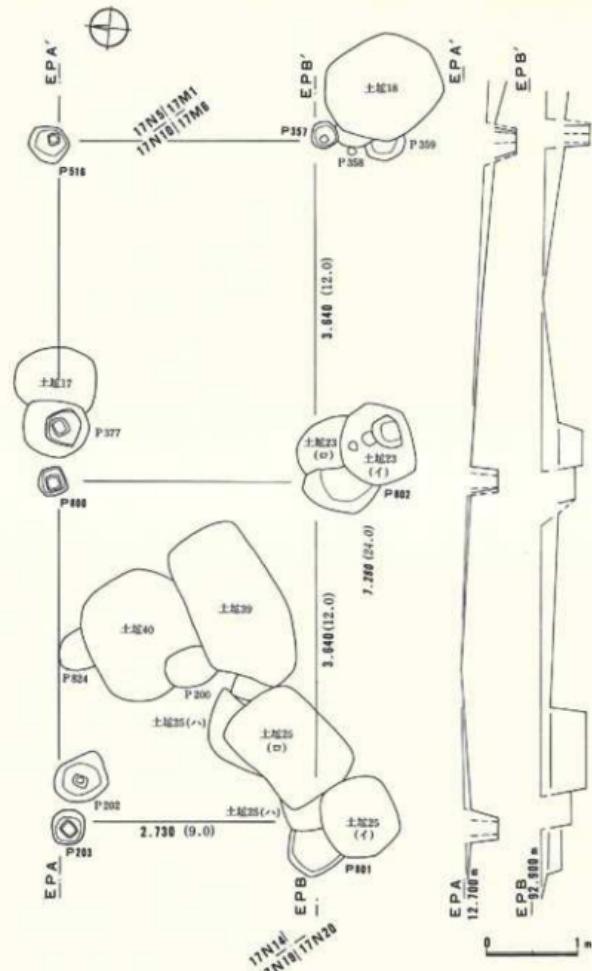
第14図 第8号建物跡想定図

った両壁に石積みのある溝が南の方へ延びている。

i 第9号建物跡(第14図)：調査区北東端、第二平坦面の端部を廻る柵列に近接し、16L 2区に位置する。9尺四方の方形の建物跡を想定した。南北東と北西側は4.5尺×2間等間となるが、他の二

面については相当する柱穴を見出せなかった。P888がその可能性もあり図示した。

j 第10号建物跡(第15図)：調査区北西端、第二平坦面の端部が北から北西に大きくなっているコーナー、柵列に近接して、17N10区を中心に位置する。柵列に平行して東西に長軸を有する、1×



第15図 第10号建物跡想定図

2間の建物跡を想定した。柱間寸法は9尺、12尺等間と長いものである。柱穴の深さは浅いものが多く、柱痕跡も良く判らないものが多い。或いは北側のP203・800・516の一列だけを櫛列に平行する柱列とすべきかとも推するところである。

(4) 石塁・礎石跡物跡(第16図)

調査区北西隅、第二平坦面の端部が西側へまわり込んで側方斜面を形成するコーナーの付近、17N19、20区に集石が見られた。径30~60cm前後の不定形な偏平の石を配し、その周囲に5~15cm前後の魚礁が散きつめられた状態で分布している。

大きな意志は南東一北西に長軸を持ち、 2×3 間の礎石状の配列となっている。中央の石列は南東に今一つ伸びている。この両側は明瞭な抜き取り痕を見ることはできなかったが、耕作等により礎石が消失したと推測されるところであり、 2×4 間の礎石立の建物であったと思われる。礎石間柱間寸法は3尺等間で、總柱である。礎石は大部分が平らな面を持つ自然石を使用しているようであり、水平面を作る為と思われる打欠きは顯著で

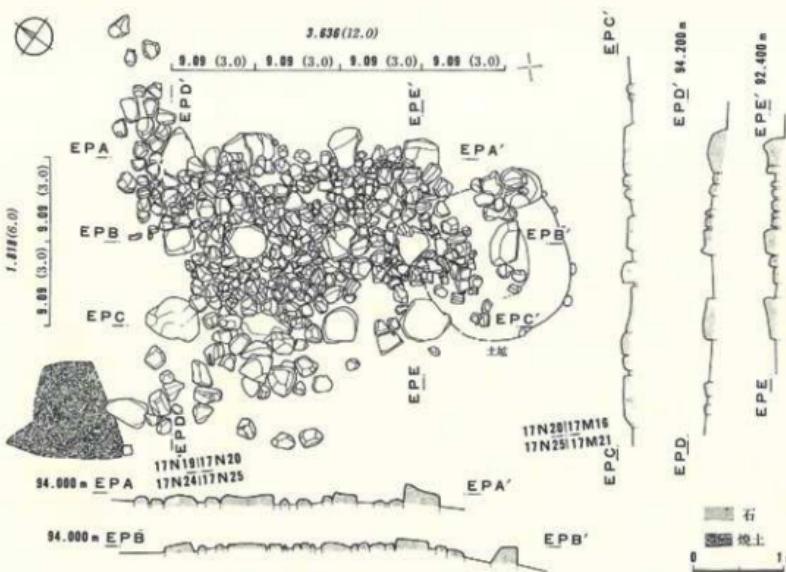
ない。礎石の下位に根石等のこめられた形跡はないが、全体はほぼ水平を保たれている。礎石を据えるための掘り方、更にはこの石敷部分全体を安定させるための掘り込みの存在は確認できなかつた。

石敷遺構北西は、平坦面の端部であり幅列の組る位置にあるが、僅かに石敷きの中央長軸の北東にズレた位置に、一段低い寺ノ沢地内から上ってくる道が通じ、幅2.0m程の間幅列が途切れている。道の中央線は、北東側と中央礎石列の間に通じる位置にある。

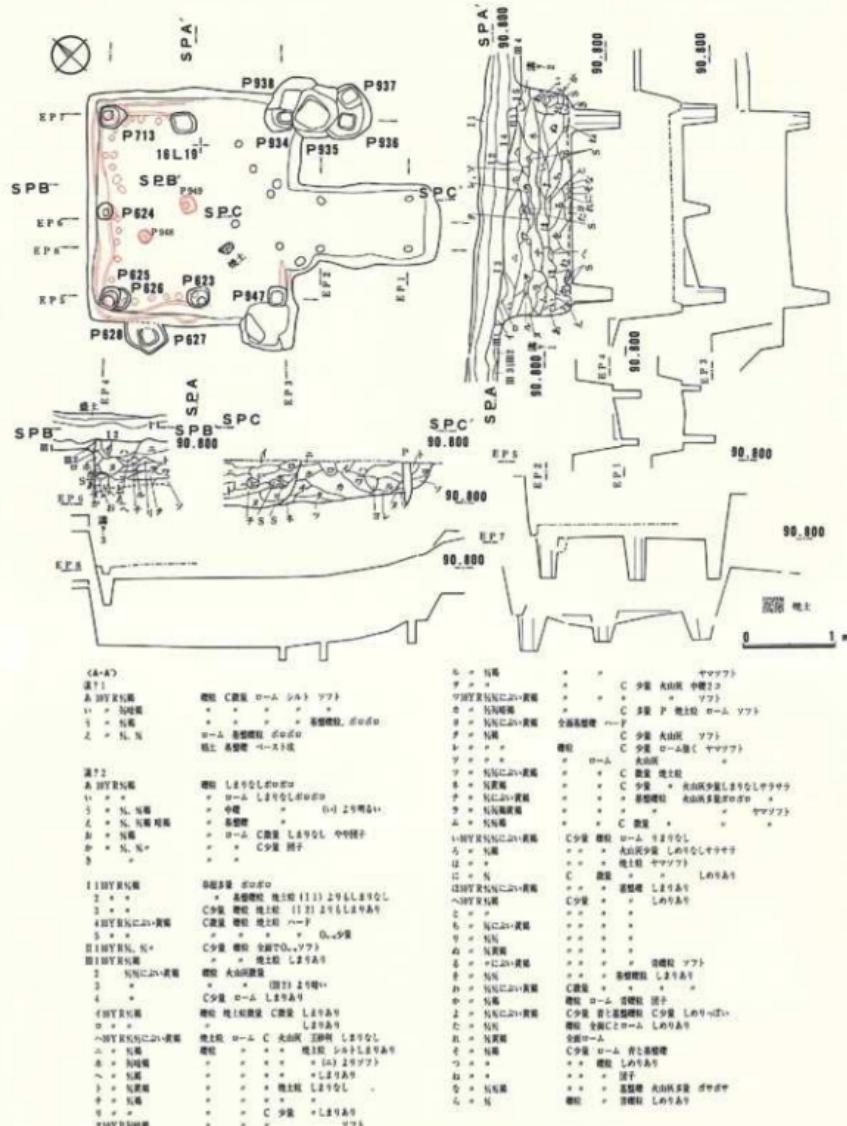
柵列の途切れた道の西肩は、イタヤカエデがあり調査し切れてはいないが、木戸その他の跡を示すものは見い出しえなかつた。

石敷・礎石、道の形成や関係を把握するべく土層の断面観察を行った(第5図EE'-EE')。

礎石及び石敷は江戸時代の堆積層としている第II層の下位に位置しており、館形成期に属することが推されるが、前述のように全体、礎石個々を据えつける掘り込みや、根石等は認められない。



第16図 石敷・礎石建物跡平面図



第17圖 第39号竪穴遺構平面圖

道路跡は現地表面（道路面）自体が低く凹んでおり、その下位の溝状の凹みに堆積する土層もEE'ではI乃至II層となるものである。FF'でI層の下層にIII層をベースとすると思われる堆積が確かに認められることから、館の時代にも道として使用されていた可能性は推測できそうである。凹んだ道路は雨水等の流路となり、II層の堆積はなされず、その上が近代以降の烟作時再び通路として使用され、I層のみが堆積したと推される。

(5) 壁穴遺構・土壤

a 第39号壁穴遺構（第17図）：調査区南東端、16L19、20区に位置する。張り出した出入口部等一部は前年度調査区内にあり、前年度調査時に該部分は掘り上げ済みのものである。

2.3×2.5mの方形で南東辺のはば中央に幅0.9×長さ1.5mの張り出した出入口が付けられる。床面はほぼ水平で、中央南、出入口寄りに焼

土が見られた。柱穴は7個で角柱のようである。出入口部はゆるい傾斜をもち、前方と基部に径7~8cm、深さ30cm程の小柱穴各一対がある。

北西半の今年度調査部分土層観察で床面より30cm程上位で堆積に違いが見られた（第17図AA'）。壁際にそって溝状の凹みと、小柱穴を伴う平らな面を想定した（同赤版）。溝状の凹みは建物の壁板と窓穴自身の壁との間の埋め土部分かとも推された。窓穴底面上30cm余の平坦面については底面上の燒土との関係が良く解らない。又、小柱穴は床材等の支えなのか、内部壁際の使用状況を示すのか、今少し類例をまち検討したい。なおP948、949は壁穴より新しい時期のものである。

この壁穴覆土中から別表の遺物が出土した。染付皿は、本館跡の終末期に近い年代を示す資料と推測しているものである。

表1 16L15 壁穴39 出土遺物観察表（陶磁器）

種別	器種	口径	底径	高さ	輪 調	胎 土	特 性	備 考
青 瓷 瓶					グレイムの質感	黄みのグレイ	見込丸鉢、高台以下圓鉢	
*					黄みのグレイ	黄みの白	側部小片 剥離下半より無鉢	
青 瓷 盆					グレイムの質感	黄みのグレイ	側部小片	
米 村 盆		85	32	胎の白	白		幅反り 体面唐草文見込十字花の変形、大ぶり	
越 前 銚					グレイムのグラウン	あかるいオリーブのグレイ	側部小片	
*					くないグラウン	グレイムの黄	* 小片	
*					*	*	口縁部小片	同一鉢

窓穴38土層堆積②

(C-C')	テ * * *	*	*	*	*	テ * *	シルト ソフト C少量	
10YR4/5黄 砂土 C 厚さ1cm以下 ハード	10YR3/5黄 砂質 ロームブロック C							
ハ * * ロームブロック	2 * * * *	*	*	*	*	ル *	シルト C	
ハ * * ロームブロック 3m大根	10YR3/5黄 砂質 ロームブロック C Orea					テ *	シルト 大根面 C 少量	
ニコリテラス E. シート	10YR3/5黄 砂質 ロームブロック C					ワ *	シルト ソフト	
ニコリテラス E. シート	2 * * * *	*	*	*	*	カ *	シルト 基盤層 C	
ニコリテラス E. シート	2 * * * *	*	*	*	*	タ *	シルト 基盤層 C	
ニコリテラス E. シート	2 * * * *	*	*	*	*	タ *	シルト 基盤層 C	
トトヨ瓦器窯 砂質 C	2 * * * *	*	*	*	*	タ *	シルト 基盤層 C	
トトヨ瓦器窯 砂質 C ロームブロック	2 * * * *	*	*	*	*	タ *	シルト 基盤層 C	
トトヨ瓦器窯 ロームブロック かたくしまる	2 * * * *	*	*	*	*	タ *	シルト 基盤層 C	
トトヨ瓦器窯 砂質 C ロームブロック ソフト 塗装有	ビトロ11(BYR)用器 C少量					タ *	シルト ソフト	
(D-D')						基盤層		
10YR4/5黄 砂質 C ロームブロック少量	盛土 10YR4/5黄 砂質 ロームブロック 王室井 1~7號					10YR4/5黄 砂質 王室井 C ハード		
10YR4/5黄 砂質 C ロームブロック C	1 *	*	*	*	*	い *	シルト ソフト	
ハサウエー 黒・白模様 ロームブロック C 壁板	2 *	*	*	*	*	う *	シルト シリコン	
ニコリテラス 黑・白模様 ロームブロック C 壁板	2 *	*	*	*	*	え *	シルト ローム C少量 ソフト	
ホ * * 黑 基盤層	3 *	*	*	*	*	お *	シルト 基盤層 *	
ハサウエー 黑模様 ロームブロック C 壁板	4 *	*	*	*	*	か *	シルト 基盤層	
トトヨ瓦器窯 ロームブロック C 壁板	イ *	*	*	*	*			
トトヨ瓦器窯 ロームブロック C 壁板	ロ *	*	*	*	*			
トトヨ瓦器窯 ロームブロック C 壁板	ハ *	*	*	*	*			
トトヨ瓦器窯 ロームブロック C 壁板	シ *	*	*	*	*			
トトヨ瓦器窯 ロームブロック C 壁板	ム *	*	*	*	*			
トトヨ瓦器窯 ロームブロック C 壁板	ヘ *	*	*	*	*			
トトヨ瓦器窯 ロームブロック C 壁板	チ *	*	*	*	*			

b 土壙1（第18図）：調査区南隅、16L24区に位置する。北東—南西に長軸を有する長円形の土壙である。振り込みの浅い皿状を呈し、上部に8~20cm前後の円・角穂が10個ほどあった。

南西に溝がのびてきて重複していたため、土層の観察が不十分となつたが、III層を振り込み面とし、III₂層で覆われていたようである。北東半の土層にシルト質の軟かみの堆積が多いようである。この土壙内から表2の遺物が出土した。土壙中央南西寄りに長さ36cm弱の短刀があった。木質部、漆皮膜等が一部残存し鞘入りであったと思われる。合口につくられたと推され、差し裏に柄の長さ94mmの小柄が接着されている。全長は鉄が付着し、不明である。表面全体に径3mm前後の凹文が三列施されている。目貫は菊花の折枝で、柄との間に大小からなる七子文様の薄板が重ねられる。刀身は平造りで刃渡26.7cmである。反りは顕著でない。勝山館出土の刀剣類では全体の様子が判る初めての物で、しかも持えの本格的な優品と/or>ことができる。

こうした刀剣が置かれ、銅鏡、釘、焼骨粉等が周囲に見られる状況は、墓壙を思わせるが、調査の不備もあり、確定できなかつた。

c 土壙22（第19図）：調査区北西寄り、17M6区で検出。開口部径150×170cm、底形100×90cm程の不整円形で深さは95cmである。鋭角に割れた5cm前後の大きさを主とする大量の礫、焼土粒、炭化物を含む黒色土層が中央に厚くV字状に堆積する。その上位には、玉砂利と記した小円穂、焼土粒、炭化物等を含む比較的軟らかな土層が、又下位にも焼土、炭化物を含む層が堆積している。この礫層を中心とする覆土から表3の遺物が出土した。このうちNo.9、10の波頭文、見込みに巻貝を描く蓮子碗、16、17の端反り獅子皿、十字花文皿には火熱の痕跡が見られる。11点の玉類のうち4点は熱で変色が見られる。19と2の鉄製品は下端がほぼ平らで外側へ彫み加減になる。敲打による潰れのようでもあり、鑿あるいは鑿かとも推される。鍋の破片に一字湯口の残存するものがある。

陶器は概して小破片が多く殆んどが別個体となる。鍋も小破片で、少數である。釘、小札等は幾分形がまとまるようである。上記のように釘等を除くと遺物の出土状況は散漫な感じが強いのであるが、その中で玉が11点まとめて出土してい

ることは留意される。径3~5mmの玉がここだけから出土したことを偶然とすることはやはりできないであろう。

土層の堆積状況は比較的短時間の埋没を示すようであり、ごく近い場所で火熱、残滓をもって埋没させているようである。覆土中の陶器のうち遺構外の資料と接合したNo.15の四方櫛文の皿以外は蓮子碗等から16世紀前半代の年代を示すかと推するところである。

又土壙の外縁に沿って6個の柱穴があり、更に黒色の礫層の埋没後に穿たれた杭状の柱穴が見られるが、或いはこの土壙の上屋等に関連するものかとも推されるところである。

d 土壙28（第20図）：調査区北東端16L2区に位置し第二平坦面の端部を巡る柵列と重複する。170×140cmの円形で深さ120cm程である。一部平成元年度に調査されていたため、土層観察面の繋りに努めた。礫底に近い面で炭化木、遺物等が集中して見つかったため、それ以下（20図長破線）については図を作成できなかつた。

覆土の大部分には炭化物、ローム粒が含まれ、南北壁際には火山灰が見られる。過年度調査部分との繋りが不明となったが、腐殖層などの堆積はなく、短期間の堆積と推される。同図中ロ、ヘは平坦面端部の柵列による振り込みと思われる。柵列の方が新しいと推される。

土壙内から表4の遺物が出土している。越前焼は覆土上部での出土である。他の底部に近く出土した陶器は、青磁線描蓮弁文碗、染付獅子皿等であり、16世紀の後半を示す遺物は見られないようである。獅子皿1点のみは僅かに器表が荒れ火熱を受けているようである。青磁碗はいずれも高台部を欠失する。

鉄鍋の口縁破片は内側に段がつく。銅製の刀装具は資金である。

礫底近くの炭化材や他の遺物の分布はほぼ水平である。礫の一部に火熱の痕もあり、焼土粒を含むやや堅めの粘土質の層を炭化物の範囲として把えたところもあるが（第20図・同土層図エ）、この面での火の使用を断定することは今少し留保し、再検討することとしたい。

e 土壙9（第21図）：調査区東隅、16L9区に位置する。150×140cm程の円形で深さ60cm程の土壙である。土壙上面には中央に90×85cm程の円形

に褐色土があってその外側に暗褐色を基調とする炭化物の多く含まれた土が堆積し、同心円状を呈する。土層観察の結果、褐色土の下位にロームブロックを密に含む堅い層が堆積していた。その下位は暗褐色土層であり、層中から表5の遺物出土している。

陶磁器に火熱痕はない。炭化材は面取りをした角が多い。ナベとしたものは小片で不明である。

ローム下の層序を連続して把えなかったが、土壇内での火の使用、その後のロームによる被覆(土の盛り上げ?)、内部の落ち凹みによる浅い皿状の堆積が想定できるようでもあるが鉄造鋏片等伴出の意味が不明な遺物もあり、後考することとした。

f 土壙27(第21図)：調査区北東端16L3区に位置する。上半は平成元年度に一部に調査されている。130×160cmの円形で、深さ110cm程の土壙。

壇底から45cm程の高さの壁四周に黒色土の堆積が見られる。この黒色土を館構築直前の地表面と把えているところであり、その上部は館の形成に伴う盛土整形の痕と解される。掘り込み面はこの盛り土の上面である。

土壙の上～中位に礫が大量にみられる(付図参照)。壁際には10cm程、軟かく粗で、火山灰等も混じる層が見られる。上面からは同心円状のものとして把えられ、前述の28号と類似のものとできよう。

出土遺物は表6に示した。刀子は平造りである。

g 土壙3(第22図1)：調査区南隅、17L3区に位置する。80×80cm、深さ60cm程の円形の土壙である。壁沿いと壇底に火山灰が夾入するが北東際に多く見られる。中央部分の覆土の多くにはローム粒や燒土粒が混り、炭化物が多く含まれている。覆土中の遺物は別表に示した。

h 土壙14(第22図2)：調査区西端、17M13区に位置する。100×85cm、深さ68cm程の円形土壙である。覆土中には焼土粒、炭化物、ローム粒、白色火山灰等が含まれている。中間より少し上位の部分にロームを含む堅い層やしまりのある層が、凹んだ状態で堆積している。焼土層はこの堅い、しまった層より上位にやや多い。又火山灰はその下位に多い。又壁に近い部分にロームを主とする堅い層の堆積がみられ、中央寄りに軟かい層が堆積し、炭化物も多く見られる。中間部分の堅い、しまった層は途中で途切れ、面としてつながって

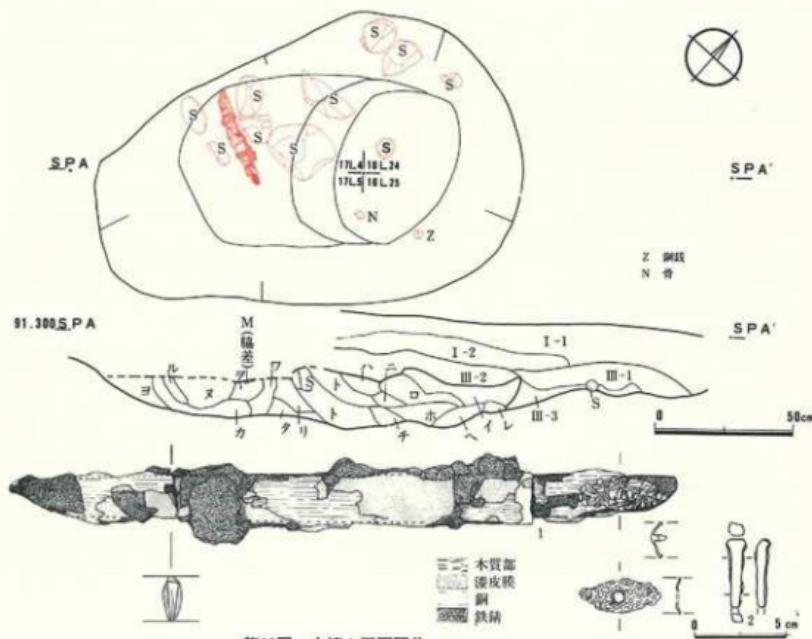
いない。又壁際の層も中央部分との間に明確な境を示してはいない。這構プランの確認面では中央部分とその外側との覆土の違いが観察されたが土層断面では明確でなかった。イ～ハ、ホとニ・リの違いであろう。又この確認面では3～10cm程の礫が集積し陶磁器も見られた(同図赤)。覆土中の遺物は表9に記した。

i 土壙6(第22図3)：調査区南隅、17L13・14区に位置する。115×115cm、深さ85cm程のや角張った円形の土壙である。重複するP100の方が新しい。

覆土上半にロームブロック等を主とする堅い層が30cm程厚く堆積する。下半は、焼土粒や炭化物を含む軟かな層が堆積する。色調も暗～黒褐色を呈する。

覆土中の遺物は表10とした。鉄袖腕は大窓I期、端反り皿は大窓の前半、擂鉢は16世紀と推される。火熱を受けた跡はない、壇底に20×8cm大の炭化材、礫があった。

下半の軟かい層が堆積した後に上半にロームを主とした層を埋め堅めているものと推される。柱穴100を穿つ時点での補強とするよりは土壙そのものの埋め戻しに伴う行為と推するものである。

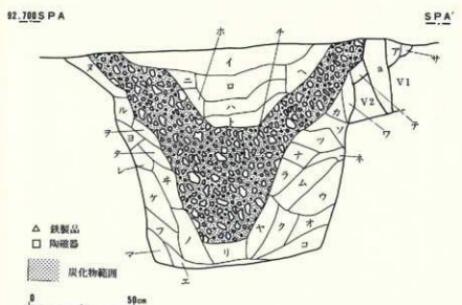
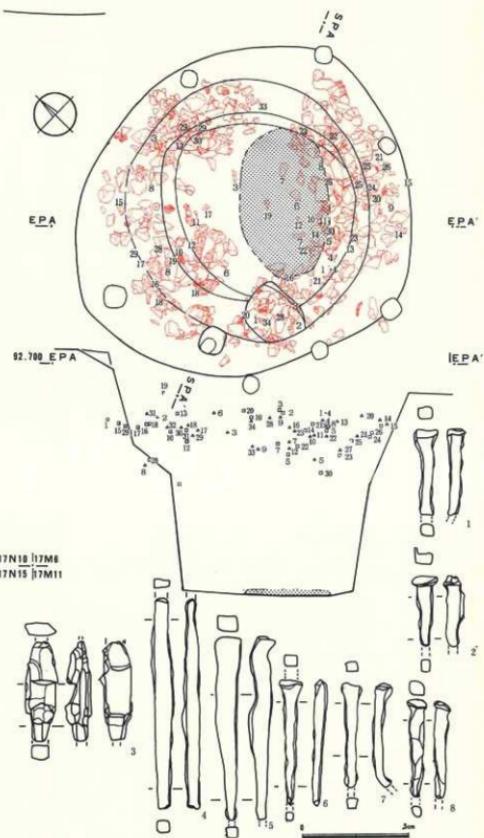


第18図 土壌1平面図他

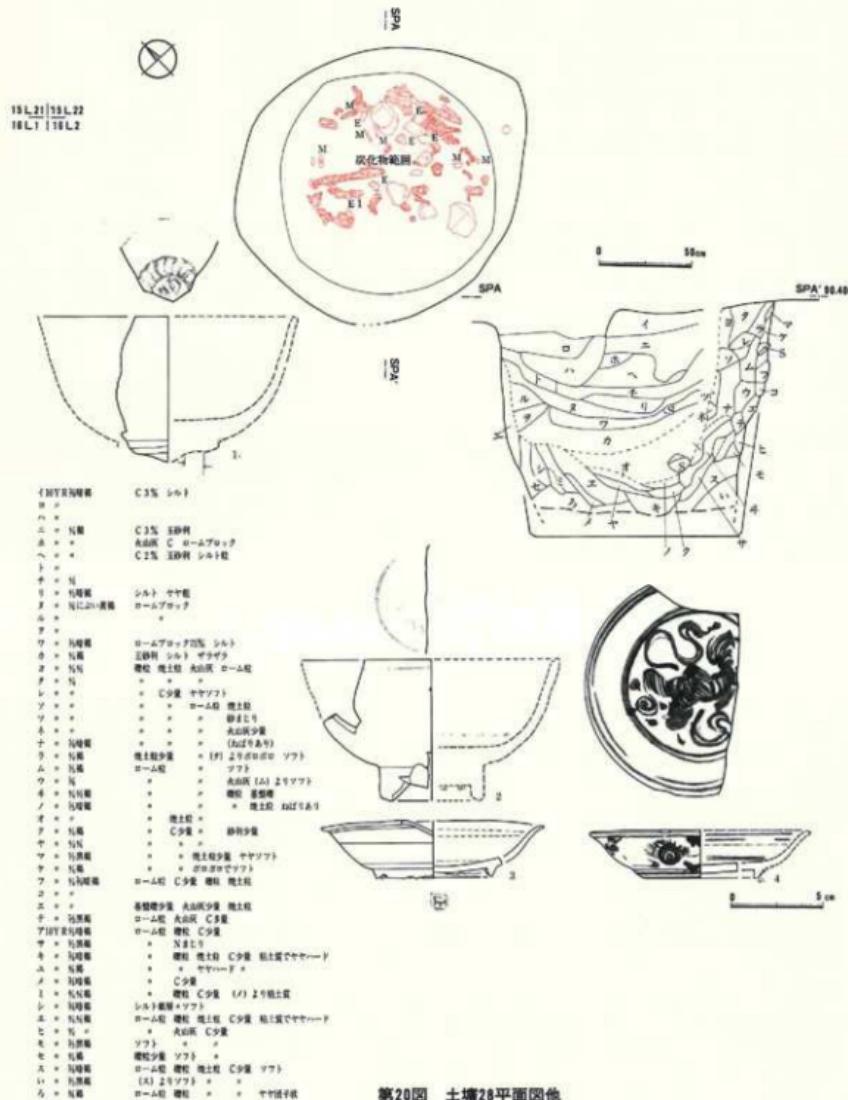
一 10YR% 菓	草根多量	ト 10YR% 明和 植物	ローム粒 豆腐粒 シルトアソート
2 10YR% 鹿	鶴乳粒 C少量 破粒 シルト	ナ 10YR% メ	ローム粒 C微量 大山灰 土松粒や岩
レ-1 10YR% 鹿	鶴乳粒 ローム粒 やや中量 シルト	リ 10YR% 馬	基盤層
2 10YR% 鹿	破粒 C微量 磨 シルト	メ 10YR% 貽視	破粒 ローム粒 シルト
3 10YR% 鹿	C微量 ややハード シルト	ル 10YR% メ	破粒 ローム粒 シルト (メ) よりやや固い
イ 10YR% 鹿	破粒 ローム粒 シルト (=メ) よりやや粗	ア 10YR% メ	破粒 ローム粒 シルト (メ) よりやや固い
ニ 10YR% 菓	破粒 ローム粒 シルト	ウ 10YR% 馬	理粒 ローム粒 C微量 ソフト
ハ 10YR% 鹿	破粒 シルト	カ 10YR% メ	火山灰基盤層
レ 10YR% 鹿	破粒 シルト C少量 (メ) よりソフト	ミ 75YR% メ	全面基盤層
メ 10YR% 馬	破粒 ローム粒 大山灰 シルトアソート	メ 75YR% 馬	全面基盤層 ロームアソート
レ 10YR% 鹿	破粒 ローム粒 大山灰 シルトアソート (メ) よりメ	レ 10YR% 明和	理粒 大山灰 アソート
	+多量		

表2 16L24. 25土壤1 出土遺物觀察表（鐵製品他）

推定器種	幅	厚さ	長さ	重量g	特 徴	回収番号	推定器種	幅	厚さ	長さ	重量g	特 徴	回収番号
鑿正	24	6	360		刃渡367mmに鋼製抜糸工具附	17回1	炭化物				8.7	春?	5cm大塊
鉤	8	6	53	49	角釘・先端部欠損	17回2	灰				5.9		
鋸齒					既名不明		繩文石器					アレード	3点
刮削器土器					5.1	直径3~30mm							
磨石粉					0.1	微細につき難不明							



第19圖 土壤22平面圖他



第29圖 土壠28平面圖像

III. 雜

イ 18Y 15月 露土粒 砂粒 C 少量 火山灰
多量 ローム・シルト質

- 18Y 15月 露土粒 砂粒 C 少量 ノー
ム・ワット

- 18Y 15月 露土粒 砂粒 C 少量 ノーム
砂モリ、雲

- 18Y 15月 露土粒 砂粒 C 少量 ノーム
ム・ワット質

- 18Y 15月 露土粒 砂粒 C 少量 ノー
ム・ワット質

- 18Y 15月 露土粒 砂粒 C 少量 ノー
ム・火成岩

- 18Y 15月 露土粒 砂粒 C 少量 ノー
ム・火山灰

ありありアソブ
S P (BB')
イ 10 YR 54/6 緩粒 土質粒 C 敷量 ハー
シ、シント、泡
ミ 10 YR 54/6 緩粒 土質粒 C 少量 オーム
火山灰アフ
ト 10 YR 54/6 緩粒 土質粒 C 敷量 砂をこ
り砂
ト 10 YR 54/6 全面ハーモブロードでハーバー
ト 10 YR 54/6 緩粒 土質粒 土質粒
ト(+)、より柔軟
ト 10 YR 54/6 緩粒 土質粒 C 少量 キラ
アソブ
ト 10 YR 54/6 緩粒 土質粒 全面ハーフト

チ	カラードルームスヘル
ト	10Y R 防滑地 硬磚 土質 C 機械 ハード
ム	ムンブリ
ハ	ハラウム 複合地 硬磚 土質 C 機械 全面ルーム
マ	マラムコ 複合地 硬磚 土質 C シルト ハード
キ	キラムコ 複合地 硬磚 土質 C シルト ハード
リ	リラウム 複合地 硬磚 土質 C シルト ハード
フ	フリムコ 複合地 硬磚 土質 C シルト ハード
リ	リラウム 複合地 硬磚 土質 C シルト ハード
マ	マラウム 複合地 硬磚 土質 C シルト ハード

タ	16周	C微量	砂粗	シルト	ラーム密
レ	16周	火山灰	砂っぽい	シルト	ソフト
フ	16周間	細粒	鈍土粒	C多量	ソフト炭化 物

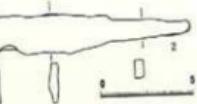
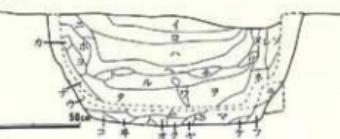
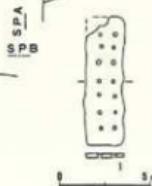
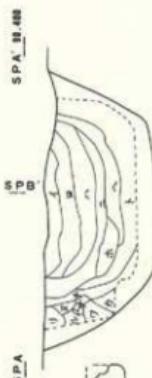
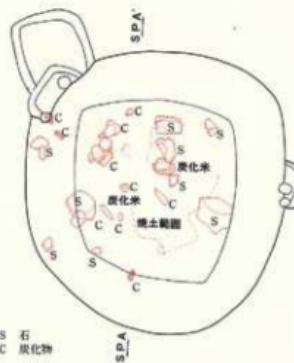
ク	外にふい真希	地大陸	C微量	火山灰	ム
サ	馬場裕	純土炭	C多量	火山灰	シルト
ミ	馬場裕	シルト	C多量	火山灰	シルト
タ	弘和	純土炭	C微量	全画面ーム。	ハード
ヒ	弘和	純土炭	C少量	全画面ーム。	ハード
ヨ	馬場	粹土	C微量	全画面ーム。	ハード
ラ	馬場	粹土	火山灰	C微量	全画面ーム。
ハ	弘和	C少量	硬壁	全画面ーム。	ヤマハード

15

1

卷之三

186 L.

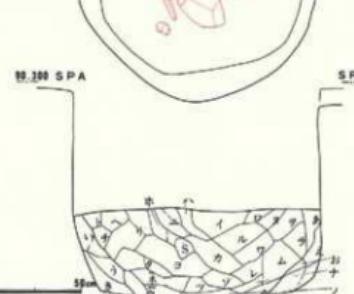


18L3 土庫33
1885年

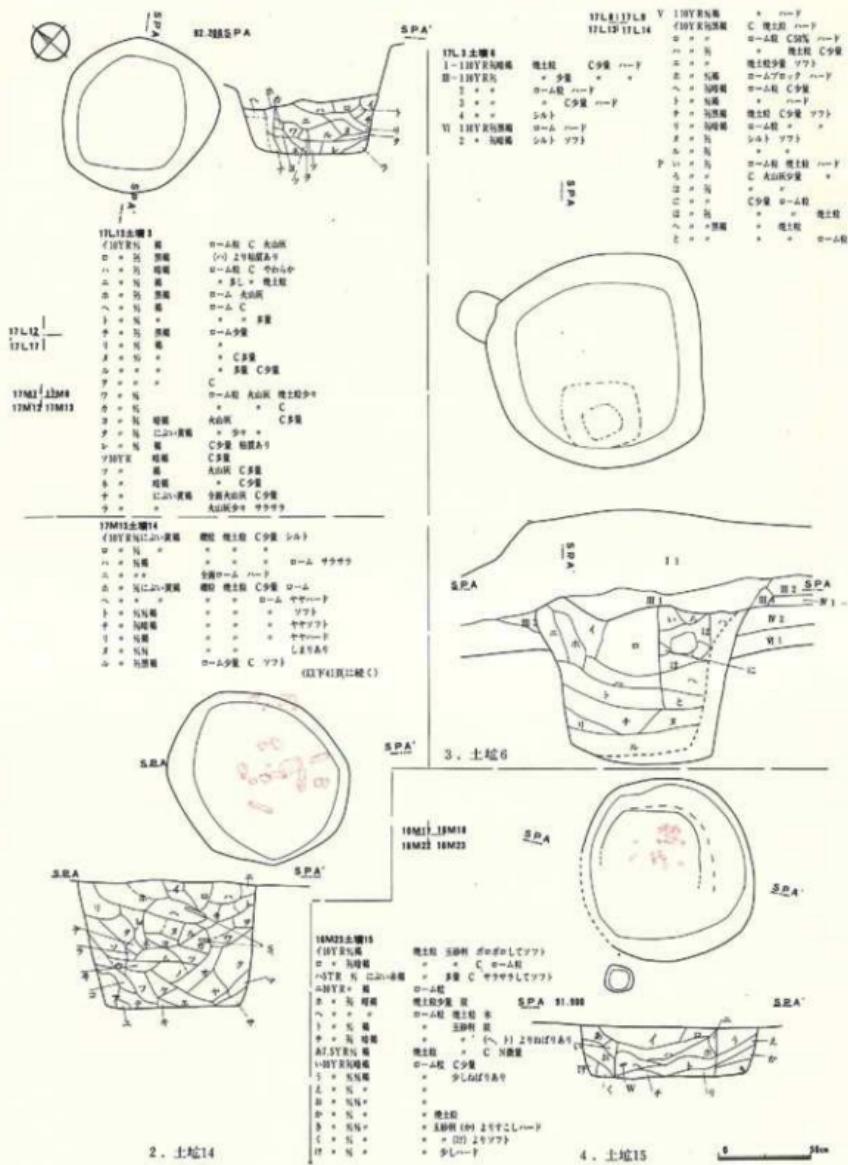
C少量	シルト	ソフト
+	+	+
C ローム混	-	-
+	+	堆積
+	+	+
+	+	ソフト
+	+	ヤハラギ
+	+	堆積 ハード
+	+	+
+	+	+
+	+	ソフト
+	+	ヨリカ

ボクタボク ハード
ロームブロット ハード
ローム版 シルク ボクタボク ソフト
シルク ボクタボク
ローム版 磁性 ハード
× × セサハーフ
× × シルク ボクタボク
× × × ソフト
× 磁性 ソフト

ローム社 ゲタリスト
 * C ソフト
 * ベースト社
 * ハード
 ローム社 松井利一 2・3層 ハード
 * C ソフト
 * ベースト社
 ルートル ソフト
 ローム社 磯村 ハード
 * 高山山 ベースト社
 * ソフト



第21図 土壌9(上)、土壌27(下)平面図他



第22圖 土壤 3 · 16 · 14 · 15平面圖他

表3 17M 6 土壙22 出土遺物観察表（陶磁器・鉄製品他）

種別	口径	直徑	器高	胎 調	胎 土	特 徴	備 考	回収番号
白 磁 壺				グレイムの質	質の白	底部から一気に外反する形	底部の縫隙6点1枚	
×				白	×	縫隙タ ロ織部		
×				質の白	白	小鉢を打つ縫は内反する		
小 計						12点	その他形態不明4点	
金 付 錫	146			質の白	白	落子鉢 口縫部 波瀬文	2点組合	
×				× のグレイ	×	× × ×		
×				質の白	×	× × ×		
×				あかいろのグレー	×	× × ×		
×				質の白	グリーンの白	底 部	17M 3 III-67と組合	
小 計						7点	不明鉢片1	
金 付 錫	90	32	18	質の白	白	圓弧矢 丹函密草文	2点組合	
×				質の白	質の白	× 口縫部 内面四方開文	17M 2 III-5②と組合	
×				質の白	白	× 重 律 鞍子紋		
×				質の白	質の白	× 十字花		
×				質の白	白	× 四分隔された中に梵字		
×				×	×	口縫部 漆巻文		
×				×	×	× 附 面 放取文	2点組合	
×				×	×	×		
×				×	×	番號記	番號記	
小 計						17点	その他形態不明4点	
美濃式 鉢	11			グレイムの質	質の白ラウンド	底冠矢	3点	
× 鉄 銘 瓶				質の黒	×	天日系網 刷 部	1点	
× 鋼 物 盒				グリーンの黒	グリーンのグリーン	×	1点	
越前 錫				グリーンのグリーンのグリーン	あかいろ(リーフ)のフリ	×		
×				くちいグレイムのグリーン	ペー ジュ	×		
×				くちい質	質のグレイ	口縫部		
小 計						3点		
かわらけ				ペー ジュ	口縫部小片	1点		

探査器種	幅	厚さ	径さ	重量g	特 徴	回収番号	種別番号	種別名	幅	厚さ	径さ	重量g	特 徴	回収番号
漆	15	7	(46)		黒漆 帯板+先端然欠損	1908.3	調査前	鏡頭9	12					
マス	9	7	(99)		断面角 先端部欠損	15+4	×	8					圓のみ既存	
手札	28	3	(36)		2ヶ目札				4	5				
×	25	3	(26)		+								(その他不詳2) 5点	
×	23	3	64		定期 伊予札				5	3			こい骨紋 乳頭1.7	
×	21	3	(45)		2ヶ目札				5	2			こい骨 × 2.9	
小計					(その他不詳14) 18点				4.5	2.8			こい骨 × 1.8	
鉢	9	10	(86)	17.5	角鉢 18cm定形	1908.5	×	4	3				× × 1.8	
×	7	8	(44)	3.6	× 先端然欠損	19+2	×	3	2				うすい骨 × 1.8	
×	7	5	(37)	3.9	+	19+1	×	3	2				うすい質 × 1.8	
×	6	6	(58)	4.6	+	19+6	×	3	2				グレイムの質 × 1.0	
×	6	6	(48)	3.7	+	19+7	×	3	2				薄 頭 × 1.0	
×	6	6	(46)	3.2	+	19+8	×	3	1.5				にぶい骨 × 1.0	
豆	8	8	69	0.5	角 鉢 宽 形				3	1.2			にぶい骨 乳頭1.2	
×	7	8	(69)	7.4	角 鉢 18cm定形				2.5	2			グレイムの質 × 1.0	
×	7	8	(39)	3.8	角 鉢 先端部欠損								11点	
×	7	7	(35)	3.4	角 鉢 +				13	6	13		番号缺	
×	7	6	(41)	4.8	角 鉢 18cm定形				20	45	170			
×	6	6	(46)	3.9	角 鉢 +								鏡頭左側 5~20mm	
小計					(その他鉢類品42) 95点									
鏡	4~6				小片~10cm大まで 7点								鏡子 35.3 クルクル形	
鏡面鏡片					68.1								鏡化粧 38.3	
不明鏡片													不明付鏡片 37.4	
銅鏡					弘法鑑定 鏡1488								鏡文土器 318点	
小計					(その他分のみ既存1) 不明1) 3点								石器類フタケ 361点	
八次金物					銅製七五次									

表4 16L-2主擴28·16L-9主擴9 出土遺物觀察表

測定器番号	口径	底面	断面	輪			調			輪			土			特			備考	回収番号
				幅	厚さ	重さ	幅	厚さ	重さ	幅	厚さ	重さ	幅	厚さ	重さ	幅	厚さ	重さ		
直面輪	140	42	76	グレイムのオーバードライシング						直面輪	外周口縁下に凹縫孔底縫縫内に網								高合内腔の日輪剥ぎ	2006.1
*	139	56	76	グレイムのオーバード						*	見出黒縫内に印化文								*	20.4.2
*				黄みのグレイ			黄みの白			輪振盪弁										
*				グレイムの黄鉄			*													
小計																			4点	
直面輪				グレイムの実質			黄みのグレイ			輪折の丸皿										
直面輪	120	62	30.5	黄みの白			白			電柱(?)屋上女士官当輪山山腹内の中に直面字										2006.3
*				白			*			電柱(?)屋上半下り白山系に多量の網状作付									2点複合	
小計										(性2)	3点									
乗付輪	130	65	26	みどりみの白			黄みの白			端柱(?)屋外面草支見込玉軸脚子側付									破損断面に漆刷修復あり	2006.4
L.	*	140		みどりみの白			黄みの白			端柱(?)屋外面脚子側										
*	*			*			*			*	*									
*	128			*			*			*	*									
*	*			*			*			*	*									
小計										(その他の形態不明7)	13点									
土	直面輪			くらいグレイムのブラウン			黄みのグレイ												17M18土盤1と同一個体	
*				グレイムのブラウン			*													
小計										(その他の1)	3点									
測定器番号	幅	厚さ	長さ	重量g	輪			調			輪			土			特			回収番号
28.	幅	厚さ	長さ	重量g	角転 半開信			鋼瓶			鋼瓶			鋼瓶			鋼瓶			無害又は 北米1008
*	8	7	(33)	3.3	角転 半開信			鋼瓶			鋼瓶			(鋼のため判読不明1)			2点			
*	7	6	(34)	1.2	*	先端部欠損		小計			小計			(鋼のため判読不明1)			2点			
*	6	7	(56)	3.7	*	*	*	紙石			紙石			20片			20片			
*	4	5	(31)	2.7	*	*	*	波紋粘土層			波紋粘土層			92.2			波紋5~30mm一部表面粗燥あり			
小計					(その他の鉱品21)			25点			骨			16.5			魚骨粗 魚骨で細かい			
小札					3点			種子			種子			4.8			セビ,アラミ種			
鍋	32	19	72		41輪部鉛片			鉛			鉛			340.0			340.0			
小計		7~4			(その他の小片3)			4点			鋼文土盤						166点			
半周, 製刀					5点			*			石器						フレーク			580点
刀柄具					鋼製, 硬化が進む文様等不明															
機械装置	口径	底面	断面	輪	調	調	輪	土	特	被	被	被	土	特	被	被	被	備考	回収番号	
直面輪				グレイムの黄			うすい黄			小鏡片								2点	2点は同一側面?	
かわらけ							うすいベージュ													
中間輪脚架				オーバード			あからいオーバードルのグレイ			削下部鏡片									17M3土盤1柱と同一個体	
測定器番号	幅	厚さ	長さ	重量g	約			鏡			回収番号			測定器番号			輪			回収番号
L.	小札	21	3	(39)	(船小片1)			2点			21001			110			(140×110-7×5.3)点			7点
直	6	6	(31)	角	直			小計			小計			12点			12点			
*	8	6	(17)	*	直			直			直			直			直			
9. 小計					(船小片15)			17点			骨			38.5			魚骨性 大部分は肋骨で細かい			
鍋	19	8	26		1点			種子			種子			1.8			タリミ種			
牛骨, 肉骨					8点			炭化物			炭化物			4.3			4.3			
筋道削除				0.6	完形,鰯のため判読不確			筋文土器			筋文土器						8点			
鉗頭					完形,鰯のため判読不確			3点			筋文土器						23点			
塵	78	55			全体が火熱を受けている			*			石器			フレーク			448点			
内壁	210				磨耗			火痕			火痕			火痕			448点			
*	160	130			切削・燃痕あり(後に2)			*			*			*			448点			

(2017.01.13+第140稿)

41

表 5 18L 3 土壌27他 出土遺物観察表

種別器種	幅	厚さ	長さ	重量g	特	記	回収番号	種別器種	幅	厚さ	長さ	重量g	特	記	回収番号	
刀子	22	6	124		先端削	欠損	21回2	骨				11.5	(焼骨片)			
鍔造剣用				9.0				椎子				5.6				
16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27				28.1	粒径5~20mm			炭化米				1.3				
角健	95	70			1			灰				81.6				
円錐	160	130			(他1) 2			鐵文土器						124点		
扁平錐	150	110			1			* 石器					フレーパー	402点		
小鉢					(他4) 8点											
種別器種	幅	厚さ	長さ	重量g	特	記	回収番号	種別器種	幅	厚さ	長さ	重量g	特	記	回収番号	
17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27				27.1	粒径3~20mm			炭化米				6.3				
不調和解剖				2.0				灰				8.2				
主 2				1.1	微細につき不明			鐵文土器						14点		
椎子				タル1?				* 石器					フレーパー	3点		
種別器種	口径	底径	高さ	重量g	特	記	調	熱	土				特	記	備考	回収番号
蜜付瓶					青みの白			白					小片のため不明			
蜜付瓶					緑みの白			白					獣子頭 形			
蜜付瓶					黄みのグリーン			黄みのグレイ					大腹 日輪銘	1点	3片	
17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27				6.0	《らしいグレインのブラウン			ベージュ					1点	2片		
種別器種	幅	厚さ	長さ	重量g	特	記	回収番号	種別器種	幅	厚さ	長さ	重量g	特	記	回収番号	
釦	9	8	(31)		角鉗			炭化米				6.11				
主 2					*	《他に折損品2》 3点		灰				29.5				
小鉢						4点		鐵文土器						31点		
不明、鉄片				31.1	粒径5~1.5mm大			* 石器					フレーパー	88点		
無熱粘土陶																
骨				4.3	魚骨他 大方は鰐骨で細かい											
椎子				0.01												
種別器種	口径	底径	高さ	重量g	特	記	調	熱	土				特	記	備考	回収番号
鉛削					グレインのグリーン			赤かるいオーラーのグレイン					口縁部			
尖頭火薬瓶					グレインの黄緑			うすい質					周囲り 口縁部			
硝硝酸鉛瓶					グレインのグリーン			ベージュ					1点	16C		
17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27																
種別器種	幅	厚さ	長さ	重量g	特	記	回収番号	種別器種	幅	厚さ	長さ	重量g	特	記	回収番号	
釦	7	6	(35)		角鉗	先端削欠損		骨				1.0	熱骨他 鮫骨			
計					(その他折損品2)	3点		灰				220.0				
不明、鉄片								鐵文土器						9点		
鉛石	7	6				1点		* 石器					フレーパー	24点		
椎子				2.0	平滑											
種別器種	口径	底径	高さ	重量g	特	記	調	熱	土				特	記	備考	回収番号
鉛削					《らしいグレインのグリーン			ベージュ					小片 鋸部分のみ			
貧乏鉛瓶					グレインの黄緑			黄みのグレイ					口縁			
16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27																
種別器種	幅	厚さ	長さ	重量g	特	記	回収番号	種別器種	幅	厚さ	長さ	重量g	特	記	回収番号	
釦	5	4	56	3.5	(他 折損品1)	2点		骨				29.5				
不明、鉄片	17	4	15		(他 小鉢4)	5点		鐵文土器						17点		
無熱粘土陶				17.0	粒径2~10mm			* 石器					フレーパー	41点		
骨				1.3	魚骨他 鮫骨											
椎子				0.1												

j 土壌15（第22図4）：調査区北部16M18・23区に位置する。100×90cm、深さ30cm程の円形土壌である。内部中央55×60cm程の範囲の上の方が歓かく、暗褐色が強く、炭化物や焼土も多く、同心円状に上面からは観察された。覆土中の遺物は表11に記した。幕末以降と推される貧乏地利の口縁部破片が出土した。土壌南に柱穴が1個ある。

(6) 櫛列跡地

a 第二平坦面端部の造成（付図・第5図H-H'）：平成元年調査により、空堀直上部の第二平坦面端部は盛り土のされていることが判明していた。又、前項、土壌28の記述中でも一部触れたところである。16M5、13区で、櫛列跡の形成と端部盛り土の状況を知るべくトレチを設定し土層の観察を行った。図中III-4とした60cm程の厚さの土層は旧地形に堆積していたであろうIV-V層を削りとて、一旦V-2層上面のほぼ水平な面を端部に約2m幅でつくり出して土の流出を防ぐ工夫をした後に、ロームブロックや基礎石を主とする土を盛り土して堅く安定した端部をつくり出しているものである。櫛列の掘り込み面までの盛り土の厚さは1m余である。又17N15区の櫛列の外側で石組炉の一部を検出したが、これは縄文時代の遺構（窓穴住居址内の炉）かと推している。更に北西方向に遺構は続いていると思われる所以あり、この第二平坦面北西部・側方部分を、削り落すことによって、この形をつくり出すと共に寺ノ沢川沿いに帯状の平地（郭）を形成していると推される。

b 櫛列跡（第5図BB'・GG'・HH'、附図）：空堀直上の正面に近い16L1区付近迄は上面から3条程の櫛列跡を見る事ができたが、側方に回るに従って2条より確認できなくなってしまった。GG'では、立ち木の根の為かも知れないが1条しか確認できなかった。平成2年度調査の中央橋寄り附近端部では5条以上を見たところである。側方であるため、造りかえ等は局部補修程度に止めたため、端部崖線の作り出し、成形によって欠失したため等が想定されるところである。HH'によれば外側の櫛列の方が新しいが、櫛列自体交錯が見られるようであり、単純に内外で新旧は決め難いと思われる。

c 小石圓み配石遺構（第4図BB'、付図PL-17）：調査区北側16M22・23、17M2・3区に跨

り、5×6m程の範囲で粒径10mm前後の砂利の散布が見られた（付図長破線）。その中央北西寄りには更に密に分布している（同一点破線）。この集中部分を囲うように径7~8cmの偏平な円礫が巾30~90cmで一部屈曲しながら4m程溝状に並んでいる。砂利を含むIII-1とした層の厚さは最大15cm程である。この付近はその下位にⅢ層として把えられる堆積がいくつか見られるが、石圓み、砂利敷の該遺構の構築とすべき明瞭な掘り込み等は把え得なかった。流水等を示す堆積も見い出せない。勿論流水の前提となる施設もみてはいない。方角としては一般には逆流もある。²¹この配石遺構の南東に前述の大形建物跡が重複して見つかりおり、位置的にはこれら建物跡の裏とも推される。後園を俗に「廬の内」と称したといい、²²（廬園十一）又植木の周囲を四角に小石で囲った例が絵巻にみられること、（国宝高麗人形図）、（水路をつくる時）小かわらけ程の平らな石を並べ、小石を數く例（作庭記一古事類苑）などから、この配石遺構の性格的一面を推測し得るかと思われる。

(7) その他の出土遺物の概要

堅穴遺構、土壙等の一部について記述した上で覆土等出土の遺物については略述した。未だ帰属する遺構の特定し得ないものや記述を省いた遺物に関連する遺物等について補足するものである。

a 陶磁器（第23図）：出土陶磁器を集計し表8とした。第23図の陶磁器については表6の観察表に記した。染付皿4-6は今迄当遺跡では余り留意してこなかった一群であり、他の例も筆者は良く知らないが、当遺跡の終末に近い時期に属する一群かと近年推しているところである（本概報XII）。7の粉青砂器碗は初出である。8-10は本概報Ⅷ写真版等で一部触れたものを図化したものである。8、10の帰属については他の出土例とも比し（7との関連も含め）今一度検討すべきものと考えている。11の唐津脊形碗は昭和55年に上半部が出土していたがここ数年の調査で破片が増え、今年度底部片の出土接合を見るに至った。鉄軸の碗は鬼板を塗った地肌が丸く斑状に腹部を一巡するよう釉がけに工夫を施したものである。

青磁碗：直口縁無文と線描蓮弁文がある。皿は後花皿である。

白磁碗：口縁部に波状文、胴部に綿の沈線のある低平なもの、丈高の高台を持つ底部片で個体数

は少い。皿は殆んどが端反り皿で底部から外反する皿が若干ある。また糸底の底径の一回り小さな丸皿になるかと推されるものが2例ある。高台に抉りのある浅い丸皿、面取りの环の底部かと推されるものも少量ある。又、见込み蛇の目で腹部の膨むもの、器形不明の小片がある。又偏壺かと推される破片がある。

染付：碗は口縁の強く外反するもの蓮子型のもの、腰部が張り、外面にアラベスク、見込に十字花を描くものなどがあるが、蓮子碗が多い。又一部今まで出土していない文様を描くものも見られる。皿は端反り獅子皿をはじめ各種が見られる。外面に渦文、見込みに梵字を描く端反り皿が比較的多いようである。又新出と思われる文様のものもある。

褐釉：“呂宋壹”と称される四耳壺で三個体分があるようである。前年敷片が見つかっていた。

美濃：碗は劍丸・線刻蓮弁を模したものが多いが 1×2 cmの雷文を口縁下に廻らすものがある。皿は端反りの印花文や無文大中の皿が多い。1周り径の大きいもの、5cm以下で見込に印花のある豆皿もある。端折・丸菊皿が少量、外面口縁下1cm以下露胎となるもの、見込み・外面腹部以下露胎のものなどもある。香炉は小片3片が見られる。

鉄軸：碗は、端部を薄くつまみ高台脇に挟い削り幅を持つ輪高台になるものが多い。高台脇の広い輪高台のものなども見られる。皿は口径45、底径30、高さ35mm程の糸底の丸皿2~3個体分である。漆黒に近い釉調で、高台ウラにトチ痕がある。

志野：筒形碗、向付、丸皿が出土しているがその殆んどは一部2年度出土の物も介しながら元年度出土のものと同一個体と解される物である。これにより、元年度出土の向付、筒形碗の本来の位置はほぼ今年度調査区のうちとができる。なお、鉄軸が茶褐色に発色した3例目の向付も出土していた。

唐津焼：図示した以外は丸皿の破片が殆んどである。杏形碗は昭和55年、平成元年、二年に次いでの出土である。未だその帰属遺構を決定し得ないが、本年度調査区内の可能性は高いと推する。

土器(かわらけ、土師器)：富山大学宇野謙男先生のご教示を頂戴したが、京都産の土師器がそのまま勝山館に搬入されている可能性が高いとのことであった。年代的には京都の第I期からIII~IV

期に亘っているとのことであった。本年度調査区出土の遺物にはII~IV期のものが見られた。

越前：壠鉢と壺類である。越前壠鉢が全壠鉢の大半を占めている。口唇、端が丸味を持つ方形で内面の少し下った位置に一段を有する勝山館内出土越前産の初期のものも見られた。壺類は、大壺、中壺、壺と推されるが接合作業等が充分でなく不明のところが多い。

瀬戸・美濃壠鉢：薄手のものと厚手のものがあり後者の鬼板には光沢がある。

b 鉄、銅、木、石製品他(第24、25図)：鉄製品その他について主要な物を図示し、観察表を表7として付した。又、全体については集計表(表9、10)とした。

鉄鍋：底部中央に丸型湯口がある。

鉄塊：調査区北東端、15L21区から平成元年度に出土したものである。詳しく述べるは別稿に赤沼氏が述べられているが、銅塊とのことである。半円形の周縁部は上下で大きさが異なり、丸味を帯びた台形状をなすが、直徑部分は断面に複数の細長い面が生じており、人為的に分割された痕跡と推される。径が 230×250 mm前後、重さ11kg、厚さ5.5cm程の円形の鉄塊が最初につくられ、二分されたと思われる。なお穴澤義功氏のご教示によれば、径が小さく、幾分凸面を有する方が下であろう(圓と上下が逆)とのことである。

その他の鉄製品：鍋の重量が最も多い、次いで釘等の建築用具、武器武具である。宗教具としたものは鉢・皿である。鉢？釜？としたものは小破片である為推測の域を出ないが、鍋とは口唇のつくりが異なる容器をわけたものである。

銅製品：河骨型の煙管が柱穴内から出土している。

鍛冶関連遺物：るつぼは小片であるが、使用により熱変している。特に小さい1は発泡が顕著である。土製品としたものには、スヤ入りの粘土製で赤変し、平坦な一面を有するものがみられた。炉体(壁)の一部かと推したが、内田俊秀氏のご教示によれば、鉄型の一部とのことであった。

鉄砲玉：船製の径18mm程のものである。從来出土のものよりは一回り大きいものである。

表 6 陶磁器観察表

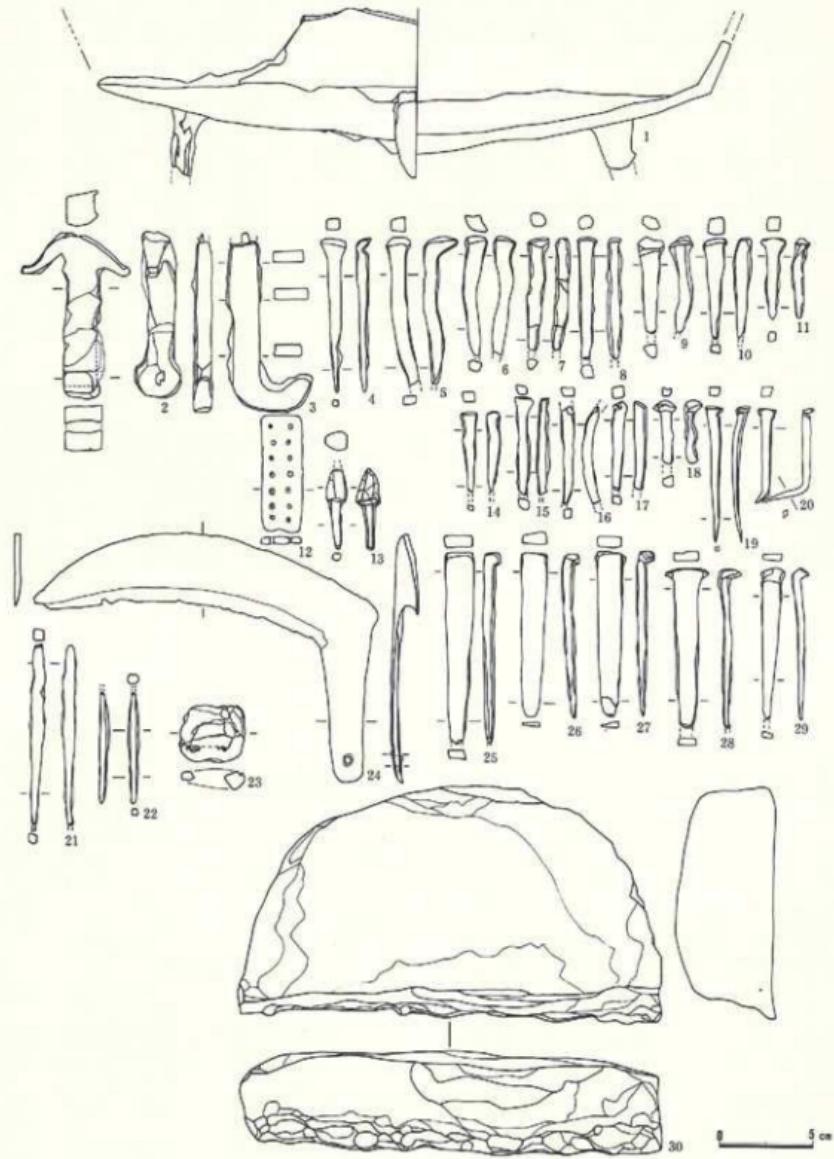
種別	部類	口径	底径	鉢高	施 調	施 土	特 徴	出 土 地 点 等	回収番号
白 磁	皿	120	61	27.5	真のみ	白	縁取り全面施釉内面に移付有	17M12上横3	2280 1
*		75	30	27	真のみ	白	縁取り全面施釉内面に移付有	16L3上III	2
染付	皿		61		真のみの白	灰白色	足元芳文文様と腹の縁邊に少少付有	17L12II	3
角付	皿	157	85	32	うすい青みの緑	白	縁取り全面施釉内面に移付有	16L22I	4
*		134	84	38	真のみの白	*	口縁内側・足元全面に草花文文様に移付有	17N 1~III	5
*		138	84	26	真のみのグレイ	*	縁取り全面に移付有	17N 5 I	6
平 帯	皿	184	60	67	グレイブルの黄	真のみのグレイ	縁取り全面に移付有	17M 3 P 496地	7
尖 端	皿	116	46	65	ブタクシムの黒	ベース	縁取り全面に移付有	17N 15上横3	13
唐 洋	皿	129	66	25	グレイムのオーラー	赤褐色	口縁全面に移付有	16L16P 659地	14
*		112	46	34	オリーブ	*	縁取り全面に移付有	16L21P 542地	12
唐 洋 各 形	皿	161	60	75	グレイムのグラクソ	真のみのグリーン	低い〜東高台・脚部に施釉文様	16L21P 566	11
白 磁	皿	156			明るいグリーン	真のみのグレイ	口縁全面に移付有	16K11H C90	8
*					真のみのグレイ	真のみの白	足元全面に移付有	16K17D 地	16
*		140			真のみの白	うすい黄	縁取り・伏焼き 口丸平	17K8-L 54	9

表 7 鉄製品他観察表

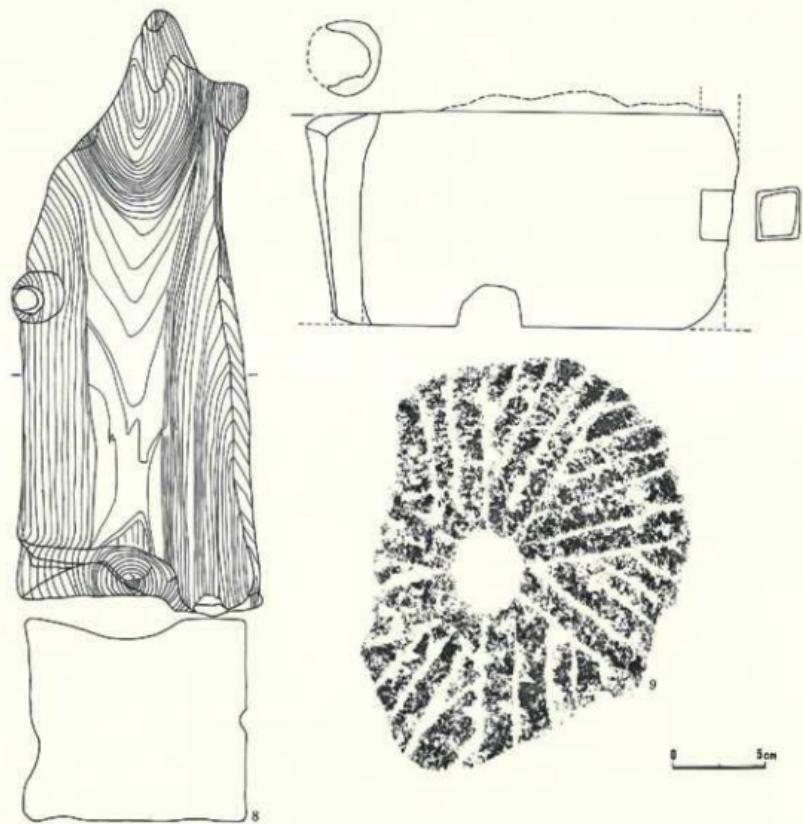
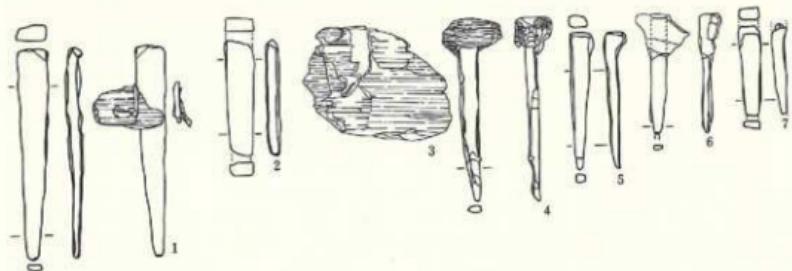
種別	中	厚	長	重量 g	外	形	備	番 号	出 土 地 点	回 収 番 号
柄				2,680.0	炉に転用。無土焼成、底径325mm			16M24	2468 1	
筒金?	18	9	96	79.1	約5mm位の孔を2つ持つ筒端に分岐(?) (圖)			17L17I		2
*	22	17	89	50.8	先端鋸歯形。(手標記着狀態で出土)			17L17I		3
釘	9	7	8.0	13.1	角釘 完形			17L12P97		4
*	8	8	(38)	25.1	*	先端黒欠損		16L16P 659		
*	8	8	064	14.8	*	*		16L12I		
*	9	7	(82)	5.8	*	*		17M 5 P 293		
*	8	7	(80)	7.4	*	*		17L18P7		
*	(11)	8	(32)	6.9	*	*		17L14H		
*	8	8	(37)	6.2	*	*		17L17I		
*	8	6	(42)	5.0	*		目立つ穴	16M23H		
*	7	7	(43)	1.9	*	先端部欠損		17L16H		
*	7	4	(31)	5.5	*	*		17L16P90		
*	6	6	(34)	2.0	*	*		16L 8 III		
*	7	7	(46)	4.3	*	中間部のみ		17L17I		
*	6	4	(32)	3.9	*	*		16M22H		
*	5	4	(80)	5.8	*	完形		17M 4 I		
*	5	4	(64)	6.2	*	*		17M 4 I		
*	14	5	102	27.0	平釘、球状完形			17N15H		25
*	14	5	87.5	18.4	*	完形		16L 5 L 5		26
*	14	5	86.8	19.0	*	*		16L29H		27
*	15	4	94	19.1	*	*		17N15H		28
*	11	3	80	8.1	*	目立つ穴		17N15H		29
小 札	21	4	63	13.0	伊予札			17M18P74		12
筆	12	11	42	83	筆身19cm先端粗欠損			16L21 I		13
筆	29	12	34	18.7	筆身具断面や中空			16M18P90		23
*	4	5	58	3.2	先端既無作り出しなし			17L 9 P 237		22
*	7	6	97	10.7	*			16L21 I		31
筆	38	2.5	132	112.0	完形			17N14I		24
鉄 地	126	55	226	5,388.0				15A.21III		30
地 村	118	169	323		角材断面oval形。上部腐蝕の為細くやせている		粗根	17M 4 P 672		
石 白	(296)	126	(296)		軟白、上白、主張8分割縫隙4~5本			17L 7 P 282		



第23図 出土遺物(陶磁器)



第24図 出土遺物（鉄製品）



第25図 出土遺物（鉄・木・石製品）

表8 陶磁器集計表

(総破片数)

品種	舶載					國產									合計	近世	總計
	中	國	小計	窯戸美濃	灰釉	鐵釉	志野	唐津	土器	越前	洲州	美濃	信楽	小計			
碗	119	13	206	2	13	353	40	61	3	6					110 (463)	463	46 509
皿	38	276	770	1		1,066	250	14	33	34	51				382 (1,468)	1,468	19 1,487
盤	31					31									(31)	31	31
杯	3	8	3			14									(14)	14	14
香炉	3					3	1	1							3	5	8
擂鉢															164	7	171
匙			126			128									479		479
袋物	2	2				1	5								8	1	9
その他	2		2			4									1	2	6
合計	119	299	981	3	126	14	1,624	291	76	36	41	51	651	12	1,158 (1,950)	2,782	125 2,907

表9 鉄製品集計表

種別	数量	点数	重量(g)	備考
調理具		197	8,580.7	
鍋	(197)		(8,580.6)	内耳片2
建築用具		408	1,445.3	
釘	(394)		(1,184.4)	
掛金	(1)		(79.1)	
タ	(1)		(50.3)	
平釘	(12)		(131.5)	
武器・武具	96		529.9	
小札	(79)		(268.6)	
鉢	(6)		(106.8)	
刀子	(8)		(123.3)	
金具	(2)		(22.9)	
鍼	(9)		(8.3)	
漁撈具	9		112.1	
刺突具	(1)		(30.3)	
カギ	(6)		(55.6)	
ヤス	(2)		(26.2)	
農具?	(3)		157.9	鎌
宗教具	4		165.3	鉢? 3皿? 1
茶道?	16		131.7	アサヒ1 片数15 茶碗
不男	63		167.1	
小計	784		11,158.4	
近代	17		128.6	
平釘	(10)		(120.7)	
洋釘	(7)		(7.9)	
合計	813		11,418.5	

表10 銅製品他集計表

種別	数量	点数	備考
武器・武具	3		
銅管	1		腰、首火薬の口徑が16mm、肩が付く膨返しの弯曲が大きい。
銅錢	36		皇宗通宝1、熙寧元宝1、他銭名不明
その他	9		用途不明
計	49		
るつぼ	2		
羽口	4		
土製品	9 (鉢型)		
火熱粘土塊	2		
鐵津	26	369.7g	
鐵造剝片		11.2g	
計	43		
硯	1		
石基	1		
石白	1		
砥石	49		
研石	12		
その他	34	円、偏平硯他	
計	98		
土製品	6	陶鑊	
鐵鉢	1	銅鉢	
合計	197点		
近世以降	2	(寛永通宝、一鉢銅貨)	
総計	199点		

III 小 括

1 遺構

本年度調査区中央部に1~6号の掘立柱建物跡を想定した。第1号建物跡は3×3間、2室に2×2間の一室が鉤形に付く6.6尺等間、第2号建物跡は3×5間で6.0~7.0尺の柱間寸法で、北隅に2×3間の一室がある。第3号建物跡は3×9間に2×3間が鉤形に付く6.5尺等間の柱間寸法である。内部には3×3間、二室が想定される。又、第4号建物跡は2×9間で8.2尺×6.1尺の柱間寸法であり、2×3間の一室、2×2間、三室等が想定された。

前年の調査で6.5尺等間4×6間の大形の建物跡が想定され、從来検出の建物跡とは大きく異った様子が窺われたところであるが、上記に想定された建物跡は勝山館の構成を考える上で、更に重要な要素となるものと推される。鉤型を基調とする建物跡(1、3号)、二列平面配置の2号建物跡などがあり、3×3間、2×3間等の室が想定されたが、こうした建物について当町文化財保護審議会特別委員として建築遺構のご指導をお願いしている文化学院の鈴木直先生から、「新羅之記録」にある「客殿」に相当するものとして良いのではないかとのご教示を賜った。

客殿については「客対の間」といい、「六間」、「疊」等の記述が太平記にあり、又同書中に「六間の会所」ともあるようである。貞丈雜記には「御会所九間」の記述もあるようである(以上「古事類苑」による)。

先に想定した間面規模等については、調査検討すべき事が多々あり、訂正変更の生ずることは大いに考えられるところであり、こうした諸書の記述に単純に例を求めるのは早計に過ぎることであるが、今迄の勝山館の調査では見い出しえなかつた新たな性格の建物の存在を検討する必要が生じたことを示すところとなった。

これについてはこれらの建物跡の見られた地区では、堅穴建物跡の見つかなかったことも留意される。又同じように小石畳み・配石遺構が、これら建物跡の北西に近接して見られたことも併せて検討すべきことと推される。

堅穴建物跡については、館内的一段低い宮ノ沢

地内の、総柱の“倉”を主とし、掘立柱の小規模な“住居”建物跡が見られ、零細な陶器等の出土を見る平坦地には、見られなかったこともその性格を考える上で留意しなければならないことである。

調査区北西隅から一段低い寺ノ沢地内へ降る細い道がある。この道は館の時代にも使われていたと思われるが、この出入口に対する所に、石を數き詰め、2×4間3尺等間の礎石を据えた遺構が見つかった。

石敷きと礎石の組み合せの例は人吉城の隅櫓に見られるようであるが、下部を160cm前後の厚さで整地する(和田好文1989、貿易陶磁研究9)などの違いが見られる。更に本遺構の場合長軸が側方の切岸に直交しており、機能が今少しわからぬところである。又、4間の門の例は殆どみられないようであり、2×3間の規模としても、位置的に門とすることも難しい。

土壇には幾つかの類型が見られるようであるがまだ充分に整理し切れていない状況である。同心円状に二重に覆土が形成される例が多いがこれについては、主体部覆土と周囲の埋め土の組み合せが想定されるところであるが、主体部の性格を明らかにするにはいたっていない。

第二平坦面の端部は直線的に形成され、“切り岸”状となって、直下の第一平坦面空堀跡、側方寺ノ沢川へと続いている。この直線状に落ちる斜面の肩で柵列跡が2~4条見つかっている。溝状に土を掘りあげその中に柱を立て柵列をつくる。柱の間隔は比較的密接している。この柵列跡の設けられる端部の北東半、館前方に面する部分は盛り土成形が行われている。今年度の調査では一旦100cm程端部の斜面部分を切り下げて、150cm幅程の水平面を作り出し、その上に120~150cm程、粘土層を主とした盛り土を行っていることが判明した。これは斜面への直接の盛り土による流出を防ぐ工夫と推される。調査区前方の空堀跡や、中央自然研究路を夾んだ南東端部や直下の空堀跡の調査で、第二平坦面端部から空堀Bの外側1mぐらいのところまで緩やかな斜面を形成していたのが旧地形であり、それを切り落とし更に掘り上げて、

據などを伴う館の形としていることが判っていたが(本報X、II)、その端部の形成に今一工夫手の加えられていたことになる。他方側方寺ノ沢側は17N15区の柵列跡外側端部に縄文時代のものと思われる石組跡が見つかったことから、縄文時代の住居址がかつて存在していたと推されるものである。恐らく今は切り下げる斜面となっている部分に、その遺構が続いていると思われる。この側面斜面下には、一旦幅10m弱の平坦面がつくられ、それから寺ノ沢川の流路となっている。この部分の旧地形は寺ノ沢川の岸まで続く斜面であり、それを直線的に切り落とすことによって、第二平坦面の側面を切り岸状に作り出すとともに、直下に幅10m弱の帯状の平坦面を作り出していると推される。

2 遺物

遺構と遺物との相互関係について十分な検討を行っていないのではあるが、前年度迄の調査で出土していた、志野筒形碗、向付、唐津杏形碗、美濃大瀬茶入、同水滴?等の同一個体片が本年度調査区内でも出土、接合等を見たことは本年度調査区分がこれらの遺物の帰属する地区の一つとしての可能性が高いと推される。茶入や水滴?は館後方の空堀跡外側にある貝塚(ゴミ捨場)出土のものと同一個体であることから、この第二平坦面での

生活廃棄物が貝塚の一部を形成していることになり、館の各地区が相互に関連して機能していることやその居住性が窺われるところである。

5.5kgの鋼塊の存在が明らかになったことは、この時代、或いは勝山館の鉄の生産、流通、加工技術等について新たな問題を提起するであろう。

5.5kg或いは11kgという鋼塊の大きさは生産、流通の単位としてあったものなのか、その生産地はどこに求められるのか、赤沼氏は館内での生産の可能性も否定し切れないとのご見解のようであるが、その場合館内での消費が目的なのか、更に移動させる目的があったのか、前者の場合にしても何に作りかえられるものであったのだろうか。一方こうしたいわば貴重な原材料ともいいくべきものが廃棄されていることも考えなければならないことである。昨年度調査鉄鍋の放棄と破壊して柱穴の掘られた例から鉄製品に対する淡泊さを指摘したところであるが(本報X)、或いは全く逆に館内に恒常的に鉄の技術のないことが宝の持ちぐされ的な感覚で、こうした廃棄等につながっているのであろうか。もっとも筆者が子供の頃年に数回定期的にやってくる“雑品屋”から僅かな小遣いを得るのを楽しみに、鉄、銅屑を集めた体験からは、結びつけ難い想定ではある。

又浪岡城の鉄瓶?も留意しなければならない。

IV 保存処理

1 木製品

今年度はPEG含浸処理を完了した木製品のうち870点をエタノールによる表面処理を行なった。内訳は食膳具である箸、折敷、生活用具の取手、曲物底板等、建築用材である板材、柵材、武具の鞘、その他用途不明品である。また昨年度PEG含浸処理を完了している木橋についても同様にエタノールによる表面処理を行なった。

2 鉄製品

今年度は770点の処理を行なった。そのうちの170点は再処理遺物である。これら170点の鉄製品は収納中に表面よりの錆汁の噴出、赤錆の発生等が確認されたため再処理となったものである。再処理はまずキシレン浸漬により鉄表面の樹脂除去後、錆除去、脱水を行なった。その後從来通りパラフィンNAD10の20%、30%溶液の減圧含浸を行

なった。尚処理済遺物の錆汁噴出等の最大の原因としては収納場所の湿度が65~85%であり、極めて多湿で劣悪な条件であった事があげられる。遺物の劣化確認後収納場所をかえたり、暖房等を入れ低湿化をはかっているが、やはり湿度が60%~70%位であり今後収納場所が問題となる。再処理遺物の内訳としては鉢物である鍋が圧倒的に多く73%を占める。その他釘等である。また新たに処理を行う600点は從来通り、錆除去、脱水後パラフィンNAD-10の20%、30%溶液を行なった。処理遺物の内訳としては鍋、釘が全体の67.5%を占める。その他小札、小柄等である。

3 鋼製品

從来までは簡単な錆除去を行ない、収納していたが、徐々に劣化し始めたため本年度より処理を開始した。(以下60頁へ続く)

V 上之国勝山館跡出土鉄器・鉄塊の金属学的解析(1)

岩手県立博物館 赤沼英男

北海道松山郡上ノ国町に立地する勝山館跡は、15~16世紀代の館跡である。同遺跡からは、種類、量ともに豊富な鉄器、多量の鉄滓および鉄塊が検出されている。このたび上ノ国町教育委員会から、館内における鉄器製作の概要を明らかにし、さらに鉄器または鉄器製作に使用された鉄素材の流通の実態を解明することを目的として、出土した鉄器、鉄塊、鉄滓の解析を依頼された。解析は継続中であるが、鉄器ならびに鉄塊の地金の材質に関する知見を得ることができたので、以下にその結果を報告する。

1 分析試料

分析を行なった資料は、小札、T68釣り針、T70釣、T71釣り針の4点と鉄塊の合計5点である。資料の外観および分析用試料の採取位置をPL.19-1に示す。

2 分析方法

鉄器から採取した試料片については、ダイヤモンドカッターを使って2分した後、大きい方の試料片を組織観察に、小さい方の試料片を化学分析に供した。化学分析用試料片はエタノール・アセトンで洗浄・乾燥後、酸を使って完全に溶解し、結合誘導プラズマ発光分光分析法(ICP-AES法)によって、必要成分を定量した。組織観察用試料片は、樹脂に埋め込みダイヤモンドベーストを用いて十分に研磨した後、金属顯微鏡によりマクロおよびミクロ組織の観察を行なった。さらに、残存する非金属介在物(鉄以外の不純物)については、

EPMA(エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー)によってその組成を決定した。

鉄塊については端部から中心方向に切り込みを入れ、幅5cm、厚さ1cm程度の試料片を採取した。採取した試料片のメタル部分から、PL.19-2に示す7個の分析用試料片を作成した。作成した試料片のうち3個を今回の分析に使用し、残りについては今後の調査のため保存した。

3 分析結果

3-1 鉄器・鉄塊の化学組成

表1は各試料片の化学組成である。小札には鉄鉱石の指標元素であるPが0.1%以上含有されている。T.Feが63.38%と低く錆化が進んだ試料であるため、周囲の埋納環境からの汚染の影響をただちに否定することはできないが、地金の製造には含りんの鉄鉱石が使用された可能性が考えられる。他の3点の鉄器、鉄塊については鉄鉱石の指標元素であるCu、Mn、P、砂鉄の指標元素であるTiがいずれも低いレベルにあり、化学組成でもって原料鉱石を判定することはできない。鉄塊中の炭素含有量は1.7%以下であり、この分析値から鉄塊は鋼塊であることがわかる。

3-2 試料片のマクロおよびミクロ組織

PL.19-3は鉄器、鐵塊から採取した試料片のマクロ組織である。白色部は健全なメタル、灰色部は黒錆層、暗灰色部は赤錆層、黒色部は試料中の亀裂、欠落孔を表す。小札を除く4点の試料片は、そのほとんどが健全なメタルによって構成さ

表11 鉄器・鉄塊の化学組成(%)^a

資料名	T.Fe ^b	C ^c	Cu	Mn	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg
小札	63.38	—	0.010	0.005	0.141	0.003	0.444	0.064	0.014	—
T68釣り針	M	—	0.014	0.001	0.027	0.008	0.034	0.002	0.014	0.002
T70釣	M	—	0.008	0.001	0.017	0.006	0.052	0.002	nd	nd
T71釣り針	M	—	0.015	0.004	0.015	0.065	0.176	0.010	0.030	0.011
鉄塊 ^d	M	<0.5	0.01	<0.01	0.018	0.004	<0.01	<0.001	<0.002	<0.001

a : ndは検出されず、—は分析せざるを表す。

b : 鉄塊の分析は新日本鉄釜石分析センターによる。Cは推定値である。

c : Mは健全なメタルを表す。

d : 燃焼赤外線吸収法による。

れている。残存状態は良好である。

PL20-1-aは小札に観察される非金属介在物の2次電子像と反射電子像、PL20-1-bはEPMAによる定性分析結果である。非金属介在物は $\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2\cdot\text{Al}_2\text{O}_3\cdot\text{CaO}\cdot\text{K}_2\text{O}\cdot\text{MgO}$ 系のガラス質けい酸塩からなる。 $\text{FeO}\cdot\text{Fe}_2\text{O}_3\cdot\text{TiO}_2$ 系のチタン化合物が検出されないことから、小札の製作に使用された地金は、鉄鉱石を原料鉱石として製造されたものであることは明らかであり、化学組成とも合致する。PL20-2-aはT68鉤のメタル中に残存する代表的な非金属介在物の2次電子像と反射電子像であるが、非金属介在物は灰色粒状化合物(W)、灰色角状化合物(T)、暗灰色化合物(F)、黒色領域(D)の4つから構成されている。図5-1-bに示す各化合物および黒色領域(D)のEPMAによる定性分析結果によれば、化合物(W)からは Fe 、化合物(T)からは Fe 、 Ti 、 V 、 Al 、化合物(F)からは Fe 、 Si 、黒色領域(D)からは Fe 、 Si 、 Ca 、 Al 、 K 、 Mg 、 Na 、 P 、 Ti 、 S が分析されている。化合物(W)はウスタイト(FeO)、化合物(T)は、 $\text{FeO}\cdot\text{Fe}_2\text{O}_3\cdot\text{TiO}_2\cdot\text{Al}_2\text{O}_3\cdot\text{V}_2\text{O}_5$ 系のチタン化合物、化合物(F)は $\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ 系化合物、黒色領域(D)は $\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2\cdots\text{Al}_2\text{O}_3\cdot\text{CaO}\cdot\text{K}_2\text{O}\cdot\text{Na}_2\text{O}\cdot\text{MgO}\cdot\text{P}_2\text{O}_5\cdot\text{TiO}_2\cdot\text{SO}_3$ 系のガラス質けい酸塩と判定される。チタン化合物が検出されていることから、T68鉤の地金の製造には、砂鉄が使用されたことを指摘できる。PL21-1から明らかなように、T70鉤、T71カスガイの非金属介在物もT68鉤と同様の組成である。PL21-2は鋼塊に観察された非金属介在物の2次電子像と反射電子像、EPMAによる定性分析結果である。非金属介在物は、ウスタイト(W: FeO)、 $\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ 系化合物(F)、 $\text{FeO}\cdot\text{Fe}_2\text{O}_3\cdot\text{TiO}_2\cdot\text{V}_2\text{O}_5\cdot\text{Al}_2\text{O}_3$ 系のチタン化合物(T)、 $\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2\cdot\text{Al}_2\text{O}_3\cdot\text{CaO}\cdot\text{K}_2\text{O}\cdot\text{Na}_2\text{O}\cdot\text{P}_2\text{O}_5\cdot\text{TiO}_2$ 系のガラス質けい酸塩(D)から成る。これら2点の鉄器の地金および鋼塊の製造にも、砂鉄が使用されていることがわかる。

4 考察

化学組成および非金属介在物組成に基づくと、解析を行った4点の鉄器は、鉄鉱石を原料鉱石として製造された地金を素材とするもの、砂鉄の使用によって製造された地金を素材とするものの2つに大別することができ、前者には小札、後者にはT68鉤、T70鉤、T71カスガイの3点が分類され

る。また、鉄器製作の素材となつたとみなすことができる鋼塊中の非金属介在物組成が、T68鉤をはじめとする3点の鉄器とはほぼ同じであることから、小札は製品として供給され、他の3点の鉄器は鋼塊を素材として遺跡内において製作されたとみなしても矛盾はない。中世の鉄器の流通品として小札があったこと、さらに館内において少なくとも鉄器の製作が行われていた可能性が高い。

最後に問題となるのが鋼塊の製造方法とその製造場所である。館跡内からは大量の鉄滓が検出されているという発掘の状況を考え合わせると、鋼塊をただちに流通品と断定することはできない。この点については、今後鋼塊とともに館跡から出土した鉄滓の解析結果を待って判断することしたい。

註

- 佐々木稔、村田朋美「古墳出土鉄器の材質と地金の製法」季刊考古学、8 1984年

VI 動物遺体・貝製品・骨製品

西本 豊弘・新美 倫子

勝山館遺跡の1991年度の調査で出土した動物遺体は約1300片である。それらは、貝類・魚類・哺乳類の遺骸が主体であり、破片数としてもっとも多いものは魚類であった。そのうち、魚類は新美が分担し、その他は西本が担当した。

貝類

イガイ類・ウバガイ・エゾタマキガイ・カキ類・ヒメエゾボラ・巻貝の蓋・種不明1種の計7種が認められた。包含量が低湿地であったため貝の皮が多くみられたが、そのほとんどはイガイ類と思われる。種不明の貝皮と貝殻もおそらくイガイ類のものと思われる。ウバガイとエゾタマキガイは破片が1点ずつみられただけである。ヒメエゾボラは、殻の保存状態が良いので、現代のものかもしれない。巻貝の蓋はその大きさからみてタボガイ程度の大きさの貝であるが種は不明である。これらに他に、種不明の二枚貝の破片が1点出土している。

ウニ類

ウニ類は、キタムラサキウニとエゾバフンウニの殻と棘がごく少量出土しているだけである。

魚類

マダラ・カレイ類が多く、他にカサゴ類・ニシン・サケ類・サメ類などが出土している。表2にその内容を示したが、その他に同定が困難な破片が761点出土している。

マダラは、体長1m程度の大きな個体の骨が多いが、60cm程度の資料も見られた。大きな椎骨が9個まとめて出土しており、個体数はあまり多くないかもしれない。なお、調理の際の切断痕と思われる切り傷のある歯骨・闇節骨・椎骨が各1点ずつ見られた。カレイ類は、体長30~40cm程度の中型の個体がほとんどで、それを越える大型の資料はなく、小型の個体もわずかであった。おそらく、マガレイ・スナガレイなどの種が主体であろう。カサゴ類では、椎骨は出土しておらず、頭部の骨のみが出土している。小型の個体が多いが、大型のものもある。大型の歯骨2点は、形態から見てシマゾイの可能性がある。ニシンはすべての

資料がよく成長した大型の個体である。頭部の骨が15点出土しているのに対して椎骨は1点しか出土していない。一般的には、ニシンの頭部の骨は薄くて遺存しにくいが、ここでは頭部の骨の方が多い。椎骨は別の所に捨てられたのであろう。

サケ類の椎骨は、完形または完形に近いのが多く、細かい破片は少ない。焼けている椎骨も2点見られた。椎骨のうち1点だけはサケ類かもしれないが、残りはシロザケタイプであった。サメ類は、すべてホシザメと思われる椎骨であった。マダイは、前鰓骨が中型であるのを除いて、その他はすべて体長80cm近いと思われる大型のものである。タイ類とした椎骨も大型の資料であり、おそらくマダイのものであろう。ヒラメの椎骨と尾椎は中型の同一個体のものである。ウグイ類は、体長30cm程度の個体と考えられる。スズキの上頸骨は大型で、調理の時に切断されたため先端部が欠損している。

鳥類

鳥類は、カラスの右桡骨と中足骨が1点ずつ見られただけである。

哺乳類

イヌ・ネコ・エゾシカ・エゾヒグマ・キタキツネ・ドブネズミ・アシカ類・ウマ・ヒトが出土している。その内容を表13に示した。イヌとネコが最も多く、その他は少ない。イヌの内容を見てみると、頭蓋骨では雄?の成獣1個体と雌?の成獣直前の個体と幼獣が見られる。下顎骨でも雄?の成獣が出土しているが、頭蓋骨とは別の個体である。その他の部位の内容を考慮すると、少なくとも成獣3個体と幼・若獣4個体の計7個体分が含まれている。表14では、主要な骨の大きさを示すと共に、成獣の骨で完全に残っているものからイヌの大きさから推測してみた。7点の資料から体高を推定したので、おそらく同一個体が含まれていると思われるが、イヌの大きさが体高44cmから49cmとなった。繩文犬よりもかなり大きい江戸時代の中型犬(現代の秋田犬程度の犬)よりも小さい。成獣の頭蓋骨(Na1)で形質を見てみると、

頸骨が外に強く張り出し、前頭骨の正中線でのくぼみが深く、物部は比較的幅広である。側頭線がブレグマ付近で接し、後頭部の矢状稜が高いためか、全体に遜しい印象を与えるイヌである。本州の中世のイヌはバティティーがあり、このようなタイプのイヌもみられるが、筆者の印象では、現代の北海道犬にかなり近いように思われる。なお、この頭蓋骨No.1の後頭部左側には、解体痕と思われる切り傷が5ヶ所みられ、このイヌが食料とされたか、または毛皮をぐるぐるに解体されたと推測される。下顎骨の1点(成歯、No.184)にも外側に解体痕が見られた。また、枕骨(写真図版23の8)では、近位部に骨の異常増殖が見られた。

ネコは、下顎骨5点をはじめとして45点出土した。各部位ごとにみると左右同一個体のものが多い。最小個体数は、成歯2個体・幼若歯3個体の計5個体である。ネコの形質については、特に大きなものや小さなものはなく、普通の家ネコと思われる。

エゾシカは、肩甲骨や上腕骨など16点が見られただけである。ウマは、成歯の上顎第1前臼歯と若い個体の下顎歯1点が出土している。保存状態が悪く、全長は計測できないが、いずれもかなり大きな個体である。ヒトは、白色化した焼けた頭蓋骨の小片が1点見られただけである。

当遺跡の今回の動物遺体の特徴を見てみると、

貝類ではイガイ類が多い。魚類では、まず魚種が限られていることがあげられる。同定可能な資料の中にはほとんど種不明のものではなく、ここで述べた種に分類することができた。また、各魚種における大きさのバリエーションが小さく、特にカサゴ類を除いて小型の個体が少ない点もあげることができる。これは、明らかに人為的な選択によるものであろう。哺乳類では、イヌとネコが多いことが特徴である。そして、イヌの骨の一部に切断痕が見られることから、イヌは食料とされていたと思われる。

貝製品

貝製品としてはマガキ?の右側の殻を利用したものが1点出土している(写真図版22-31)。側縁は研磨されており、中央に穴があけられている。

骨製品

骨製品は3点出土した。1点はエゾシカの中手骨か中足骨を加工したもので、矢またま鉛の中柄ではないかと思われる(写真図版22-30)。焼けて白色化しており、小さな破片となっている。

他の2点は、ヒグマの末節骨(爪の部分の骨)に穴を開けたもので、穴が1個と2個のものがある(26図・写真図版(22-28・29))。加工方法がよく似ているので、おそらく2個がセットで、「根付け」などに用いられたのである。

表12 魚類出土量

部位	カレイ類		マダラ類		カサゴ類		ニシン		サケ類		マダイ		その他
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	
前上顎骨	3	2			2								1
上顎骨	1	2	3	2	3	4							スズキL1
歯骨	2	4	4	7	2		1	1			1	1	
関節骨	3	4	6	3	3	1			1				
方骨	1	5											
前頭蓋骨	9	11			1	1						1	
蝶蓋骨			1	2	4	2	7	6		1			ウグイ類R2
椎骨	3	3	2	1			1		1	1			サメ類11、ヒヤメ5、タイ類1
その他	動骨3 第1血管間離 6								頭骨破片(骨7 あり)1、骨1	前頭骨 (右半分)1			ヒラメ尾椎1
計	8	9	5	1	2	1	1	6	1	5	5	2	1/218

● L: 左, R: 右。

表13 哺乳類出土量

部 位	イ ヤ ス	ホ ト	シ カ	そ の 他
頭 頭 骨	成犬♀1, 幼犬♀1, 幼1 (No.1) (No.2) (No.3)			ヒト?頭蓋骨片1 (歯骨) ヒツメイ?上顎骨1
下 頭 骨	R成犬1 L成犬♀1 L成犬1 (同一個体), R幼1	頭骨2 2底1, 2幼1		
肩 甲 骨	R成犬1 L成犬1	頭成1, 頭片1 L成1, 頭片1 L成1 (焼けている)	頭成1, 頭片1 L成1, 頭片1	
上 肩 骨	R成2 L成4		足, 小頭骨1 足1, 股1	アシカ♂若子1, L1
桃 骨	R成3, 若3 L成2	L成2, 若2	足骨1 足1, 股1	アシカ♂若子1, L1
尺 骨	R成1, 若2 L成1, 若2	L成1, 若1	L成1	キツネ 頭成1
罵 骨	R1骨1 L骨1	L成1 (同一個体, 成1), 幼1	頭片1	
大 駆 骨	R成1 L成1 (焼けている) L成2	L成1 (同一個体, 成1), 幼1 R幼1		
膝 骨	R成1 L成1, 若1, 上中間2	1, 同一個体 成1, 幼1 成1		ゾウネズミ?若1
髖 骨	L成1 L成1 (若4	L成1 (同一個体 成1, L成1)		
中 手・中 足 骨	9	2		
前 骨	3		1	ヒグマ2, (加工品)
椎 骨	頭1腰1 その他23	1		
肋 骨	35	6	3	海螺1
そ の 他	切歯骨幼L1 上犬歯L若2 前歯L若2 緊密骨片1		頭骨L1 頭骨幼骨1	ヒト?四肢骨片1 四肢骨片21 ウサ 上顎骨 (P) L成1 ウサ 下顎骨 (P ₁ ~P ₄) R成1
計	124	45	16	32/217

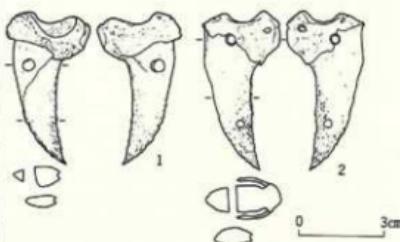
注: 成: 成獣 若: 若齢 幼: 幼齢 L: 左 R: 右 上: 近位部 下: 遠位部

表14 イヌ主要部位計測値 (成獣のみ)

部 位	計 測 項 目	計 測 値	測 定 高 (cm)	遺物番号
頭蓋骨No.1	最大長 (P-I) 基底頭蓋長 (P-IO) 頸骨幅 (gy-gy) 前頭幅 (Ect-Ect) 後頭幅 (an-an) 上LP ¹ 長	185.3 185.6 112.2 54.4 66.5 19.8	49	137
頭蓋骨No.2	頸骨幅 (gy-gy) 前頭幅 (Ect-Ect) 後頭幅 (an-an) 上LP ¹ 長	81.9 34.4 56.7 15.4	—	214 215
下顎骨 (R)	奥さ (id-Cn) + (id-goc) M ₁ 長	125.0± 123.5± 18.8	45	102
下顎骨 (L)	奥さ (id-Cn) + (id-goc) M ₁ 長	126.6 130.2 18.8	46	104
歯骨 (R)	歯大長	135.7	44	104
尺骨 (R)	+	171.5	46	104
大駆骨 (R)	+	162.5	47	102
脛骨 (R)	+	147.4	46	149

注: 計測項目は斎藤弘吉1963年「犬科動物骨格計測法」斎藤弘吉刊行による。

体長の推定は、山内忠平1968年「犬における骨長より体高の推定法」鹿児島大学農学部学術報告第7号による。



第26図 ヒグマ末節骨加工品(%)

VII 勝山館跡出土植物遺残の識別（1990、1991年度発掘）

松谷暁子

1 試料

試料は、1990年度および1991年度の発掘で出土した植物種子である。1990年度の試料が32点（表1）、1991年度の試料が33点（表2）を数える。大型の堅果類は紙箱の中に、水洗選別された小型の種子はプラスチック容器の中に、そして塊状の炭化物はポリ袋の中に保存されているものが多い。

2 方法

実体顕微鏡で種子の外形を観察し、一部の試料はSEM（走査型電子顕微鏡）で微細構造を観察した。また、塊状の試料は、実体顕微鏡下で分離して、SEMで観察並びに撮影を行った。

3 結果

1990年度の試料（表1）

10ミリ以上の大型果実の遺残としては、トチの果皮（写真1、2）、クルミの核：内果皮（写真3、4）、ウメの核：内果皮（写真5）が認められた他、径15ミリ位の果皮の厚い円形の種子が出土しており、ムクロジの種子と考えられる。北海道にはムクロジは自生が知られておらず栽培されていたと考えられる（写真6）。5ミリくらいの種子では、キハダ（写真7）、ハマナシ（写真8、9）、ヤマブドウ（写真10）、サルナシ（写真11-12）があり、ハマナシとヤマブドウの多いのが目立った。ツリフネソウ（写真13-14）やカヤツリグサ科の小さな種子（写真15）も認められたが、食用などに利用されたとは考え難い。

栽培種の殻類としては、イネとアワが識別され、イネ（写真16-17）もアワ（写真18-21）も穀が残存していた。長さ9ミリ、幅4ミリ位の種子（写真22-24）が一点検出されているが、ウリ類の種子と考えられる。

1991年度の試料（表2）

トチ、クルミ、ウメなどの大型の果実遺残はなく、5ミリから1ミリ位の種子として、サンショウ、キハダ、ヤマブドウ、サルナシ、アカザの類（写真35）が認められた。ツリフネソウやアブラナ属かと推定される円形の種子（写真34）も存在する。スギナ類の貯蔵根（写真36-37）もいくつか存在しているが、現在のものが混入したのであ

ろう。栽培作物としては、穀の残存したイネが比較的多く見いだされた（写真25-28、表3）。イネ粒の中には、大麦と考えられる粒が一粒混在していた（写真29-30）。種名はわからないが、マメ類（写真33）とウリの種子（写真31-32）も各一点認められた。小さな粒の塊状と見られる炭化物がいくつか存在し、特に1991年の試料に多い。走査型電子顕微鏡での観察によってアワの穎が検出（写真38-39）されたものや、球根かもしれないと考えられる構造（写真41-42）も観察されたが、よくわからないもの（写真40）も多い。

4 考察

前回識別された種類（松谷1989）と比較してみると、栽培植物ではイネが多く、麦類がほとんどないのは、前回と同じである。ただし、今回は一粒だけ大麦と考えることの出来る粒がイネ粒に混在していた。また、前回出土したソバやアズキは今回の試料では識別されなかったが、ウリの類が検出されており、マメも一粒見いだされている。そして、前回識別されたイネ科雑穀はキビだったのに対し、今回識別されたのはアワが主体でキビははっきりしなかった。ムクロジ以外の他の種類は野生の植物と考えられるが、樹木類では、前回にも認められたヤマブドウとキハダが今回も見いだされた。ただし、今回認められたキハダは果実ではなく種子ばかりである。

今回の出土物で目だったのは、ハマナシと考えられる種子で、きわめて多く出土している。海岸が近いことを反映していると思われるが、ヤマブドウと同じく果実が食用に利用された残りと考えられる。サルナシも果実を食用にした可能性がある。アカザ類の種子も多いが、アカザの食用部は若葉なので、この種子はツリフネソウやスギナの貯蔵根と同様、植生を示すものではあっても、人の食べ残しなどではないであろう。

文献

松谷暁子 1989「勝山館跡出土植物遺残の識別」『史跡 上之国勝山館跡X—昭和63年度発掘整備事業概報一』63-64、図版22-24。

表15 勝山館跡出土種子（1990年度）

番号	名 称	種 種	備 号
2	穀子1	トナ豆皮 カブド、未熟化(レバ ト)	写真7
4-1	穀子6-2	カブドウ	
4-2	穀子7-6-2	カブドウ	写真10
5	N-8	タムシ	写真3
6	N-9	タムシ	写真4
10	N-17	?	
11	N-17	不明種子(未定)	
12		不明	
15-1	炭化物	トナ豆皮	写真1
15-2	N-36	不明	
16	N-46	玄米種	
18	N48	トナ豆皮	写真2
22	N-87-1	ハーナス	
24-1	N-85種子サンプル	カブドウ	
24-2	N-85種子サンプル	カブドウ フリソウ タムシガリダギヤ科	写真11-15
24-3	N-85種子サンプル	カブドウ	
24-4	N-85種子サンプル	カブドウ	
25	穀子1	ハーナス	
26-1	N-30	タムシ	
26-2	N-30	ハーナス	写真8-9
28	N-47	ムクロジ種子	写真6
29	N-51	*	
32	N-1	稻穀米	
34	穀子1	ハーナス	
35-1	穀子2-2	ハーナス	
35-2		?	写真22-24
35-3		ハーナス	
35-4		ハーナス	
36	穀子3	タムシの核	写真5
37	穀子4	?	
38-1	穀子4-2		
38-2	穀子6-1サンプル	カブドウ	
38-3	穀子6-1サンプル	カブドウ ハーナス	
39-1	穀子8-2		
39-2	穀子8-1	カブドウ、ハーナス	
39-3	穀子サンプル	カブドウ、ハーナス	
41		アラ粒種保存	写真16-17
42	N-1	稻米(未定)	
43	N-2	炭化物?	
44	C-1(炭化米)	アラ粒種保存	写真28-31
45		不明種子(?)	
46		稻谷壳?	
47		不明小粒子	
48		不明種子	

表17 勝山館跡出土土種子（1991年度）

番号	產 地	種 種	備 号
1-1	16L2、土塗20	サルテン	
1-3	16L2、土塗4	イヌウツギ	
2	16L3	カズラ	
3-4	16L3	サンショウウコン、アカゼ	
4-1	16L9	物付種子イネ	
4-2		炭化物?	
4-3		物付種子イネ残	
4-4		物付種子イネ残	
4-5		村井?	
5	16L13	サンショウウコン	
6-1	16L24、土塗10	サルテン	
6-2		内形種子	
7	16M23、P99	イネ、且出脚	
8	16M24	サルテン、凹形種子	
9-1	16M25、土塗3	スギナガ麻原	写真36-37
9-2		アカゼ	写真35
10	17L3	イネ、サンショウウ	
11-1	17L4、土塗2	サンショウウ、アカゼ	
11-2		サルテン	
11-3		マメ	
11-4		サンショウウ、アカゼ	
12	17L12	イネ物付粒9、大実1	
13-1	17L13	不明種子	
13-3		サマヅシヨウ	
13-4		アカゼ	
14		サルテン	
15-1	17M3、土塗3	サマヅシヨウ、サンショウウ	
15-2	17M6、土塗21	アカゼ	
15-3		不明種子	
15-4		炭化物?	
15-5		炭化物(糠粃?)	写真41-42
15-6		不明化粧粒	
15-7		不明化粧粒	
15-8		カバダ	
15-9		コメ、サマヅシヨウ、アカゼ	
15-10		不明化粧物残	
15-11		アカゼ	
15-12		サマヅシヨウ	
15-13		サマヅシヨウ	
15-14		サンショウウ	
15-15		マツヅシヨウ	
15-16		サマヅシヨウ	
15-17		アカゼ	
15-18		不明粒	
15-19		不明粒	
15-20		サマヅシヨウ サンショウウ キヘイ	
15-21		サマヅシヨウ	
15-22		不明粒	
15-23		サマヅシヨウ 半粒10	
15-24		玄米1粒	
16	17M6	イネ、サマヅシヨウ、サンショウウ	
17-1	17M7、土塗20	アカゼ	
17-2		スギナガ麻原	
17-3		スギナガ麻原	
17-4		アカゼ	
17-6		不規	
18	17M13、土塗	不規	
19-1	17M13、14、土塗11	不規種子、スギナガ麻原	
19-2		アカゼ	
19-3		スギナガ麻原	
19-4		サンショウウコン、スギナガ麻原	
20-1	17M18、土塗2	炭化米	
20-2		アカゼ	
21-1	17N10、土塗1	凹形種子	
21-2		アカゼ	
21-3		不規	
22-1	17N15、土塗	カブドウ、アカゼ	
22-2		アラ役(頭粒)	
22-3		アカゼ	
23-1	17N15、土塗2	サマヅシヨウ	
23-2		サマヅシヨウ	
23-3		アカゼ	
24-1	17N15、土塗25-1	カブドウ	
24-2		リコ	
25	17N15、土塗25-1	サマヅシヨウ	
26	17N15、土塗25-1	サマヅシヨウ、スギナガ麻原	
27-1	17N15、土塗23-1	サマヅシヨウ、スギナガ麻原	
27-2		アカゼ	
27-3		不規粒	
28-1	17N15、土塗39	不規	

表16 勝山館跡出土炭化米計測

長さ	幅	厚さ	備 号
4.4	2.5	1.76	K-3, 17L13
5.0	3.0	1.56	
4.8	3.3	1.45	
4.5	2.8	1.60	
4.6	2.3	2.00	
4.6	2.3	2.00	
4.9	2.5	1.96	
4.5	2.5	1.86	
4.0	2.5	1.60	
4.8	2.0	2.46	

VIII まとめ

二重の空塗や柵列、横矢、あるいは矢倉など、様々な工夫を凝らして防禦の整えられた第二平坦面の一画に、相当に大きな建物が建てられていたらしいことが想定されるところとなった。柵列や空塗から比較的近く、広い平坦地が広がることを除くと必ずしも一等地でもないよう感じられるところであるが、鈴木亘先生のいわれる「客殿」の類とするならば、館の中では最上級に近い建物ということになるかと思われる。窓穴建物跡がないこと、小石囲みの配石遺構状のもの、志野や唐津の高級品の類が埋蔵する地区かと推測されることなど、幾つかの特徴的な様相を示している地区であり、鈴木先生の指摘にある建物と本調査区との相互関係を更に細かく検討することが必要である。

志野や唐津など勝山館終末期の高級品の出土に関連することとして天正17年（1589）の松前氏五代（後松前藩初代藩主）筋崎慶広の上ノ国滞在の「新羅之記録」や「福山秘府」の記事があげられる。又、幾分年代が下るが、慶長15年（1610）配流となった花山院忠長が3月から少しの間、上ノ国に滞在するが、これは勝山館内ではなかったかとの説（統上ノ国村史）にも留意すべきかも知れない。從米から筆者は、寛政元年（1789）この地を廻った古河古松軒が慶長のはじめまで居城であったとの村人の話を記し（東遊記）、慶広の代（天正10～慶長4年？）には上ノ国和喜之城代（勝山館城代）に酒井七之助を置いた記事（新羅之記録）のあることから、16世紀末を勝山館の終末と想定しているところではある。

館の築造について、左右と前方は自然の深い谷など、地形を巧みに利用した山城として把えてきたところであった。昭和62年正面に二重の空塗があるらしいことが判つてからの調査でかなり大規模な土木工事の行われていることが明らかになつてゐるが、本年度の調査区端部にその具体的な手法、工夫の一端を知ることができた。おそらくは館の選地から全体の工事計画や細部の工法にいたる迄相当な知識等を有した専門家が介在し、それに基づいた人力の勤務者が相伴つてこの館は築造されているのであろう。

数年前、はじめて勝山館跡に立たれた朝尾直弘先生が「この館には、城づくりの専門的な知識や経験等を持った本州系の築造者が関わっているようだ」と最初に指摘されたことを改めて想い起こすところである。

5.5kgの銅塊はあらためて勝山館の鉄の問題に焦点をあてるものとなるであろう。昨年のるっぽの出土など、銅も含めた鍛冶関連技術の存在をどのように理解し、又それが館の成り立ちにどう関わっているのかは、館の、或いは北に館を構えた集団の本質に迫る大きな要素の一つと把えているところであり、この銅塊の持つ意味は小さくない。

赤沼氏にお願いした金属学的解析の結果によればこの銅塊は砂鉄を始発原料とするものであり、同じ非金属介在組成が、館内から出土している漁具、釣、釘にも見られるところであり、館内での鉄器生産を想定することに矛盾はないらしい。ちなみに釣の重さは21g、釘は1.7g、（鍔は残欠1/2）であり、この銅塊から単純には各々約260個、3,200本程が作り得ることになる。

動物、魚類遺存体と植物遺残の1990年出土となっている物は共に正面空塗の中央下部から空塗の掘り上げに伴つて出土したものである。更に勝山館内での食生活の内容が詳しきくなつた。特に魚類に調理による切断痕が多く見られたこと、限定された魚種で大型の魚体が多いといった人為的選択が見られるところは興味深い。カレイ、タラ、カサゴ、ニシン、サケ、マダイ、サメ、ヒラメなどであり所謂雜魚の類がないのは、前年度及本年度調査区内の大型の建物跡に似つかわしいものとこじつけられなくもない。なお犬の解体については江戸期の松前城下村々に鷹の飼育として家毎に犬を三四つずつ飼い置くべき定めがある（松前福山譜録延宝9年—松前町史史料編1）ことから、この時代にもその可能性のあることを述べたことがあり、西本氏も同様の示唆をされている（本概報II他）。

植物遺存体の分析では新たに大麦、アワ、マメ、ウリ等が見つかり、コメ、キビ、ソバ、アズキなどの前回迄の種類が更に豊富になった。

第二平坦面の端部、柵列や塗に近い広い平坦面

で比較的大型の建物跡が、二年間の調査で見つかった。遺物等にも一部良質の物が見られるなど、館内の新たな階層の存在を示すようでもある。細部に亘る遺構、遺物の検討を行うことによりその実体に追うこととしたい。又その為にはなお本調査区の南東・南西部・更には中央通路を夾んだ南

東の平坦部等の状況を把握する為の発掘調査も必要と思われる。

まだ勝山館の姿は容易に姿を現わしてくれないようである。諸先生、諸先学の一層のご指導をお願い申しあげたい。

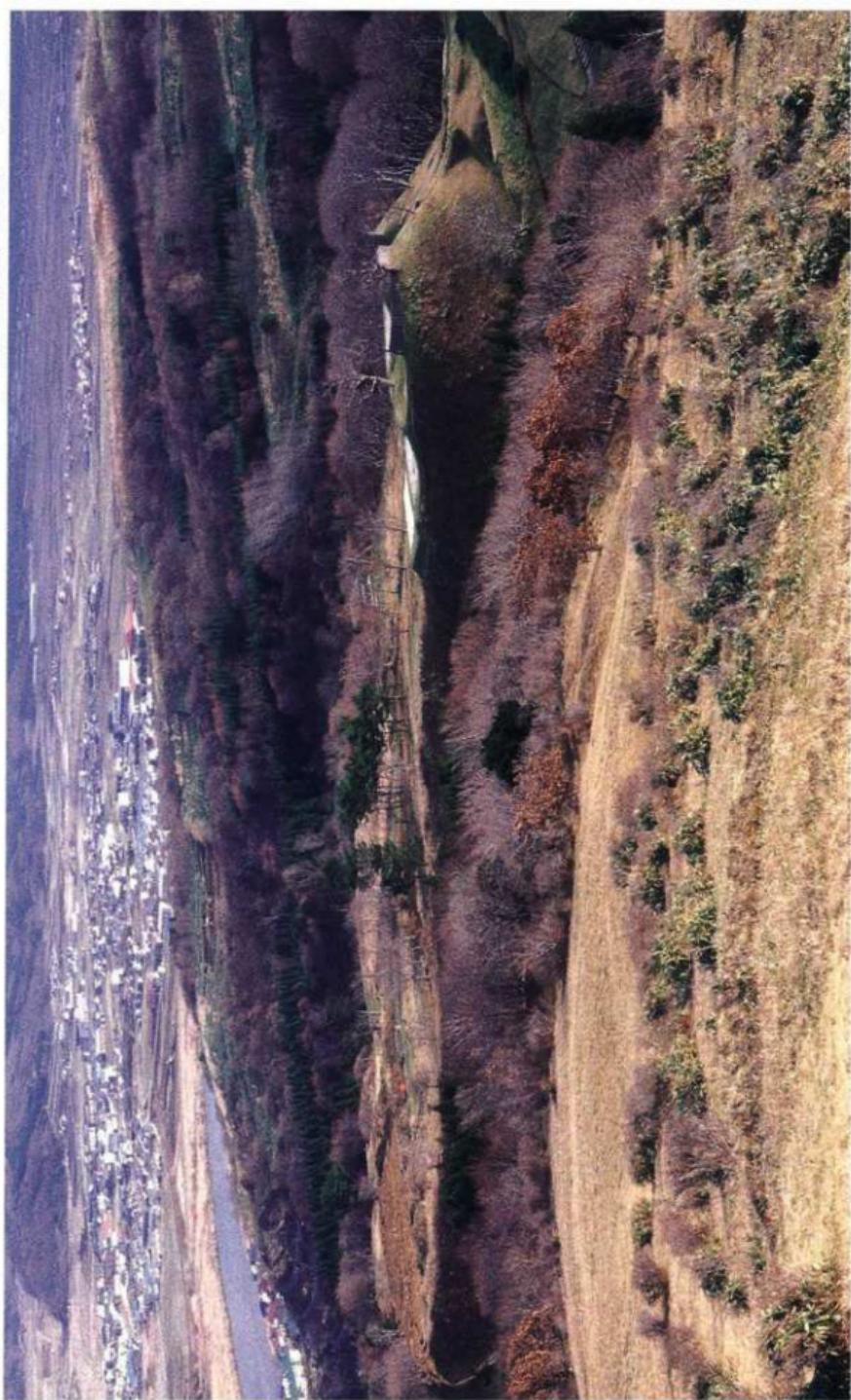
(52頁から続く) 今年度は250点の処理を行なった。メス等による錆除去、エタノール脱水後ベンゾトリアゾールの2~3%溶液による減圧含浸¹¹を行なった。また特に脆弱化している遺物についてはその後さらにバラロイドNAD-10の30%ナフサ溶液による減圧含浸註1を行なった。処理遺

物の内訳としては鉄が多く、その他小札、小柄等である。

註1 京都芸術短期大学 内田俊秀氏の御教示を得た。誤りは筆者の責である。

図 版

P.L. 1 遺跡遠景（南西夷王山山頂から）



P L. 2 造構検出状況

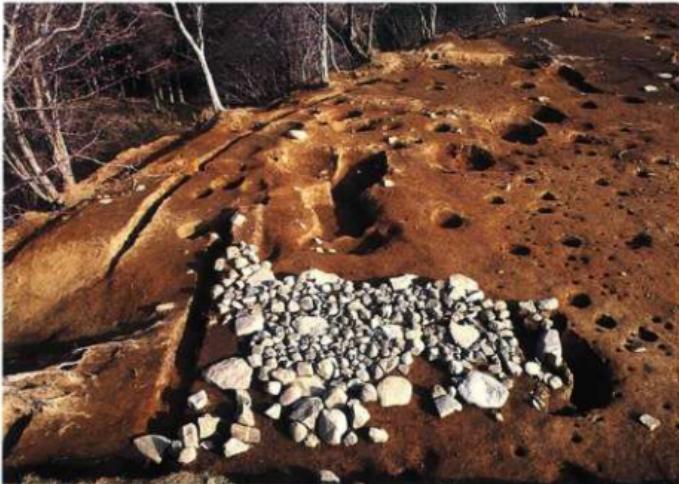


造構検出状況(東から)



造構検出状況(南西から)

1 石敷・礎石建物跡(南西から)



2 石敷礎石建物跡(南東から)



3 石敷と土壤

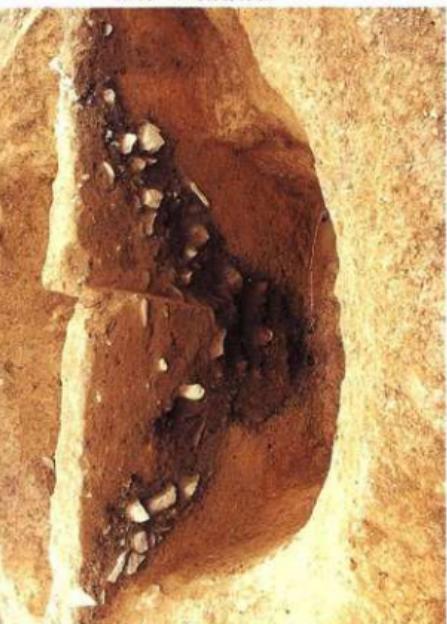


P L. 4 土壤調查狀況

1 土壤1 遺物出土狀況



2 土壤22 土層堆積狀況



3 土壤28 遺物出土狀況



4 土壤9 土層堆積狀況



1 棚列跡・溝跡(南東から)



2 小石囲み配石遺構(南西から)



3 小石囲み断面



P L. 6 調查狀況

— 廉政辦十號地質



2 級物理試驗



3 土壤腐解狀況



4 繩文土器由土狀況

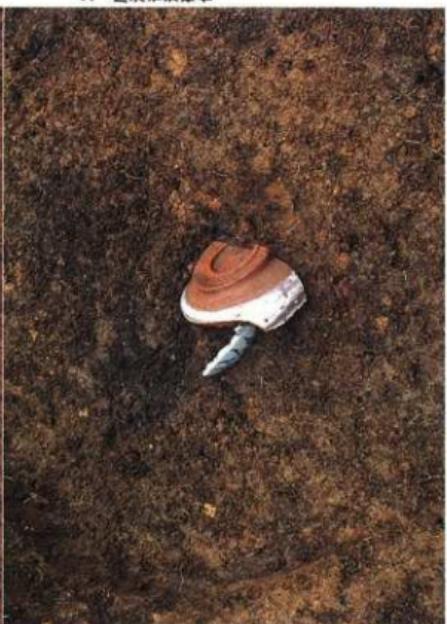


PL. 7 遗物出土状況

1. 青瓦・板瓦等の瓦器



2. 陶軸承形器



3. 陶瓶



4. 陶瓶



2. 同底部



1. 志野向付・碗

4. 季朝(粉青沙器)



3. 志野向付・鉢

5~8 鐵塊



P.L.9 調査区 中景



勝山館主体部
(北から)

調査区（北から）

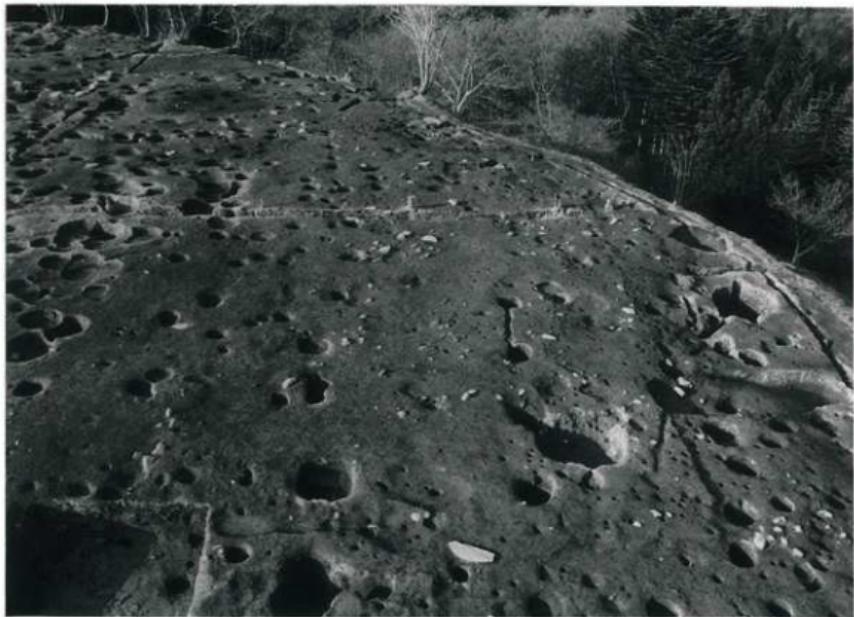


調査区（南西から）

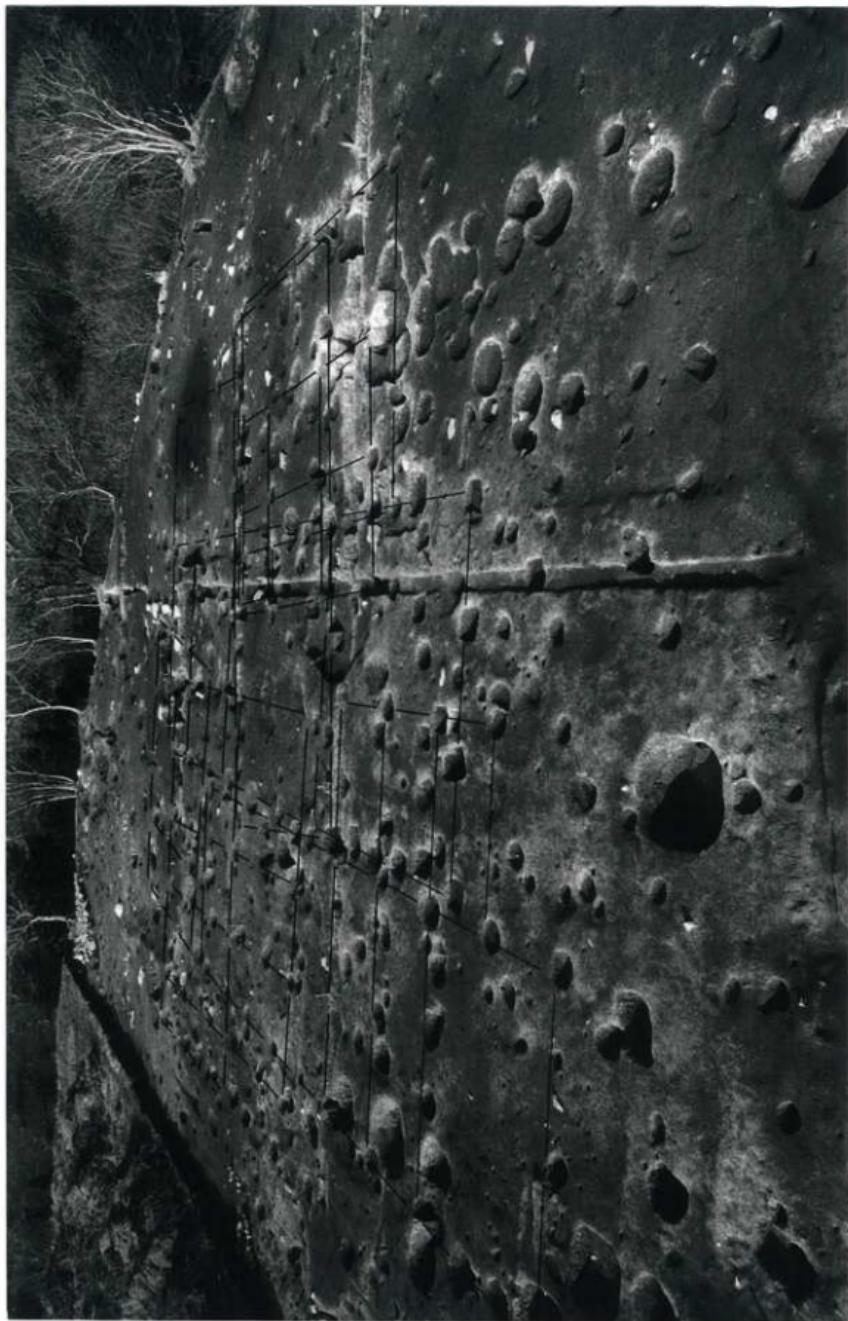


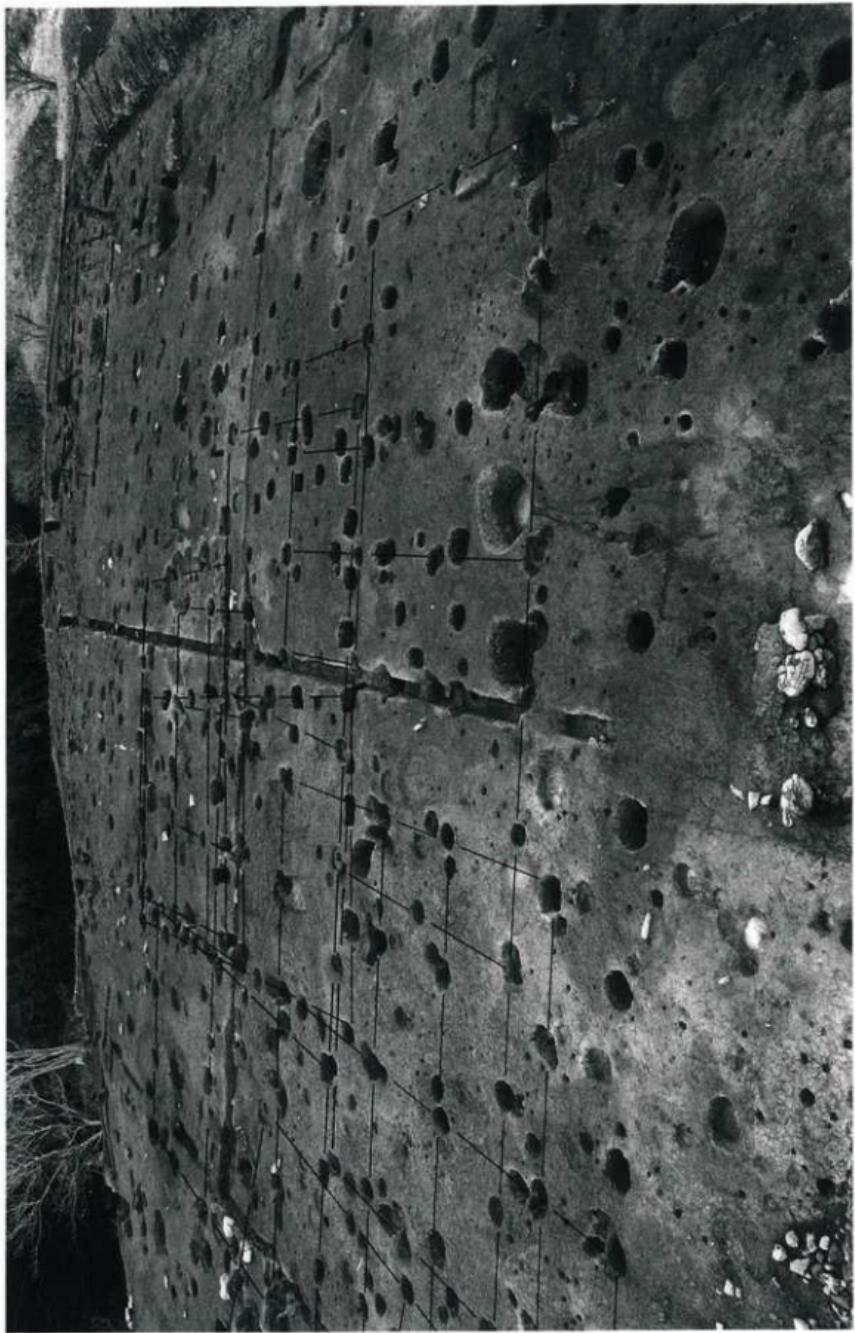


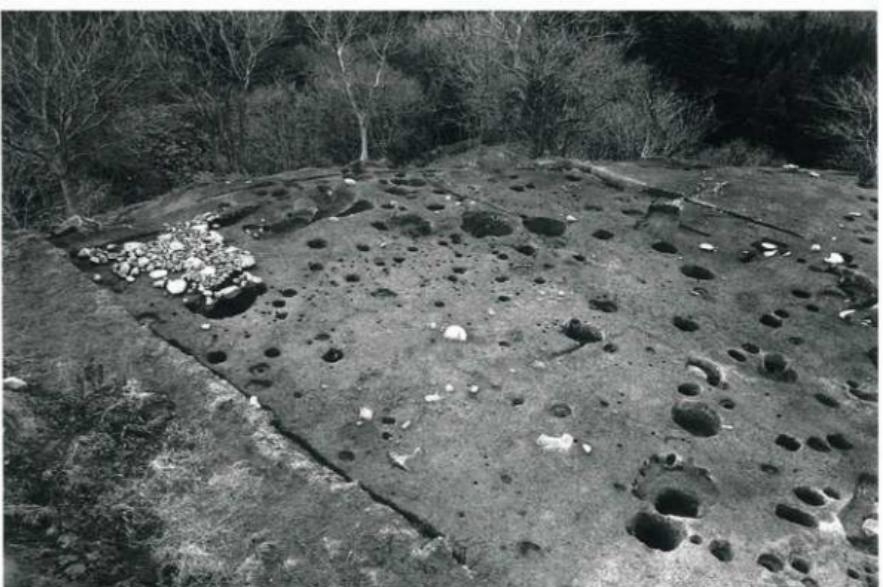
柱穴検出状況（東から）



柱穴検出状況（端部に柵列が巡る—南東から）







PL.13 造構検出状況(石敷・礎石建物)



床面上部小柱穴



全景



土層堆積



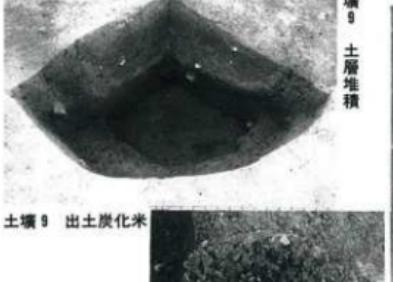
土壤 22



土壤 29
土層堆積



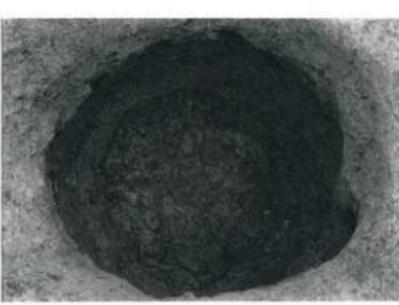
土壤 9



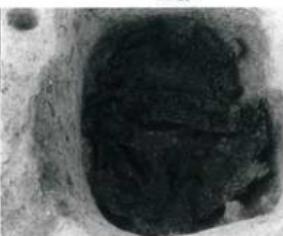
土壤 9 出土炭化米



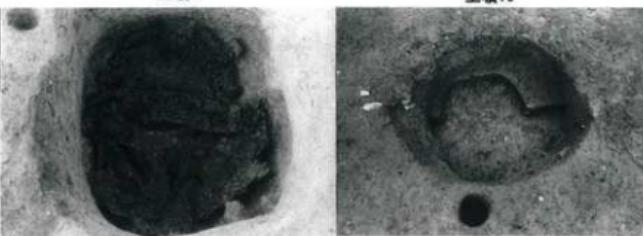
土壤 6
土層堆積



土壤 10



土壤 7



土壤 15



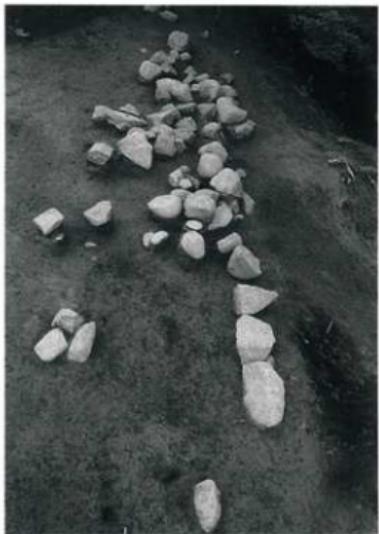
土壤 27



区画溝



端部枠列



端部枠列上部の集石

P.L.17 造構検出状況（小石囲み配石造構）



造構位置



検出状況（南東から）

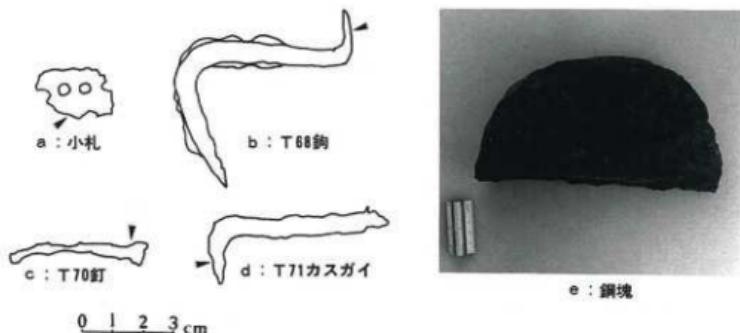
検出状況
(南西から)



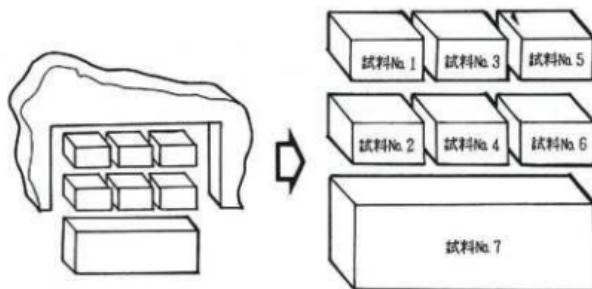
P L.18 擦文土器出土狀況他



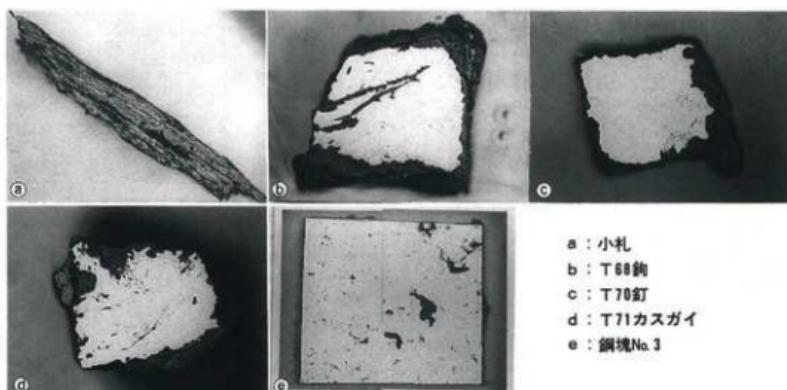
P L.19 鉄製品分析資料



P L.19-1 資料の外観（矢印は試料採取位置を表す）

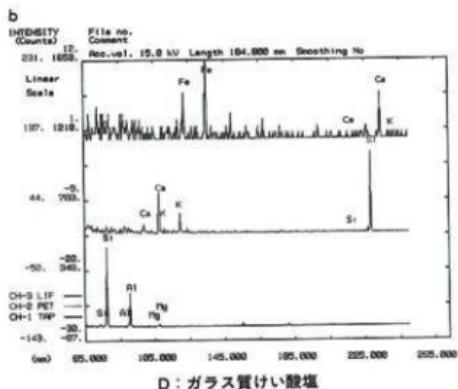
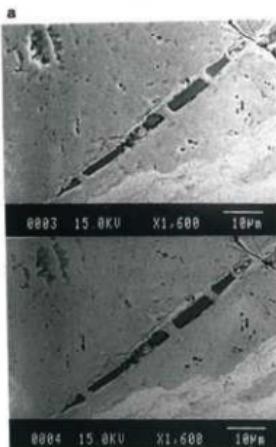


P L.19-2 鋼塊から採取した試料片

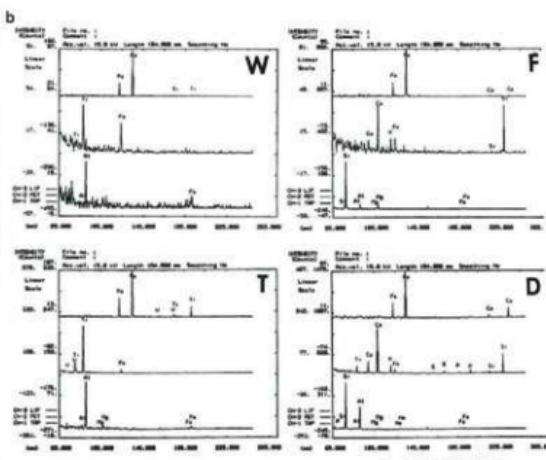
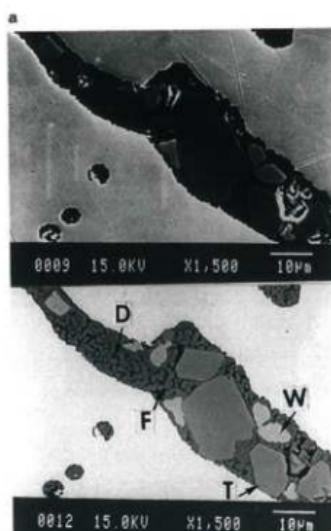


P L.19-3 鉄器、鋼塊のマクロ組織

P L.20 鉄製品分析資料



P L.20-1 小札に観察された非金属介在物の2次電子像と反射電子像、およびEPMAによる定性分析

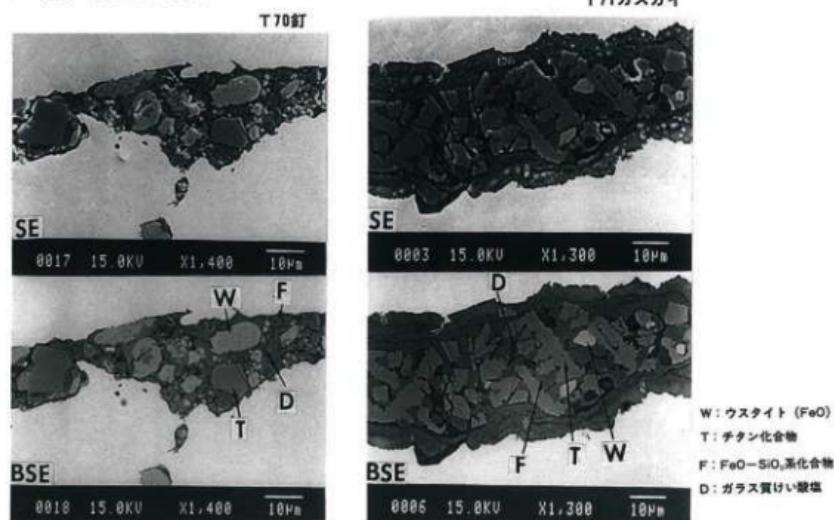


T : チタン化合物

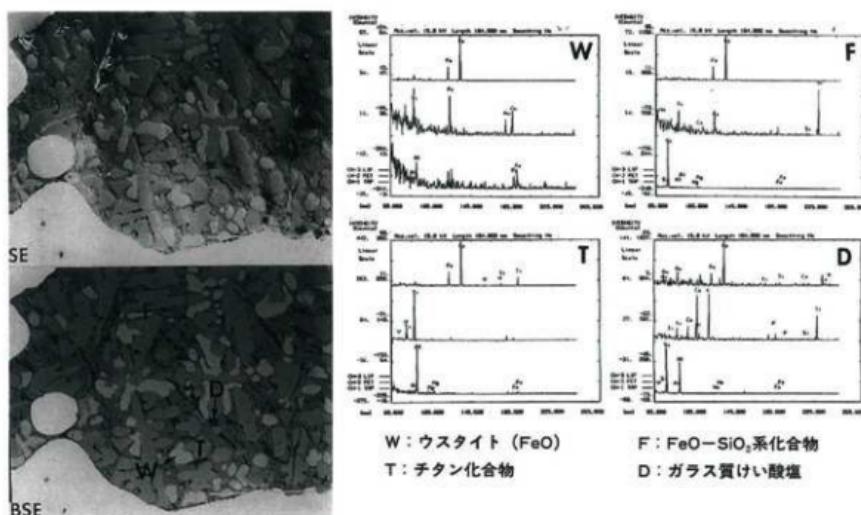
F : FeO-SiO₂系化合物
D : ガラス質けい酸塩

P L.20-2 T60鉄のメタル中に観察された非金属介在物の2次電子像と反射電子像
およびEPMAによる定性分析

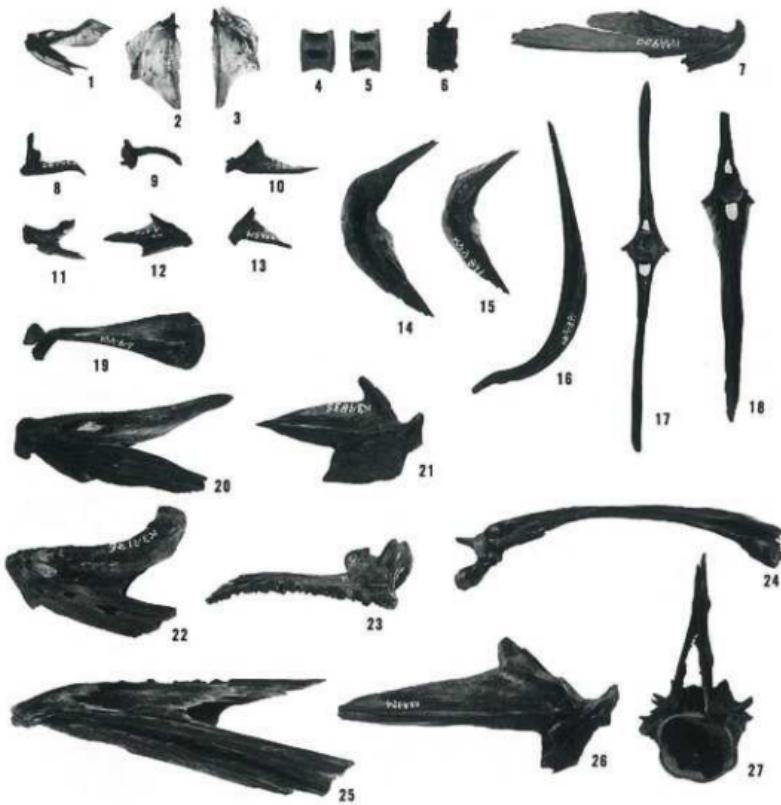
PL.21 鉄製品分析資料



PL.21-1 T70釘・T71カスガイに観察された非金属介在物の2次電子像と反射電子像
およびEPMAによる定性分析



PL.21-2 鋼塊に観察された非金属介在物の2次電子像と反射電子像、
およびEPMAによる定性分析



PL.22 魚類・貝製品・骨製品(約3%)

1～3. ニシン(1. 齧骨 2・3 主鰓蓋骨) 4・5. ホシザメ椎骨 6. サケ椎骨 7. サケ間節骨 8～18. カレイ(8. 前上顎骨 9. 上顎骨 10・13. 方骨 11. 齧骨 12. 間節骨 14・15. 前鰓蓋骨 16. 第1血管間隸 17. 椎骨) 19～21. カサゴ頭(18. 上顎骨 20. 齧骨 21. 間節骨) 22. マダイ齧骨 23～27. マダラ(23. 前上顎骨 24. 上顎骨 25. 齧骨 26. 間節骨 27. 椎骨) 28・29. ヒグマ末節骨加工品 30. 中納? 31. 貝加工品
1・2・7・8・12・13・19～22・25・26は左側、3・9～11・14・15・23・24は右側。



PL.23 イヌ・ネコ・ウマ(約2分)

1~11. イヌ (1・2. 頭蓋骨 3~5. 下顎骨 4は解体痕が見られる 6. 肩甲骨 7. 上腕骨 8. 桡骨) (近位置に病変あり 9. 尺骨 10. 大腿骨 11. 脛骨) 12~13ウマ (12. 上頬第1前臼齒 13. 下頬前臼齒) 14~20. ネコ (14・15. 下顎骨 16. 肩甲骨 17. 桡骨 18. 尺骨 19. 大腿骨 20. 脛骨)

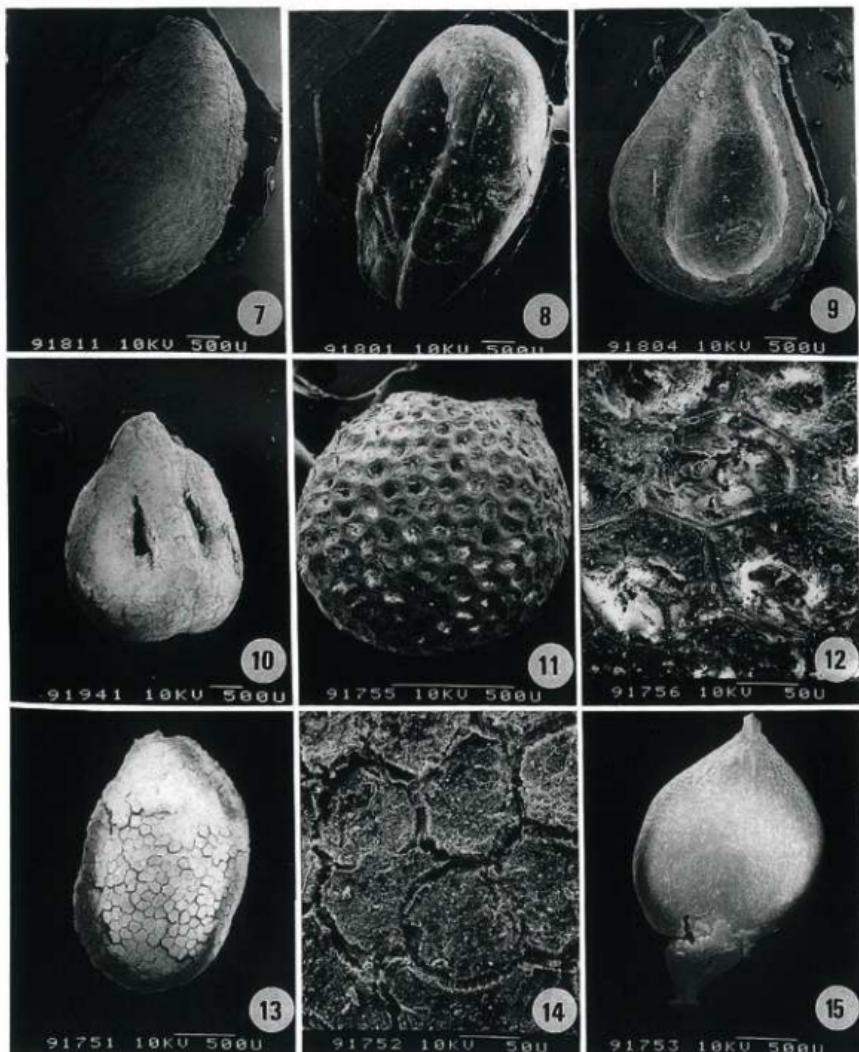
3・6・8~11・13・16は右側、4・5・7・12・14・15・17~20は左側。

P L. 24 大型果实 (実体顕微鏡写真、1990年度出土)



- 1 トチ果皮 (試料1990-15)
- 2 トチ果皮 (試料1990-18)
- 3 クルミ内果皮 (試料1990-5)
- 4 クルミ内果皮 (試料1990-6)
- 5 ウメ内果皮 (試料1990-36)
- 6 ムクロジ種子 (試料1990-28)

PL.25 小型種子（走査型電子顕微鏡写真、1990年度出土）



7 キハダ種子（試料90-3）

8 ハマナシ種子（試料90-26）

9 半分に割れた状態のハマナシ種子（試料90-26）

10 ヤマブドウ種子（試料90-4-2）

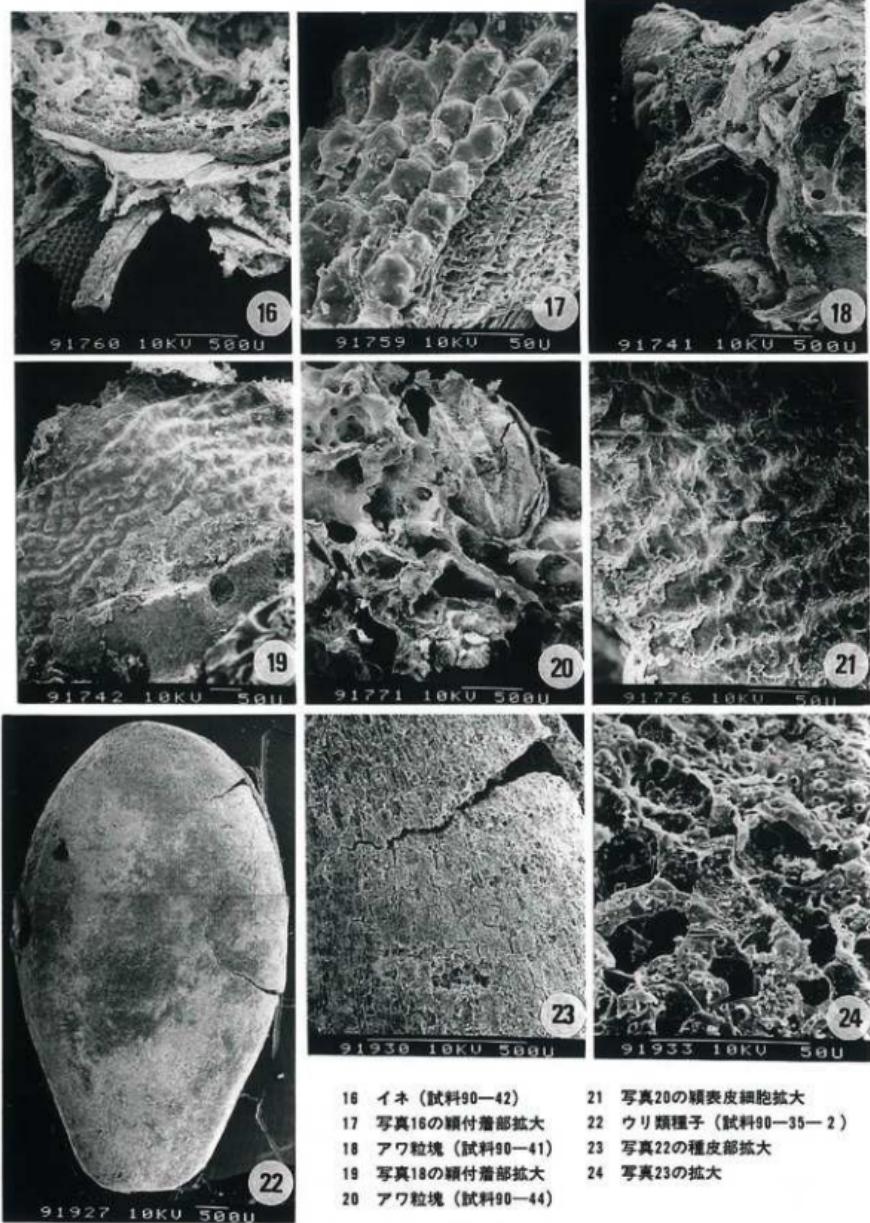
11 サルナシ種子（試料90-24）

12 写真11の種皮拡大

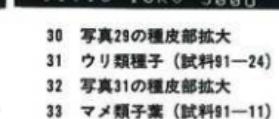
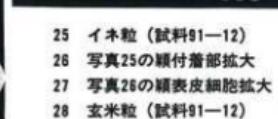
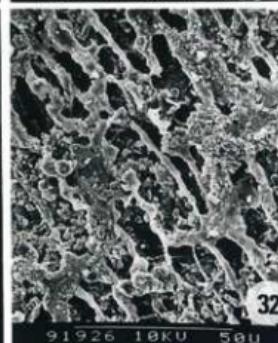
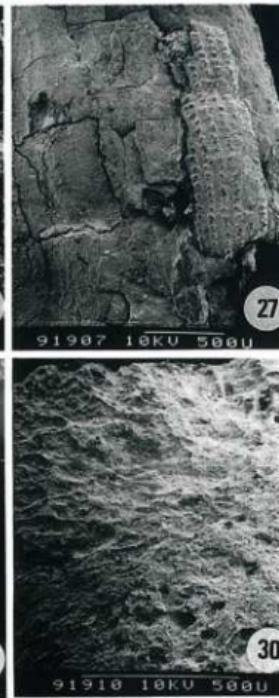
13 ツリフネソウ種子（試料90-24）

14 写真13の種皮拡大

15 カヤツリグサ科種子（試料90-24）



PL.27 栽培植物 (走査型電子顕微鏡写真、1991年度出土)



25 イネ粒 (試料81-12)

26 写真25の頸付着部拡大

27 写真26の頸表皮細胞拡大

28 玄米粒 (試料81-12)

29 大麦粒 (試料81-12)

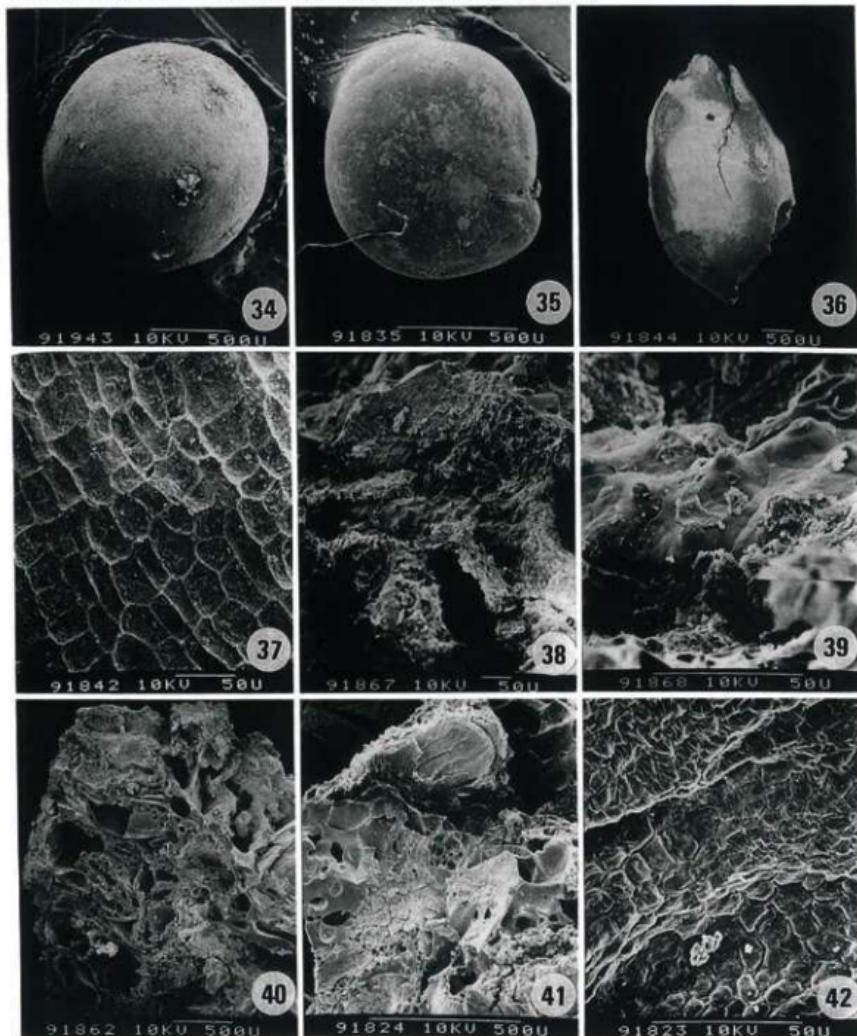
30 写真29の種皮部拡大

31 ウリ類種子 (試料81-24)

32 写真31の種皮部拡大

33 マメ類子葉 (試料81-11)

P.L.28 その他の種子と塊状炭化物（走査型電子顕微鏡写真、1991年度出土）



34 円形種子（試料91-21）

35 アカザ種子（試料91-9）

36 スギナ貯藏根（試料91-8）

37 写真36の拡大

38 アワ粒塊（試料91-22-2）

39 写真38中央部拡大

40 不明塊（試料91-15-19）

41 球根塊？（試料91-15-4）

42 写真41上方拡大

史跡 上ノ国勝山館跡 XIII

—平成3年度発掘調査環境整備事業概報—

発行 上ノ国町教育委員会

北海道松山郡上ノ国町大留100

印刷 平成4年3月25日

発行 平成4年3月31日

印刷所 株北海道機関紙印刷所

